
侍HOLE!!

詩音

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

侍HOLE!!

【Nコード】

N2798C

【作者名】

詩音

【あらすじ】

真つ暗な穴を通り抜ければ、歴史とは少し……否かなり違う江戸時代が広がっていた――。元女子高生のファンタジーっぽい日常生活をご覧ください。 加筆修正致しました。

いち。
(前書き)

真面目な歴史小説ではありませんので、それでもかまわないと言っ
方のみどうぞご覧ください。

いち。

あたしは葛西寿々（カサイズズ）、十七歳の高校生。

成績も見た目も中の中、特別な趣味も能力もない平凡を地で行くあたしはたった今。

「ぎゃあああっ！」

異様に深い暗闇の中に落ちてます。女らしからぬ奇声はまあこの際置いておいて。

「ちよつと待つて！ いやホント意味わかんないからああっ！」

叫びは暗闇に吸い込まれるように小さく聞こえる。せつかくセツトした自慢のロングヘアは逆立って、着地したらきつと悲惨なことになってるんだと思う。

「つていうか何処まで落ちるの！？」

落ち続けること五分くらい。……落下時間長くないですか？

いつも通り授業を受けて、いつも通り部活をサボって帰ってたらマンホールに落下。

「いぎゃあああっ！」

我ながらこれだけ叫べるのはすごいと思う。そんな馬鹿げたことを考えてると、下の方から光が見えてきた。

「日本の真下に落ちてるから、日本の裏側……ブラジル？ え、ブラジルに落ちるの？ 何語だっけ……」

落下しているせいか頭はパニック状態を通り越して開き直り気味。その間にあたしは暗闇の穴の出口を抜けた。

「い……ったいなあ」

落下先は何もない、ただ真っ白な世界。うつ伏せに着地、もといへばり付いたあたしの視界にビーチサンダルを履いた足が入ってきた。

徐々に視線を上げていくと、ブラジル人らしからぬ白い貧弱な足。もつと背中を反らすと薄く白い布を纏った中年男がいた。

「こんにちはー、葛西寿々さん」

無精髭の生えた中年男はニツと笑う。フレンドリーぶって、ひらひら降る手のひら。

でもあたしにはそこより気になることがある。

「ブラジル人じゃなくて日本人？」

「や、何言ってるんのよ君」

冷静な中年男の突っ込みに、あたしの頭は冷却まっしぐら。

いつまでも寝そべってるわけにはいかないから、制服のスカートをはたく。埃なんてないくらい真っ白な世界なんだけど気分的にね。

「アンタ誰？」

「落ち着いたみたいだな。俺は……カミサマだ！」

自分を指差し偉そうな口調で言った。後ろには眩しい光を背負っている。

「はあ？」

目の前の人が頭打っておかしくなったのかと思った。っていうかカミサマだ、までの間には必要だったんだろうか？

「いいんだ……どうせ俺はカミサマになんか見えないよ」

いじいじ地面に指を突っついて落ち込む自称カミサマ。このままじゃ謎が解けず話が進まない。

「カミサマ、とりあえず信じてあげるからさっさと立ち直って」

「……ようやく俺がカミサマだとわかったか。じゃあ俺を敬え！」
「殴るよ？」

「ごめん、ホント申し訳ない」

変わり身の早い、小心者なカミサマにあたしは小さくため息を吐いた。

こんな人が神とか……有り得ないんですけど。

「で、ここはどこ？」

「天国……っていうのは嘘！ 嘘です！」

拳を作ればカミサマは怯む。妙なことを知ってしまった。

「ここは時の狭間」

「時の狭間？」

「現代と過去の間って奴だ」

「何であたしがそんな場所にいるの？」

普通に考えてあたしがカミサマに選ばれるなんて有り得ないですよ。

身長も体重も何もかも平均値のあたしを選んで何の得があるって言うわけ？

「面白そうだから」

「……は？」

「江戸に行つてこい、葛西寿々」

カミサマが無駄に決め顔で指をパチンと鳴らす。
その瞬間、あたしのところにあつた床が消えた。

「へっ？」

再び転落。暗闇に真つ逆さまだ。

「せいぜい新しい生活を楽しめ」

「ふざけんな馬鹿あ！」

不敵に笑うカミサマに、あたしの叫びは届いたかは微妙なところだ。

「駄目だつて！ ホントに無理だつて！」

叫んでも叫んでも、聞いているのはあたしだけ。それもそのはず、今は空から地面に急降下中。

青い空が涙で霞んで見える。気圧で耳がおかしくなりそう。

「誰かあたしを助けてくださいー！」

結局あたしは落ちた。ただ良かったのは、海に落ちたこと。

「ぐえっ……！」

勢いよく海に落ちたせい、体がムチ打ちに遭つたように痛む。
制服が海水を吸い込み、どんどん重さを増していく。

意識が遠のく中、最後に見たのは金髪の男の人だった。

いち。
(後書き)

いかがでしたか？恐らく長々と続くかと思われませんが、読んでやってください……。

に。

古びた木造の天井が見える。床は所々ほつれた畳。あたしはその上に敷かれた布団に横になっていた。

物凄く体が重い。寝たまま手のひらを開け閉めして生きてる実感を持つ。

「生きてますよ」

声の元に顔を向けると金色の長い髪を後ろに束ねた男の人。

目元は涼しげで動く様もかなりスマート。絶対この人モテるタイプだ。

「だれ？」

駄目だ、落下中に叫び過ぎて声がちよつと枯れてる。弱々しい自分が情けなくて泣けてくるよ。

「初めまして。藤沢元と申します」
フジサワハジメ

私の声は辛うじて届いたらしい。柔らかな笑顔でそう返された。深い青色の着物をゆったり着こなす藤沢さんは間近で見るとなかなか綺麗な顔立ちをしてる。

「気分はどうですか？ 井戸水でよければ持つてきますよ」

「……井戸水？」

あたしは無理矢理上半身を起こす。少し痛むものの、それほど辛くはなかった。

「ここって、もしかしなくても江戸時代ですか？」

信じたくないけどカミサマが言ってたことだ。ホントにアイツがカミサマなら、返ってくる言葉は決まってる。

「そうです。やはり貴方は穴から落ちてきたようですね」

藤沢さんは微かに顔を歪めた。

「穴から、ですか？」

「落ちてきたでしょう？」

あたしは首を縦に振る。安っぽいジェットコースターよりずっと

怖かった。

「それは次元の穴と言います。二日に一度は江戸のどこかで開くものなのですが……」

「？」

「今まで人が落ちてきたのは聞いたことがありません」

特例ってヤツか、あの自称力ミサマ野郎。

「もしもし？」

「あ、すいません」

目の前の人に怒ってもしょうがない。第一藤沢さんは無関係だもんね。

「いえ……水、飲みますか？」

「すみません、いただきます」

喉の奥がからからでちよつと痛かった。

「ではもう少し寝ていてください。井戸まで距離がありますから」
ふわりとまた笑顔を見せて藤沢さんは腰を上げた。

「あ、遠いんなら別に……」

「怪我人は労らなければいけませんからね」

悪戯っぽい笑みに変わり、彼は部屋を出ていった。

それを見た後でため息を吐き、あたしの体は布団に倒れこんだ。

「ホントに来ちゃったんだ……」

両腕で顔を覆う。悲しいとかむかつくとかそんな感情じゃない、これからの自分の行方が、不安で不安でたまらないんだ。

「起きれるかい？」

藤沢さんとは違うしわがれた声。その方向に目を向ければ、小学
生並に小さいお婆さんがいた。

「先生が水汲みに行ってる間にこれでもお食べ」

お盆に乗ってたのはお粥。作りたてのようで湯気が立ち込めて、
美味しそうな匂いが鼻をくすぐった。

「美味しそう……」

「そりゃあ出来立てだからね。ほら、さっさと食べな」

「いただきます」

息で冷ましてから一口。じんわりと旨味が口に広がる。

「美味しい！　すごい、レトルトと全然違う」

「レトルト？」

「あ……」

江戸時代にレトルト食品なんて無いんだった。

じとりと睨むお婆さんに若干びくびくしながらお粥を口に運ぶ。
だって美味しいんだもん、止められない。

「アンタ、先生の言う通り本当に違う時代の人間みたいやね」

「……すいません」

食べるのを止めて頭を下げた。

「別に謝らんでいいさ。ここらは流れ者の集まりだからね」

「あの……お婆さん、名前は？」

「名前聞くなら先に名乗りな」

再度睨まれたあたし。

「か、葛西寿々です……」

「アタシは静シズ。ここの隣に住んでるから、何かあったら呼びなさいよ」

「ありがとうございます」

頼りになりそうなお婆さんに会えてホッとしたのもつかの間。

「ところで、先生にはきちんと自己紹介したのかい？」

「……あ」

そういえば全くしてない。

静さんのこめかみがピクリと動く。藤沢さんが戻ってくるまで、

あたしは怪我人にも関わらず正座で静さんに説教された。

「まったく、聞いてんのかい？」

「はい……」

お願いします藤沢さん、早く帰ってきてください。足が限界突破
しました。痺れて感覚なくなってます……。

「ただいま帰りました。ずいぶん楽しそうですね」

やんわりとした口調で藤沢さんが帰宅。どれほどこの瞬間を待望
んでいたことか……！

「これのどこが楽しそうに見えるんですかあ」

説教もなんとか終わったものの、足の痺れに耐えかねてあたしは
布団の上に蹲っていた。

ホントに痛いんだって。静さんはやっぱり江戸の人だよ……平気
な顔でお茶用意しに行ったもん。

「ふふ……すみません」

笑いながらあたしの横に座る藤沢さん。

「あの、申し遅れました。あたし葛西寿々といいます」

「寿々さんですか、良い名です。静さんとは何か話しましたか？」

「お粥作ってくださいって……何で藤沢さんに名前乗らないのかっ
て怒られてました」

「そうですか」

しばらく二人ともしやべらなかった。雀の鳴き声や子供達の騒ぐ
声が心地好くて、あたしはぼんやり外の景色を眺める。

「これからどうするつもりですか？」

「……わかりません」

その質問は聞かれると辛い。正直自分のすべきことがわからない
から。

一方的に落とされて簡単に馴染めるほど、あたしは順応力が秀で
てるわけじゃないんだよ。

「それなら、ここで暮らしてはどうでしょう」

「え？」

突然の言葉にあたしはただ目を丸くした。

「静さんも言ったそうですが、ここは皆さんそれぞれが理由ありで
暮らしています」

表情を変えることなく、藤沢さんは話を続ける。

「幸いこの家に住むのは私一人ですし、部屋は空いています。どう
しますか？」

「藤沢さんは、良いんですか？」

さすがに仕方なしに嫌々勧められるわけにはいかない。ただでさえこうやって迷惑をかけてるんだし。

「勿論です」

藤沢さんは強く頷いてくれた。

「……お願いします」

ここを出てもすることはない。それなら助けてもらった恩人に恩返ししたかった。

「お茶が入ったよ」

そのすぐ後に静さんが入ってきた。藤沢さんはあたしがここに住むことを静さんに伝える。

「よろしくお願いします」

あたしは小さく頭を下げた。

「アンタ、料理は出来るかい？」

「……少し」

得意ではないが作れるには作れる。

「ふん、鍛えがいがありそうだ」

そんな意地悪そうな顔しないでほしい……ホント不安になるから。

「先生、夕飯は何が良いかね？」

「お任せします。静さんの料理は美味しいですから」

藤沢さんの言葉に静さんは満足気に笑った。

「藤沢さんは先生なんですか？」

「いえ、ここに住む子供達に剣術を教えているだけです」

「稽古のせいか、子供らが先生と呼び始めてね。今じゃ藤沢元の名前より先生と呼ばれる方が多いのさ」

横で静さんが説明を付け足してくれる。

お侍さんなんだ。せっかくだからあたしも先生って呼ぶことにしよう。

「それにしても……この子を嫁にするなんて言わないだろうねえ？」

「まさか。私より一回りくらい若い方に気持ちは向きませんよ」

今、とんでもない台詞を聞いた気がする。

「先生つて、何歳ですか？」

「今年で三十になります」

「嘘……」

「嘘ついてどうするんだい」

「詐欺ですよ絶対……三十路になんか見えませんで」

先生は困ったように微笑む。

金色の髪と端正な顔立ちで大分若く見えていた。意外過ぎてあたしは何も言えなかった。

さん。

「今日は一緒に散歩にでも行きませんか？」

「行きます！」

江戸時代に来て三日目。初めての外出にあたしのテンションは上がっていた。

「凄い、教科書の世界だ！」

日本史の教科書にある写真そっくりで、ただ歩くだけでも面白い。現代じゃこんな新鮮な気持ちなかった。

先生からもらった朱色の着物を身に付け、髪もポニーテールにした。長時間の着物は辛いかと思っただけど、意外と苦痛はなかった。

「あたし、江戸の生活向いてるのかな……」

「そうかもしれませんがね」

昨日は先生から江戸の町について教わった。実際、この世界は教科書とは少しだけ違うらしい。あたしが通ってきた穴から、まれに現代のものが落ちてくるそうで、それを利用した商売は必ず儲かるらしい。

「先生、江戸って面白いですね」

「喜んでいただけて私も嬉しいです」

会って間もないのに、あたしは先生に絶対の信頼を持っていた。

「ねえ、先生……あれ？」

後ろであたしを見てた先生がいなかった。

「……はぐれた」

急いで来た道を戻る。戻ってるはずなのに、あたしは見覚えのない神社に来てた。

「どこよ、ここ」

道間違えちゃったかな……。

神社に人の気配はなかった。ただっ広い境内は雑草の抜いた跡がある。

「ちょっと休憩しよ」

履き慣れない下駄のせいで足がちゅと痛い。気持ち良い風が吹いてほつと息を吐く。

「成敗！」

「いだっ！」

背中に物凄い痛みが走る。目に涙を浮かべ振り返ると、ボサボサ頭の男の子がいた。

「何すんのよ痛いじゃない！」

「ここは俺の特訓場所だ、勝手に入って来るな！」

男の子、改めクソガキ君は再びあたしに木刀を振り下ろす。

「ぎゃあっ！」

女らしさの欠片もない悲鳴を上げてあたしは間一髪で避けた。

「避けるな！」

「馬鹿言わないでよ当たったら痛いじゃん！」

着物の裾がはだけることも気にせず、あたしは必死に逃げる。

「逃げるな馬鹿女！」

馬鹿女ですと？ ちょっと失礼すぎじゃありません？

比較的寛大なあたしでもさすがに怒った。

「いい加減に……っ！」

手近にあった木の棒をつかみ、クソガキ君の攻撃を受ける。

「しろってーの！」

「うわっ！」

あたしはクソガキ君の木刀を弾き飛ばした。

「幽霊部員、なめんなよ？」

一応剣道部員なんだぞ、この野郎。

唇をつり上げて笑えば男の子は顔を真っ赤にして騒ぐ。

「お、女のくせにつ！」

「女のくせにつて……君いくつよ」

「十歳だよ！ 文句あっか！」

いや別にないよ、どうでもいいもん。っていうか、さ。

「先生探すの忘れてたじゃん」

「ヤバイよ、帰り道もわかんないのにどうすんのあたし。子供と喧嘩してる場合じゃないよ！」

「先生のこと知ってんのか？」

「……は？」

お互いにぼかんとしていると聞き覚えのあるいつもの声。

「ああ、ここにいたんですか」

「せ……っ！」

「元先生！」

あたしとクソガキ君の先生は同一人物だった。

「幸宗^{ユキムネ}、一般人にいきなり殴りかかってはいけませんよ？」

幸宗と呼ばれたクソガキ君は、不服そうに先生から目を反らした。

「しかも嫁入り前の方に……。傷が残るかもしれません」

「こんな女、誰も嫁になんか取らない」

黙ってたと思えば好き勝手言ってくれるじゃないの。

口と手が同時に出そうになったあたしを制したのは、他でもない先生だった。

「それなら、もう稽古は必要ありませんね。」

「えっ……」

初めて幸宗君が戸惑いの顔を見せた。

それがあたしには一番年相応に見えて、なんだか可愛かった。

「痛みを知らない人間が刀を持つ必要はありませんから」
につこりと笑う先生。

「や、やだよそんなのっ！」

幸宗君は先生の着物をつかんで叫ぶ。駄々っ子みたいだけどそこまで稽古が好きなのかな。

「じゃあ、約束出来ますね？」

「……はい」

静かに頷く幸宗君。先生はまた微笑んで、彼の頭を撫でた。

「寿々さん」

「はい？」

「この子は私の剣術の教え子の一人で、幸宗といます」

「……よろしくね、幸宗君」

そつぽを向く幸宗君にあたしは屈んで目線を合わせた。

あたしの方が年上だし、さっきの暴力は水に流してあげよう。

「幸宗でいい」

「そつ？　じゃあ幸宗」

「俺は、絶対に認めないからな！」

そつ言い捨てて幸宗は走り去っていった。

「……何が？」

認めないって……意味がわかんない、しかも話が繋がってない気がするよ幸宗。

「たぶん、寿々さんが新しい生徒だと思ったんじゃないでしょうか」

明らかに楽しんでる口調で先生が言う。

「なかなか良い動きでしたしね」

「み、見てたんですか？」

「うわー、絶対顔ヤバかったよ。凄い必死だったもん。」

「剣術の経験、あるんですか？」

帰り道を歩きながら先生が聞いてきた。

「部活、って知ってますか？」

あたしの問いに先生は首を横に振る。

「そりゃあそうだよ、江戸に部活あるわけないじゃん。」

「簡単に言えば稽古事です。少しかやってみました」

真面目にやったのは中学と高校の始め、後は行ったり行かなかったりの幽霊部員だった。

中学の頃負けなしかったあたしが高校で男に負かされて、初めて挫折を知った。それから必死な努力もしくなってきたっけ。

「今度教えましょうか？」

「いえ、あたしは……」

竹刀を握らないでもう半年近く経つ。半端な気持ちじゃ良くないし、現役に教わる勇氣もなかった。

「そうですか、では暇なとき見学に来てみてください」

断る理由も特になかったので、あたしは頷いた。

そして次の日から、あたしは神社のお賽銭箱の横に座って稽古を眺めるのが日課になった。

「幸宗、もう少し脇をしめましょうか」

「はいっ」

稽古を受けてるのは幸宗だけじゃなかった。近所に住んでる子達
が何人か来る。その中には女の子も紛れてた。

「春は何で剣術習ってんの？」

他の子の稽古中に、興味本位で聞いてみた。

「だって面白そうなんだもん」

体を泥だらけにした春は齒を見せて笑う。

「それに、これからは女も戦えなくちゃいけないでしょ！」

……こういう子が後に恐妻になるんだろうな。

明るく答える春にあたしはなんとなく近い未来が見えた気がした。

「寿々、ご飯出来たから先生呼んできてくれ」

「はい」

静さんのご飯はいつも美味しい。晩御飯が一番豪華だから、あた
しは毎日夜になるのが待ちどおしかったりする。

「今日のご飯何だろ。昨日は煮物だったし……」

心踊らせながら縁側を歩いて先生のいる部屋に向かう。

「なあ、頼むよ元」

「こういうお願いは、もう聞かないと言いませんでしたか？ 雄吉」

先生の部屋の前にいたあたしは、先生と誰かの話し声を聞いた。

「た、確かに聞いたけどよ……。この仕事はお前にしか」

仕事？ 先生は剣術の先生じゃないの？

わけがわからず、ただ立ち聞きしているあたし。

「話すことはもうありません」

障子の向こうで動く気配を感じたものの、逃げることも隠れることも出来なかった。

「……寿々さん」

「あ、あの……ご飯です」

そのせいで先生と鉢合わせ。まともに目を見れなかった。盗み聞き罪悪感があたしを蝕む。

「わかりました。雄吉、貴方もそろそろ帰ったらどうです？」

憎しみを込めた視線が先生に向けられたのがあたしでもわかる。それでも、先生は穏やかな表情を見せていた。

「仕方ない、今日は帰る。だがその前に……そちらのお嬢さんは？」
舐めるような視線があたしに向いて、耐えきれずに顔を伏せる。

「私の同居人ですよ」

「……寿々といいます」

あたしはおとなしく頭を下げた。

「ご丁寧にも。あつしは雄吉。元……いや、先生の一番の友人でございます。どうぞよろしく」

出っ歯の口が横に伸びる。あたしは雄吉さんをあまり好きになれる気がしなかった。

「じゃあ、良い返事を期待してまずぜ」

雄吉さんは縁側からのそのそと出ていった。

「先生……」

「ご飯、でしたね」

「はい」

二人の会話が、知りたくてしょうがなかった。でも先生は何も言わなかった。たぶん、聞いてもはぐらかされるんだろっな。

あたしは楽しみにしていた夕飯を、しっかり味わえずに済ませてしまった。

「何かあったのかい？」

「ご飯の後片付けはあたしの仕事。食器を洗っていると、背中から静さんの声がした。」

「別に何も……」

「嘘はいらん。夕飯のアンタは上の空だった。先生もな」

「……先生も？」

「あたしが全く気付かなかったのもあるし、静さんが気付いたのが意外だった。」

「何も気付かないと思ったのかい？ アンタの何倍生きてると思っ
てんだ」

「お説教が始まると思い、目を伏せ肩をすくめる。」

「で、何があった」

「静さんを見れば真剣な表情。心配してくれてる、名前や歳くらいしか知らない他人を。」

「先生は、先生じゃないんですか……？」

「つい零してしまった。いつもと違う先生が気になって、不安になった気持ち。」

「どういう意味だい？」

「夕飯前に、雄吉さんって方が来てました。仕事の話をしてて、雄吉さんが一方的に押し付けてるみたいで……」

「あたしの拙い話を聞いて少し渋い顔をした静さんは口を開いた。」

「雄吉は金にがめつい男でねえ。高い報酬が出るなら簡単に引き受ける馬鹿さ」

「呆れた顔でため息を吐く静さん。」

「しかもそれほど腕のある男じゃない。雄吉が仕事を成功させるのは雲をつかむようなもんだ」

「つまり無理ってことだ。何だか迷惑そうな人に思えてくる。」

「だからいつも先生に泣き付いてくるんだよ、あの馬鹿は」

「しょうがない男だよと言う静さんの傍らで、あたしは先生がいる部屋の方に視線を向けた。」

「そんな場所に立たずに、入ったらどうですか？」

何となく、先生の部屋の前に来てた。でも話し掛ける勇氣なんてあたしにはなくてただ突っ立ってた。

硬直しているあたしを気にすることなく、先生はあたしを中に促す。

「どうしました？」

先生は和紙の本を端に置いて、あたしと向かいあった。あたしは何も言えずにただうつ向く。

「眠れませんか？」

「違うんです、あの……雄吉さんの言ってた仕事って」

「それを聞いてどうするつもりです？」

ほんの一瞬で空気が冷たくなった。

「別に、何も……」

「それなら、知る必要はありませんね」

先生が再び本に目を向け始める。まるで何も話したくないと言っているように。

「……危ないこと、しないでください」

あたしにはそれを言うのが精一杯だった。

さん。（後書き）

今日は登場人物の補足をしたいなあ、と思いました。

主人公の寿々ですが、まあ普通の子を想像してください。ボケと突っ込み両方してる子です。

次に寿々を拾った藤沢元さん。職業は一応武士でしょう。彼はこの小説の『謎』を持ってる……かもです。

最後に静さんですが、まあ恐いお婆ちゃんですね。騾は怒鳴ってそのうな行儀作法の鬼です。

今回はこんなもんで失礼します。次回も気が向けば誰か紹介するでしょう。

後書きまで読んでくださってありがとうございます。

よん。

ため息が二分に三回のハイペースで出てくる。

「気になる……」

命の恩人でもある先生に意味不明な仕事なんかで死なれたら嫌だし。第一先生のこと好きだし。

「あ、そっか」

雄吉さんが仕事を持ってくるなら、あの人を家にあげなきゃいいんじゃない。

「あたし頭良いー」

「自画自賛ですかい？」

後ろから声がした。聞き覚えはあるものの、この家の住人の声じゃない。

「誰？」

あたしらしくない、か細い声に自分で嫌気がさす。ここに来てからあたしは弱虫になったかもしれない。

「あっしですよ」

「……雄吉さん」

すでに侵入済みですか。不法侵入で訴えますよ？

ピリピリしてるあたしを知ってか知らずか、雄吉さんは恭しく頭を下げた。

「何かご用ですか？ 先生ならもう寝ますよ」

あたしは自然と棘のある声になる。

「いやいや、あっしに用があるのは貴方ですよ。寿々さん」

「……あたし？」

このときの自分は、かなり間抜け面だったと思う。

「どーぞ」

ホントは物凄く嫌なんだけど、あたしは雄吉さんを部屋に通した。先生にも静さんにも会わせるわけにはいかない。

「話って何ですか？」

「いえね、先生にちよいと頼み事をしているんですが良い返事がもらえなくてね。どうでしょう、寿々さんから何か言ってもらえませんかねえ？」

「お断りします」

考える気にもならない。あたしはすぐにそう言った。

「何故です？」

雄吉さんの片眉がピクリと動く。

「先生はあたしの命の恩人です。危険な仕事に関わってほしくありません」

「ずいぶん優しいですなあ」

あー、何か苛つくわその言い方。

「しかし……その優しさが時に不幸を生むんですぜ？」

その一言にあたしの顔は更に歪む。

「ああ、失礼を言ってすいません」

言葉では謝罪を表すものの、顔は馬鹿にしたような表情だった。

「しかしそれは先生も同じですぜ。あの人は優しすぎる。必ずあつしの頼みを聞いてくれる」

「……その絶対の自信は何なんですか」

「今まで頼んだ仕事は全てやってくださいやした。貴方よりあつしの方が、先生を知ってるんでございやすよ」

ニヤリと意地の悪い笑みを見せられて返す言葉が見つからなかった。確かに目の前の人はあたしの何十倍も長い時間を過ごしてる。あたしはつい、負けた気分になってしまった。

「寿々さん」

名前を呼ばれて顔を上げる。

「剣術の経験ありますか？」

「……少しは」

「なら練習してください。それがきつと、先生の手助けになる」

何で彼に指図されるんだろう。不服ながらも、あたしは小さく頷

いた。

「何で急に稽古やるって言い出したんだ」

「幸宗」

稽古の休憩中、あたしの横に音をたてて座った彼。雄吉さんの言葉で始めた稽古から一週間経ち、あたしは少しずつ以前の感覚を取り戻していった。

「別に？ ただなんとなく」

雄吉さんに勧められたなんて言えるはずもなく、曖昧に返すことしか出来なかった。

「あたしが稽古やるの不満？」

「別にっ！」

幸宗はあたしの顔を見ずに勢いよく立ち上がった。

「強いヤツと戦えるなら、俺は何も言わない」

「……そう」

幸宗のこういうところは好き。戦いに迷いが無い、ただひたすら真っ直ぐに強さを求めている。何度も剣を交えてあたしはそう感じた。

「ねえ、先生も怪しんでる？」

「さあ。たまに稽古中に違うことを考えてるっばいけど」
「そっか」

「何かあるのか？」

「何もないよ。ほら、稽古しよ？」

先生は勿論幸宗にも言えない。これはあたしと雄吉さんの秘密だ。
「今日はここまでにしましょうか」

「ありがとうございますっ！」

先生の一声で子供達はそれぞれの帰路につく。あたしは先生が子供達を見送る姿を眺めて待つのがいつもの流れだった。

「さて寿々さん」

「帰りますか？」

「いいえ」

先生は静かに首を横に振る。

「少しだけ私と手合わせ願えませんか？」

「え？」

突然の言葉にあたしは戸惑った。手合わせは戦うということ。あたしが剣術の経験者とはいっても、力の差はわかりきってる。

「大丈夫ですよ。いつもの稽古と同じですから」

なんて、柔らかい笑顔を見せられれば、断ることも出来なくて。

「どこからでもどうぞ」

結局、剣を交えることになってしまった。

「……行きます」

あたしは木刀を構える。手は汗でじっとりと湿っていた。

「すみません、少々本気になってしまいましたね」

ほんの三分程度で手合わせは終わった。勿論あたしの負け。

息を必死に整えるあたしに対して先生は汗一つかかず、涼しげな顔をしていた。

「何か隠していませんか？」

「何かって……」

「仕事が、気になるんでしょう？」

「なります」

当たり前じゃないですかそんなの。

「その話は忘れなさい。詮索は無用ですよ」

そう言っ先生は家に着くまで何も話してはくれなかった。

そしてその翌日に、先生は忽然と私達の前から姿を消してしまった。

」。

「たぶん、仕事に行ったんやろう」

いつもあたしより先に起きてるはずの先生がいなくて、様子を見に行ったら布団はきちんと畳まれてて先生はどこにもいない。

慌てて静さんにそれを言えば簡単に答えが返ってきた。

「仕事って……雄吉さんの？」

「他にいないだろう？」

「いつの間に……」

何も気付かなかった。昨日はいつもと同じ先生だったのに。

「昨日の夜だろうねえ」

「もう何でそんなに冷静なんですかぁ！」

呑気にお茶をすすってる静さんに脱力。

「いつものことだからね」

「そんな……何も言わずに行っちゃうなんて」

「アンタが気にする必要は何もない。すぐに戻ってくるさ」

先生がいなくなると、稽古もしばらく休みになるらしい。静さんがそう教えてくれた。

「事前に手紙をそれぞれの家に置いていくんだ。きつと神社にや誰もいないよ」

「いいの、自主練習だから」

あたしは木刀を片手に、一人で神社に向かった。

先生を止められなかった。もしも傷だらけで帰ってきたら、なんて悪い考えがよぎってマイナス思考な自分が嫌になる。

「やっぱこういうときは動くに限るよね」

「はあっ！」

「え？」

そんな中、聞き覚えのある声が神社の境内から聞こえた。

「幸宗」

「ん？ うわっ！」

あたしに気付いた幸宗は、顔を真っ赤にして木刀を後ろに隠した。
「特訓？」

「ちっ、違うわい！」

焦る幸宗が何だか淒く可愛い。

バレたらきつと怒るから小さく笑ってあたしも木刀を取り出した。
「じゃあ折角木刀持つてるんだし、相手してよ。あたしのさ」

「良いよ」

「んじゃ、行くよ？」

「来いっ！」

お互い足を踏み切って飛び出す。木刀はぶつかり合って音をたてた。

「どうしたの、終わり？」

「まだまだ！」

あたしと幸宗の稽古は、もう数えきれないくらいやった。だからこそ、お互いの強みも弱点もわかる。

幸宗は純粹に木刀で戦っている。緩急のある突き方なんて結構淒い。

「でも、負けたくない」

「俺だって」

あたしは武士のことなんかさっぱりわかんない。だから自己流でいく。

「うわっ！？」

木刀で戦うちよつとした隙に、あたしは足で幸宗の足を払った。
引っ掛かった幸宗は地面に倒れてあたしを見上げる。

「六十七勝六十七敗。これでやっとアンタに追い付いた」

自然と笑顔になるあたし。ちよつと汚いやり方だけど、勝つのはやっぱ嬉しいから。

「くそっ……」

本気で悔しそうな幸宗はゆっくり立ち上がった。黙って着物をは

たく幸宗に声をかける。

「大丈夫？」

「……お前、強くなった」

「ホント？」

「俺は嘘つかねえよ！」

そっぽを向いた幸宗だけど、赤く染まる頬が見えて、照れ隠ししたのがわかる。

「ありがとね」

「こんな弟ほしいかもしれない。」

「……次は絶対勝つ」

「あたしだって負けないよー？」

お互いの拳をぶつけて、二人で笑った。

もう一度やるうかと話がまとまってすぐに予定は破談になる。

「楽しそうですね」

「雄吉さん……」

良い空気をぶち壊して神社の鳥居の影から雄吉さんは現れた。

「今度は先生をどこにやったんだ！」

幸宗も雄吉さんを知ってるみたいで、いきなり食ってかかる。

「嫌だなあ、あつしは何もしてませんぜ？ 仕事の依頼を受けたのは先生ご本人だ」

「……どんな仕事なんですか」

ホントは見たくも話したくもない。でも目の前にいるこの人しか先生の行方を知らないから不可抗力ってやつだ。

「おや寿々さん。怒ると可愛らしい顔が台無しですぜ？」

あたしの顔に触ろうとする雄吉さんの手を幸宗が木刀で叩き落とした。

「小さな護衛がいるんですねえ」

「幸宗やめて」

アンタには余計なことに関わってほしくない。

あたしに止められて幸宗は一瞬唇を噛む。でもすぐに雄吉さんに

吠えた。

「お前何しに来たんだ！」

「寿々さんにお話があつて参りやした」

「あたしに？」

「先生のこと、知りたいでしょう？」

幸宗に聞こえない配慮からか、あたしの耳元で小さく囁く雄吉さん。

「……話を伺います。ここが嫌なら家に行きますか？」

「そうしてくださいとありがたいです」

「わかりました。幸宗、また今度ね」

「寿々！」

不安にさせないようにあたしは笑って手を振った。じゃないと幸宗はついてくる気がしたから。

「護衛はよろしいんですか？」

「ちよつと黙ってください」

今は先生の行方を聞き出す。先生は必ず連れ戻すんだから。

「先生は今どこにいるんですか」

「その前に……喉渴きませんか？」

「あたしは全く平気です。第一貴方に出すお茶なんてありませんし？」

笑顔浮かべて言つてやった。あたしだって怒るときは怒る。

「話進めてください」

「……、こことは逆方向の町はずれを知つていやすか」

「知りません」

まだ来て日が浅いんだよあたしは。

「先生はそこで賭博の片付けをしてるんですあ」

「賭博の片付け？」

「寿々さん……アンタ一体どこから来たんです？賭博も知らないな
んざ、よつばど物知らずなのか金持ちなのか……」

賭博も知らない馬鹿だつて言いたいのか。何とも言えない微妙な
表情で雄吉さんはあたしを見る。

「賭博はわかります。片付けてどういう意味ですか？」

「賭博場つてのは裏でいろんな人間が動いてる。それを全部消し去
るのが先生の仕事でございやす」

「それ、殺すつてこと？」

先生が人殺しなんて有り得ないし想像出来ない。つていうか絶対
嫌だ。

「あの男はいつも警察に渡すんで殺しはしやせん。契約違反だと何
度も言つてるのに……」

自分勝手な雄吉さんをあたしは睨み付けた。

「す、すみません」

「それで先生は？」

「予想以上に相手の人数が多かつたらしくて……今捕えられてます」
捕えられてる？先生が？

「どこに？」

「町はずれの廃れた屋敷に。殺されるかもしれやせん」

「あたしはどうすればいいの？」

話があつてペラペラ先生のことしゃべったんだから、何かやって
ほしいんじゃないの？

「あつしにやわかりません」

「はあ？」

駄目だこの人、意味わかんない。

「で、ですが命の恩人なら助けるべきでしょう！」

何だそれ。口調がバラバラだよ、まああたしも人のこと言えない
けど。

「……雄吉さん」

「はいっ！」

あれ、あたし完全に怖がられてる。

「町はずれまで、案内してくれませんか？」

「え……」

「良いですよね？」

「えっと」

「良いですよね？」

「……はい」

でもこれはこれで便利かもしれない。

あたしは小さく笑みを浮かべて木刀を手を取った。

1. (後書き)

読んでくださってありがとうございます。

さて、今回も人物紹介でもしたいと思います。

まずは幸宗。いやー、はっきり言って彼は悪戯坊主ですね。でも刀の腕は良いです。

次に雄吉さんですが、まあ悪役に片足突っ込んだ状態にいますかねえ。彼については特に何も考えてません。

えー、こんなもんですね。次回もお楽しみに！！

ろく。

「ご託はいらないの。先生を返して」

あたしの前には狂暴そうでいかにも悪な侍達。でも怯んだら確実に負ける。出来る限り強気な態度であたしは侍達を見つめ返した。

「先生？」

「藤沢元、そういえばわかる？」

先生のフルネームを言ったのは初めてかもしれない。でもそんなことを考える余裕はあたしに無かった。

そう、まったく余裕が無いクセに、あたしつてば堂々と正面から向かってしまった。嗚呼……馬鹿なあたし。

まあ正直が一番だよ、なんて思ってみるけど。

「ああ、あの野郎の知り合いか」

「お嬢ちゃん、ここは遊び場所じゃないんだ。わかるか？」

目の前に顔を持ってきた男の頬を木刀で勢いよくはっ倒す。一気に部屋の中が殺気立った。

「何すんだこの女！」

「先生はどこ？」

無抵抗の人間を叩いたのは初めてで。この異常な殺気にもあたしは震えそうだった。

「なあ、嬢ちゃん。アンタはあの男の何なんだ？」

一番偉そうな感じの顔に傷のある侍があたしに聞く。

何なんだって言われてもなあ……。

「保護者だし、家族だし……何て答えれば満足？」

「何でも構わねえさ。ここを知られたなら叩く切るまでだ」

人が真面目に考えてたのに、あたしの貴重な時間を無駄にしたなこら。

刀を抜く音があちこちで聞こえる。当たり前な話だけど、相手は侍。真剣を持ってるんだ。

流石に木刀じゃ駄目だったかな……。

「さっきまでの勢いはどうした？」

見下したような笑みの傷のある侍。

たばになって一人叩く最低な相手になんて絶対負けたくない。

「……上等よ、かかって来なさい！」

木刀を握り締めてあたしが叫んだその瞬間、物凄い轟音と砂埃が舞った。

「やはり牢にいるのは疲れますね」

穴のあいた襖を蹴り倒し、彼は颯爽と現れた。

「……先生」

情けないことに、あたしは泣きそうだった。先生が無事で、いつもの笑顔だったから。

「寿々さん」

「はい……？」

「来てくださっただけですね」

先生はいつも笑っているから、怒っているのかもよくわからない。それでもさっきの状況に比べたら最高の気分。

「お前どうやって……」

「見張りが一人では不便ではありませんか？」

もしかしなくても倒しちゃったわけですか先生。意外と恐いんですね。

笑顔の先生によくわからない迫力を感じてしまった。

「くそっ……やっちゃまえ！」

侍達はあたしと先生にとびかかる。先生は刀を鞘から抜いて不敵な笑みを浮かべた。

片っ端から敵をなぎ倒し、十分も経たない内にほとんどの敵を倒した。ただ一人を除いて。

「何なんだ貴様！」

「ただの侍ですよ。貴方と同じです」

刀と刀をぶつけあい、対峙する二人。あたしはただそれを黙って見ていた。

傷の男が押され気味で、先生はまだ余裕がありそう。

「同じならば！ 気持ちにはわかるはずだ。侍の時代はいずれ終わる」
感情的になる侍。怒りや憎しみ、焦りの表情があたしでもわかった。

確かに侍の時代は終わる。未来で生きてたあたしは居心地が悪かった。

「そうでしょうね」

落ち着いた様子で先生は言う。

「全てのものに、終わりは来ますから」

「貴様は何故そんなに落ち着いている！」

「変わらなければ、構いませんから」

そう答えた後、先生は侍を鞘で殴って気絶させた。

「君は何者だ？」

「あ、えっと……」

あたりには警察官らしき人達が散らばって、倒れている侍達を捕まえていた。騒ぎを聞いた近所の人が通報したらしい。

指示を出していた警察侍があたしに寄ってきた。年は二十代前半あたりの真面目そうな眼鏡をかけた男。

「彼女は私の教え子ですよ、加地君」

助け船を出したのは勿論先生だった。

「先生。もしかしてまた仕事引き受けたんですか？」

うわ、凄い呆れられてるよ……。っていつかこの人は先生と知り合い？

「困っていたようでしたから、つい」

「ついじゃありませんよ、あまり危険なことに関わらないでください」

「すみません」

怒られてるのにピリピリした空気はない。お互い微笑みながら話している先生達。

……あたし除け者ってやつ？

「あのー、お二人は知り合いなんですか？」

流石にこのままじゃ無視されてるみたいで寂しい、あたしが。

「ええ、彼は加地^{カシ}君。元教え子です」

「初めまして、加地といいます」

「あ、寿々です。宜しく願います」

礼儀正しく頭を下げられて、慌ててあたしも同じようにした。

「元教え子ってことは加地さんも、先生に剣術習ってたんですか？」

「大分前ですけどね」

「あの頃の加地君は幸宗以上の暴れ者でしたね」

微笑みを見せつつ、先生は言った。

あの幸宗より上をいつてたんだ。人はやっぱり外見じゃないんだなあ。

「む、昔の話ですよ……」

その言葉を聞いただけで加地さんは冷や汗をかいていた。どんだけ悪いことしたんだアンタ。

「それで、彼等は？」

「ああ、最近誰かに指示されてやってる事件が多くて……恐らく同じようなものだと思います」

「黒幕がいるわけですか」

「そうなります」

真面目な会話を、あたしは黙って聞いていた。

邪魔したくないっていうか出来る雰囲気じゃないし。

「何かわかると良いですね」

「ええ……捜査協力、ありがとうございます」

ビシッと頭を下げる加地さん。

「いえ、ご苦労様です。寿々さん帰りましょうか」

「あ、はいっ」

あたしは加地さんに頭を下げ、歩き始めている先生のあとを急いで追う。

「寿々さん。私がここにいと誰から聞いたんです？」

「え、っと……」

言って良いんだろうか。でも言つなとは言われてないし、良いか。

「雄吉さんに聞きました」

「そうですか」

先生はそれ以降何も言わなかった。

なな。

「おかえりなさいまし」

出迎えたのは静さんではなく、雄吉さんだった。あたしは自分の顔が険しくなるのがわかる。

「ただいま帰りました」

いたって普通にしている先生が不思議でしようがない。

「お二人ともお疲れでしょう？　すぐに何か持つて」

「雄吉さん。それよりも聞きたいことがあるので、座っていただけますか？」

居間の座敷に座り、先生は静かに言う。

先生の言葉に雄吉さんの顔が土色に変わった。ダラダラと汗をかき、かしこまって正座をしている。

「寿々さん、すみません。少し席を外してください」

「あ……はい」

なんて返事したけど、あたしは二人の話に興味津津。部屋を出ても立ち聞きしていた。

あの、なんていうか本能に忠実に従ったわけですよ。

「雄吉、彼女を関わらせる気はないと言ったはずですが？」

冷たい先生の声。

彼女ってあたしのことかな……。

「いや、それはその……寿々さん本人が選んだんですぜ？」

窺うような言い方。よっぽど先生が恐いらしい。

「そうですか。ですが、それでも契約違反でしょう？　彼女の願いを断れば良かっただけのことですから」

よくわかった。口喧嘩じゃ先生には勝てない。押し負けるのが予

想出来るや。

「今後一切、彼女を危険にさらさないでくださいね？」

「……失礼しやす」

悔しそうに絞りだした雄吉さんの声は、先生にどう聞こえたんだろ。そんなことを考えてると、雄吉さんが部屋から出てきた。

「あ……」

目があった瞬間、物凄く怖い顔で睨まれた。

恨まれたかもしれない。席を外すように言われても立ち聞きした。軽い裏切り行為だとちよつとへこむ。

「寿々さん」

「はいっ？」

先生に呼ばれた。振り向けば、手招きをしてる姿。

「さて、まずはお礼を言わせてください。助けてくださってありがとうございました」

「や、あたし何もしてないですよ」

ほとんど先生がやつちやったし。

「いいえ。彼等の注意を向けてくださいました。おかげで警備も手薄だったんでしょう」

「はあ……」

「それで、お礼を用意しました」

にこりと微笑む先生の右手には長細い包みが。

「何ですか、それ」

「静さんのお古ですがまだまだ現役ですよ」

包みを開けば、棒が出てきた。その両端には小さめの刃がついている。

えーっと、これ何ていうんだっけな。学校で習わなかったけど知ってたはず……クサナギ？

「それは薙刀といいます」

「あ、ナギナタですか」

惜しいな、ちよつと間違ってたわ。

「それなら着物でも使いやすいかと思いますよ」

「はあ……」

気にしてくれてたんだ、なんて思う。

「お気に召しませんか？」

「いえ、嬉しいですよ！」

「それは良かった」

微笑む先生にあたしも笑顔が出てきた。

「寿々、怪我不いかい？」

「静さん」

「さつき雄吉が勝手に家に上がりこんでな。気分悪いからちよつと出掛けてたんさ」

「もうとことん嫌ってますね」

あたしはいっこうに構わないんだけど。

「お灸を据えましたから、しばらくはおとなしいでしょう」

そう言った先生の予想はあっさりと外れてしまった。

神社でカンカンとぶつかりあう音が響く。

「早いですね。もう使いこなしていますよ」

薙刀をもらってから、子供達の稽古が終わった後に特訓してもらったようになった。

とりあえず最初は振り回して距離の感覚をつかむこと。今は慣れなくて先生の持つ木刀に当てるどころ。

「ありがと、ございますっ」

先生に褒められるのは物凄く嬉しいけど、稽古の真っ最中に褒めないでほしい……顔がかなり必死だから。

「休憩しましょうか」

相変わらず先生は汗一つかいてない。あたしは手で顔を扇ぎながら薙刀を地面に置いて座った。

「貴方が来てもうすぐ一ヶ月ですね」

もうそんなになったんだ。自分じゃ毎日に必死過ぎてわかんなかった。

「元の時代へ、帰りたいと思いますか？」

「……え？」

「例えの話ですよ。私には未来に送り届ける力はありません。もしも、もしも帰れるとしたなら……帰りたいですか？」

唐突すぎる先生の質問に、返す言葉が見つからない。

ただ、あたしの頭の中に江戸と現代、両方の思い出がぐるぐる渦巻いた。

「……すみません、ちょっとした好奇心です。忘れて構いません」
先生は少し困った表情をしてた。

「だから、泣かないでください」

言われるまで自分が泣いてるのに気付かなかった。

「すいませ、何であたし……」

着物の袖でぐしゃぐしゃの顔を隠す。泣き顔なんて人に見せることない、というかあたしは滅多に泣かないのに、今は涙が止まらない。

「今日の稽古はここまでにしましょう」

ゆっくり立ち上がって先生は言う。

「だ、大丈夫ですよ、あたしまだ……！」

「無理はいけません」

指で涙を拭われ、あたしは黙った。

おとなしくなったあたしの頭を先生が撫でてくれる。

「先に帰りますから、夕飯までには帰ってきてくださいね」

そう言い残して先生は去っていった。

もう涙は止まった。瞼が熱くて重たくて、水で冷やさなきゃと思

うけど身体は動かない。

「あたし、帰りたいのかな」

まあ実際、いきなりここに落とされたんだし帰りたいかもしれない、だけど。

「だけど？」

「うーん……え？」

あたしはまた、とんでもないヤツに会ってしまった。

妙に聞き覚えのある声。足下はビーチサンダルに貧弱な素足。徐々に視線を上を持っていくと……。

「よっ」

見るだけでも腹立たしいその中年男の顔をグーで殴った。

「何で殴るの!？」

左頬を両手で押さえ、半泣き状態の中年男もとい自称カミサマ。

「当たり前だろ、このアホ!」

「酷っ! 泣くよ? 泣いちゃうよ?」

「勝手に泣いてる。あたしは帰る」

まったく……カミサマなんて、ろくなヤツじゃない。

「居候の家に帰るか? 元の時代に帰るのか?」

カミサマの言葉に足が止まる。ゆっくり振り返れば意地の悪い笑みが浮かんでいた。

「帰りたい」

真っ直ぐカミサマを見据えるあたし。

驚きの表情を露にする目の前のヤツ。

「そう言ったら元の時代に帰してくれるの?」

茶化すようにあたしは笑ってやった。

「なんだよ、驚かせるなって……」

わざとらしく胸を撫で下ろすカミサマ。今までの不満を全部ぶつ

けてやる。

「で、どうなの？」

「はつきり言って帰すことは可能だ」

「ホント？」

「俺を誰だと思ってんだ」

「アホ」

そう言ったらカミサマはしゃがんでいじけ始めた。面倒なことこの上ない。

「お願いだから話進めて」

「本当に帰るのか？」

あたしはうつ向いて自分の足下を見つめた。

「どうする？」

「ここは居心地が良い。生活するのも必死だから、生きてる実感湧くし」

先生達にも会えた。これはホントに、ホントに幸せなことだと思う。

「ウォッホン」

「……何」

無意味な咳払いに冷めた目で見てしまうあたしはたぶん普通だと思う。

「いや、注目集めようかと」

「いや、ここにいるのあたしとアンタだけじゃん」

沈黙が流れる。

「突っ込みのキツイ寿々に朗報があるけど」

「何？」

「元の時代に戻るとき、穴に落とす直前に戻すことも可能」

「……それっていつでも？」

「そう」

いつでも帰れるならちょっと安心した。

「じゃあ、まだここにいる」

もう少しここで頑張ってみよう。それに、あたしの中でいるべきだって誰かが言ってる気がした。

「じゃあもうしばらく頑張れ」

「うん……っというかさ、カミサマ何でここに来たの？」

「あー、普通に飛んできたけど」

「そういうこと聞いているんじゃないで、何故に一ヶ月も後になってあたしの前に現れたのかってこと。しかも飛んできたって普通じゃないから」

「……本気でお前が悩んだとき、俺は現れる」

頭をわしゃわしゃと撫でられる。

「だから好きなことしとけ。後悔すんな」

「……うん」

失礼だけど初めてカミサマがまともに見えた。

「ただし、死んだら終わりだ。元の時代に戻ることも出来ねえ」

「……いいよ。あたし絶対死なないから」

「良い度胸だ」

ニヤリと不敵に笑い、カミサマは強い光とともに消えた。

「さてと」

帰るか、先生の家。足取りの軽いあたしは走って家に向かった。

はち。

「ちよつ、幸宗。少しは女を勞つてよ……」

「もう疲れたのか？ やっぱ年の差だな」

「アンタ斬るよ？」

稽古の後、いつものように文句を言いながら幸宗と追い掛けつこしてたら。

「寿々、あれ客じゃないか？」

幸宗の指差すの先には一人のお侍さんが先生の家の前に立っていた。

「そつかも……」

何で入らないのかと思つたものの、大切なお客さんかもしれないから、あたしはその人に近寄つた。

「何かご用ですか？」

藁ワラで作られた傘のような帽子を頭に深くかぶっているため、顔があんまり見えないけど、若そう。

「……ここは貴方の家か？」

「あたしは居候です。ここは先生の家」

「先生……ということとは、貴方は弟子か」

長屋を見上げながら淡々としゃべるお侍さん。

「一応稽古してもらつてますけど」

こんな質問だと、流石にあたしでも相手が変な人だとわかる。

「では最後に一つ。先生の名は」

「藤沢元」

そう答えた瞬間、あたしの肩に痛みが走つた。それと同時に藁帽ワラバト子が風で飛び上がる。

「寿々！」

「痛……っ」

怖々肩に触れれば鮮血が掌を濡らした。先生から貰つた着物に血

が染まるのが嫌でもわかる。もらったばかりなのに…！

幸宗はあたしを気遣ってくれる。でも血相を変えてお侍さんを睨んでいた。

「弟子がこんなもんなのか」

しゃがみ込んだあたしの上から腹立たしい言葉が降ってくる。

「無防備な人間を傷つけんじゃねえ！」

怒りに身を任せる幸宗を抑え、あたしは侍を見上げる。帽子の無い侍は、むかつくけど案外綺麗な顔立ちをしていた。

「アンタ、何がしたいの」

「復讐。家族を殺された怨みだ」

「殺されたって、誰に……？」

「アンタの師匠さ」

冷たい瞳があたしと幸宗を映す。

「先生はそんなことしない！」

傷の痛みも忘れて、あたしは叫んだ。

「するさ。仕事は忠実にこなす人間だからな」

「だから先生は人殺しなんかしないってば……！」

あたしは肩を押さえてよろよろと立ち上がる。

「幸宗、刀貸して」

「何する気……」

「いいから！」

久しぶりにキレたわ。幸宗に怒鳴っちゃったけど、怒りはまったく止まる気配なし。

幸宗は泣きそうになりながら持っている刀を差し出した。

「その傷で勝つか？」

「うるさい、黙って斬られてよ」

せせら笑う侍に睨みつけるあたし。

「寿々……」

不安そうな幸宗。

あたしと侍の間に、風が吹いた。

「何事ですか？」

「せ……っ」

「先生！」

先生の突然の登場にあたしと幸宗は目を見開いた。

「藤沢元……」

侍は先生を見た瞬間、素早くあたしから離れて先生に刀を振り下ろした。

あたしはそれを止めるために体を動かそうとしたものの、血が出すぎたのかふらついてへたり込む。

「初対面の人間に斬りかかるのは、失礼だと思いませんか？」

鞘で相手の刀を止めた。侍自身もこれには驚いたみたいで、素早く飛び退いて距離を空ける。

「初対面？ この顔を見ても思い出さないのか！ お前が殺した伊^イ尾^オ慶^シ喜^フを！」

叫ぶ侍に対して先生は眉をひそめた。身に覚えがないのだ。

「思い出せないのか」

侍は再び刀を握り直す。先生も刀を鞘から抜いた。

「身に覚えがありません。殺したのは、本当に私ですか？」

射るような強い視線で侍を見る先生。

「聞いた。金髪の侍が両親を殺したって」

「……世の中に金髪はたくさんいますよ。江戸にも外の国でも」

先生は確信が持てるような証拠がないって言いたいみたい。

確かに江戸でもちらほら金髪を見る気がする。でも先生のが一番綺麗だとあたしは思う。

「うるさいうるさい！ 叩っ斬ってやる……！」

「少し落ち着きなさい」

穏やかだった先生の目が獣に変わった。侍の刀を弾き飛ばして、

彼の喉元に自分の刀を当てる。互いに少しでも動けば刀は侍の喉を貫くだろう。

「っ、殺せ」

額から一筋の汗を流し、侍は唸るように言った。

「何故です？」

「俺は負けたんだ！ 殺せ。それが武士道だ」

「……アホか」

あたしは思わず口に出してしまった。

あー、ホント何で自分で規則とか大事にするんだろ。

「お前…… 武士道を馬鹿にする気か！」

「勘違いしないで。馬鹿にしてるのはアンタの武士道」

「何だと？」

「死ねばかつこつとか思ってるでしょ。実際違うと思う。醜い」

何で加害者を助けようとしてるんだ、あたし。あれだ、血が出続
けてるから頭が冷えたのかも。

「とにかく、死にたいなら自分でしなさいよ。負けたから先生に殺
させるなんて間違ってる」

説教じみた台詞。あたしこんなこと言う人間じゃなかったと思う
んだけどなあ……。

「す、寿々」

勢いで立ち上がったあたしの着物の袖を幸宗が引っ張った。

「何？」

「顔真つ青だぞ……？」

アンタも顔色悪いよ、って言いたかったのに口が思っように動か
ない。

「……血い足りないみたい」

あたしはそこで意識を手放した。

きゆう。

「あー……、あたし生きてる」

目の前には見慣れた天井。あたしは自分の部屋に寝かされたらしい。

肩にそつと触れば包帯らしき布が巻いてあった。静さんがやってくれたのかな……。

起きようとするとう肩が痛くて顔が歪む。

「まだ寝てるよ、深く斬った」

「……アンタ」

視線の先にはあたしを斬った若侍。水が入った桶と布を持って横にきた。

「生きてたんだ？」

「正確に言えば生かされたんだよ、あの人に」

嫌味を言ったらつまらなさそうに答える。あの人とはぶん先生のことだ。

「貴方の命を一時預かります、しばらくここで生きてみませんか？
て言われてたな」

「幸宗？」

ひよっこり後ろから顔を出した幸宗は若侍の隣に並んだ。

「肩、大丈夫か？」

「……まあね」

笑う元気はあるからたぶん問題なしよ。

「幸宗、静さんに起きたって言うてきてくれ」

「わかった」

指示に従って幸宗は部屋を出ていった。

「名前、聞いても良いか」

侍がぽつりと呟く。

「……寿々。アンタは？」

イオケンタ

「伊尾健太」

「何歳？」

「十七になった」

「やっぱタメか」

「タメ？」

「同じ年ってこと」

「ああ……」

少しばかり沈黙が流れる。それを先に破ったのは彼だった。

「悪かった」

「何が？」

あたしは目を瞑ったまま聞き返す。

「いきなり斬りかかったことだ」

「……別にいいよ」

「いいわけないだろ。嫁入り前の女に傷をつけて……」

あらら、ホントに気にしてるっぽいわ。

斬られてない方の手を降って元気をアピールしてみる。

「いいって、傷残らないと思うし」

「でも」

しつこいなあ、人が気にするなって言ってるのに。何かイライラしてきた。

「うるっさい、いつまでもウダウダ言ってる暇があるなら先生のとちゃんと調べなさいよ」

「……わかった」

ドスのきいた声で言ってるやれば、か細い声が返ってきた。

「ねえ、どうやって幸宗を手なづけたの？」

「手なづけてはないさ。あの人みたいに強くなりたいてって言うたら仲間だと言われた」

「じゃあ明日から稽古だね」

「稽古？」

「幸宗に気に入られちゃったらとことん稽古の相手させられるよ」

「……それもいいかもな」

ふっと彼は笑う。

「やっと笑った」

「は？」

「さっきからずっと眉間にシワ」

どっかの学者みたいに難しいこと考える必要ないよ。あたし達まだ子供なんだから、甘えたって良いんだよ。

「そういえば、笑うのは久しぶりかもしれない。復讐に必死だった」

「……あのさ、しばらく復讐忘れない？」

あたしの問いに彼はあからさまに顔をしかめた。

「あたしの傷が完全に治るまでで良いから」

その間に少しでも先生へのわだかまりを無くしてほしい。

「……わかった」

健太は渋々頷く。あたしは自然と笑顔になった。

「じゃあこれからよろしくね、健ちゃん」

「……健ちゃん？」

「健ちゃん頑張れー」

「その名前で呼ぶなっの」

ただいま若侍改め健ちゃんが、幸宗と稽古の真っ最中。勿論お互い木刀で。

「なかなかやるなっ！」

「お前もな、幸宗」

必死な幸宗に対し、健ちゃんはまだ余裕がありそう。

「肩の傷はどうですか？」

「先生」

座って見てるあたしの横に先生が立った。

「痛みはもうないんですけど、静さんが暴れたら傷が開くからしば

らくはじつとしてるって」

だから稽古も見学なんだよなあ……。ホントつまんない。

「たまには休息も必要ですからね」

やんわりと微笑む先生に文句は言えなかった。

「……先生、健ちゃんのお父さんのことホントに知らないんですね？」

「もしかして疑ってます？」

先生の眉がへの字になった。心なしか笑顔が悲しそうに見える。

「ち、違います！ ただ……あたしは信じただけです」

先生は江戸の生活を教えてくれた恩人だから疑うなんて出来ないでも、信じるための事実を先生からちゃんと聞きたかった。

「すみません。私はいつも、困らせてばかりですね」

「そんなこと……」

「彼の両親とは面識ありませんよ。名前も先日初めて聞きました」

「そう、ですか」

あたしは先生の言葉を聞いても、妙に後味が悪くてすっきりしなかった。

「今日はここまでにしましょう」

「ありがとうございます！」

いつものように先生は最後の子供まで見送っている。その後ろ姿を見つめるのは、もうあたしだけじゃない。

「幸宗って結構強いな」

「そうは言っても健ちゃん余裕そうだったけど？」

健ちゃんは今あたしと同様に先生の家で居候中。だから帰りも二人から三人に増員した。

「そりゃ年季の違いだ。アイツ将来絶対強くなるよ」

健ちゃんの言葉にあたしは深く頷いた。

「お待たせしました。帰りますか？」

「あ、すみません。あたしちょっと買い出し行きます」

静さんに頼まれてたの忘れてた。怒らせると怖いからなあ……。

「一緒に行きましょうか？」

「大丈夫です。すぐ近くなんで」

先に帰るよう言つて、あたしはなるべく足早に店へ向かった。

「味噌つて……これで良いんだよね」

風呂敷包みに抱えて歩きながらあたしは呟く。

静さんからいつもの、って言えばわかるって言われてたけど……ホントにわかるなんてやっぱり商売つて凄い。

でも静さんの名前聞いて慌ててたから何かしたんだろうな……。

「恐いなあ」

「何が？」

視線を前に向ければ、健ちゃんが柱によりかかってこちらを見ている。

「健ちゃん、どうしたの？」

「別に」

何でかわかんないけど彼はあたしから視線を反らす。

「もしかして迷った？」

「ばつ、馬鹿にするな！」

ちえー、そんな怒らなくても良いのに。軽いジョークよジョーク。

「じゃあ何さ」

「……荷物」

「は？」

よく聞こえなかったから聞き返すとムツとされる。

「荷物を持ちにきたんだよ！」

そう言つて健ちゃんはあたしの手にあった包みを自分の方へやつ

た。

「……傷が開いたら面倒だろ」

気にしてんだね、まだ。でもあたし。

「かゆい」

「……あ？」

「女扱いとか慣れてないもん！　なんか無茶苦茶恥ずかしい！」
叫びながらあたしは軽く走った。

「あ、馬鹿！　傷が開くって言われて……」

「大丈夫だって。あんまり心配すると禿げるよ？」

「うちの家系は禿げない！」

健ちゃんと騒ぎながら家に帰る。こういつの楽しいか思ってたのに。

「こんばんは」

「雄吉さん……」

またこの男に振り回されそうだ。

きゅう。(後書き)

読んでくださり、ありがとうございます。

じゅう。

「また先生に仕事の依頼ですか？」

「今日は寿々さんに言いたいことがありますよ」

「……何でしょう」

はつきり言ってるくなことじゃないのは明らかにわかるけど。

「あつしをあまり怒らせないほうが良いですよ？」

「どういう意味ですか？」

バイトで得た営業スマイルで雄吉さんを見返す。引きつっていると
思うけど。

「仕事の邪魔はするもんじゃありません、ってことですぜ」

気味の悪い笑みを浮かべ、雄吉さんは去っていった。

凄い嫌な感じ。

「なあ」

「うわっ、健ちゃんいきなり話しかけないでよ……」

一瞬誰もいない気でいたわ。横に並んでるなんて全然気付かなかった。
った。

「さっきの誰？」

あたしの失礼発言を気にすることなく、健ちゃんは聞いてきた。

「雄吉さんって人。先生の昔からの知り合いらしいよ」

そつえば健ちゃんが雄吉さん見るの初めてだったっけ。

「それがどうかした？」

「どっかで、見たことある気がする」

「健ちゃんか？」

「ああ……」

それから健ちゃんはずっと考え事をしながら帰り道を歩いてた。
あたしの味噌を抱えて。

「おかえり。味噌は？」

「あ、はい」

静さんに風呂敷包みを渡すと、満足そうに台所へ消えた。

おつかいは無事終了、あとは……。

「健ちゃん」

さつきから名前を呼んでも気付いてくれない。

「健ちゃんってば」

もう一度強く呼んでみたけど、あたしに顔を向けることはない。あまりに真剣な様子に、あたしは何も言えなくなってしまった。

「おかえりなさい」

「ただいま戻りました」

笑顔で出迎えてくれた先生にぺこりと頭を下げるあたし。

「彼はどうかしたんですか？」

顎に手を当てて考え込む健ちゃんを先生は不思議そうに見てた。

「帰り道で雄吉さんに会いまして……」

「何かされたんですか？」

眉根に皺を寄せて先生が聞いた。最近雄吉さんの名前が出ただけで先生はちよつと嫌そうな顔をする。

「少し話ただけです。ただ、健ちゃんが雄吉さんに見覚えがあるらしくて」

「健太が雄吉さんに……」

そう口に出して健ちゃん同様に考え込んでしまった。

「この二人は何してんだい寿々」

「……あたしに聞かないでください」

結局、静さんが夕飯だと怒鳴りつけて健ちゃんと雄吉さんの話はそこで終わった。

「寿々」

「健ちゃん？」

寝る支度を終えて布団に入ろうかと思った矢先、健ちゃんがあたしの部屋の前に現れた。

「ちよつと聞きたいことがあつて……もう寝るか？」

「ううん、これからだったから平気。入れば？」

「いや、ここでいい」

健ちゃんが縁側に座るのがわかった。床が少しだけきしんだから。月の光で障子に健ちゃんの大きな影が映った。

「雄吉つて男と話してたよな、あの人に相談しなくて大丈夫なのか」
「先生につて……何を相談するのさ」

あたしは布団の破けた部分をいじりながら答えた。

「あの男、危険なことを考えてた」

声だけでも真剣なのが伝わってくる。

でもあたしが気になったのは雄吉さんのことじゃない。

「ねえ健ちゃん」

「あ？」

「あの人じゃなくて、先生つて呼ばない？」

返事はない。まあ予想はしてたけどさ。

「だって一緒に住んでるのにいつまでもあの人、なんて言ってる
ないでしょ？ それに誰のこと言ってるかわかんなくなりそう」

先生はあの人、雄吉さんはあの男、で使い分けてるみたいけど。
やっぱりわかりづらいから。

「一緒に住んでるのは単に生かされてるからだ。本来なら俺は死んでる」

「いつまでそんなこと言ってるの？」

あたしだって流石に怒るよ？

「復讐なんて言ってる健ちゃんに、先生はやり直すチャンスくれたんだよ？」

「……そんなこと俺は頼んでないよ」

何よそれ。

あたしは勢いよく障子を開けて、あぐらをかいて座っている健ちゃんの頭を木刀で叩く。

「い……っ！」

後頭部を押さえて痛みに耐える姿を見下ろし、あたしは口を開いた。

「健ちゃんの馬鹿！」

叩き付けるように障子を閉め、布団の上にへたり込む。

「馬鹿……」

わかってくれたと思ってた。短い間でも先生や幸宗と稽古をする健ちゃんは、凄く楽しそうだったから。

いつの間にか部屋の外の気配が消えてた。障子にも、彼の影はない。

人の気持ちは、簡単に変わることがない。わだかまりをなくすのが難しいなんて、わかってたはずのに。

「馬鹿だなあ、あたし……」

先生と健ちゃんの橋渡しも出来ない自分がひどく情けなくて、あたしは泣きながら眠りについた。

「まったく、食事は皆でと言ってるだろう？」

呆れたような視線が痛い。静さんは空いている先生や健ちゃんの茶碗を片付けてる。

あたしは自分の茶碗にご飯を盛った。

「何かあったのかい？」

「……別に」

ただ健ちゃんと顔を会わせたくないだけ。

「痴話喧嘩かい？」

「それ、意味わかってます？」

「相思相愛の二人がする喧嘩だろう？」

意地悪そうな笑みを見せ、静さんはあたしに言った。

「意味は合ってるけど、あたしと健ちゃんはそのんじゃないのっ」
きつい口調に静さんは意外そうな顔をした。確かにあたしが怒ることはあんまりないから仕方ないんだけど。

「……あんなに馬鹿だと思わなかった」
夕べのことが頭をよぎる。

「ま、何があつたかは知らんけど……気晴らしに出かけたらどうだい？」

「気晴らしって、どこにですか？」

あたしの問いに、静さんは微笑むだけだった。

じゅういち。

「これが気晴らしねえ」

カラコ口と下駄の小気味好い音が響く。あたしは藍色の浴衣を着て歩いていた。静さんの話によると、今日は町のお祭りらしい。

だからなのかわかんないけど稽古も休みになってたっけ。

「でも一人じゃつまんないや」

幸宗でも誘えば良かったかな。一瞬健ちゃんが頭によぎって慌てて首を振る。

「じゃあ俺らと回らねえか？」

「嫌」

とは言ったものの、あたしはガラの悪そうな男三人に囲まれてしまった。

「冷てえこと言うなよー」

「触らないでもらえます？」

自分の腕が可哀想だわ。

「そう言わずに、一緒に遊ぼうぜ？ 寿々ちゃん」

「あたしの名前……」

何でこの人達が知ってんの？

眉間にシワを寄せるあたしを見ながら、男三人はニヤニヤと笑みを浮かべてる。それが雄吉さんと似たような笑い方と気付くのに、そんなに時間はかからなかった。

「アンタら、雄吉さんの知り合い？」

「へえー、勘の鋭い女だな」

「そう。俺らは雄吉に頼まれたんだよ」

「何を？」

予想はつくけど一応聞いてみる。それが礼儀かなと思って。

「お前を殺せつてな」

わかりやすい答えがちょっと残念。もう少しひねってほしかった

なあ。

でも雄吉さんの怒らせるなって、そういう意味だったわけね。

「さ、ここじゃ場所が悪い。おとなしく付いてきな」

伸びてきた手があたしに届く前に、ニツと笑って思いつきりその男の足を踏みつけてやった。

「いってえ！」

「アンタらに捕まるくらいなら死ぬ気で逃げるっての」

舌を見せてあたしは駆け出した。

「待てっ！」

「お前ら絶対逃がすなよ！」

足を踏まれた男はうずくまって走れないご様子。大声で指示を出しながら、お祭に来てる人から邪魔扱いされてた。

「二人なら何とかなるかな」

人通りの少ないところまで逃げたあたしは右足を軸にして半回転。

男二人に向きあい、持ってた小太刀を手にしたその瞬間。

「こつち」

「へっ……？」

誰かに手を捕まれた。

予想外だったあたしは簡単に体が動いて路地裏に連れ込まれた。

「ちよつ、誰……」

「静かに」

声は男のものだった。でも路地裏が暗がりのせいもあって、顔がよく見えない。

とりあえずさっきの奴等から逃げられるようにおとなしくしておく。

「いたか？」

「こつちにはいねえ！」

「くそっ、行くぞ！」

あたしが見つからないことに苛立っているのか、男二人は足早に去っていった。

「ずいぶん妙な輩達と知り合いなんだね」

「……あ」

見知った顔が太陽でようやく見えた。

「こんにちは」

何もなかったかのように先生の元教え子である加地さんは手をひらひらと振ってた。

「追われてたみたいだね」

「……あれですよ、鬼ごっこです」

なんとなくバレたら面倒な気がして誤魔化してみたけど。

「それなら小太刀は必要ないでしょう？」

「ごもつともです。あたしは小さくため息を吐いて追われたことを肯定した。」

「本来ならああいう連中は捕まえるべきなんだろうけど……」

「けど？」

「黒幕を引き出したいんだ」

困ったような表情で笑う彼は話を続ける。

「最近黒幕の手足になって動く連中がかなり増えてる。はっきり言えば、雄吉も似たようなもんだ」

「……雄吉さんの仕事を手伝ってる先生もいずれ捕まるんですか」
個人的ですがそれは絶対止めたいんですけど。

「心配ない。先生は雇われ侍を片付けた後ちゃんと警察に差し出してる。それなりに功績があるから大丈夫だよ」

「そうですか」

良かった。ほっとしてたら加地さんがあたしの顔を見ててちょっと慌てる。

「追われたことに心当たりは？」

はつきり言えはある。雄吉さんに頼まれたって言うってたし。

「あるの？」

「……わかりません」

そう答えるのが精一杯だった。

雄吉さんのことを言うのは正直構わない。でも一応は先生の友人らしいし、まだ何かを言うべきではない気がした。
「わかった。また何かあったら遠慮なく言って」
「ありがとうございます」
「いえいえ、これが仕事ですから」
そう言って加地さんは去っていった。

ちよつとマズイことになってきたかな。
そう思ってたため息を吐いた瞬間。

「寿々」
背後からあたしを呼ぶ声がして体がビクッと跳ねる。
聞き覚えのある昨日怒鳴ってしまった相手の声。

「……っ」
会わず顔がない。一方的に怒鳴ったあたしには、後ろにいる健ちゃんを直視することが出来なかった。

「逃げないで聞いて」
しつかり手首を捕まれて、逃げることは不可能。触れられた手首が妙に熱い。

「何よ……」
謝りたい気持ちがあるのに、あたしは苛ついたような声が出てしまった。

「昨夜はごめん」
健ちゃんのしおらしい声に、はっと逃げる気が消えた。
「まだあの人のこと完全に信頼はしてなくて、いずれ殺されるんじゃないかと思ってた」

悲しくなった。健ちゃんが不安だったことも、まだ先生をあの人と呼んだことも。

「でも寿々がそれだけあの人を信じてるなら、俺も信じる……先生

を」

予想外の言葉にあたしは顔だけ健ちゃんを振り返る。

「何で急にこっち向くんだよ……！」

そう言っただけで慌てる健ちゃんは、耳たぶまで真っ赤だった。

「今先生って言ったよね」

「……別に」

「ありがと、凄く嬉しい」

ぶっきらぼうに返されても、あたしの頬が緩むのは止まらなかった。

「おや、仲直りしたようだね」

帰ったあたしと健ちゃんを出迎えてくれた静さんは一瞬目を丸くしてニヤリと笑った。

「うん、解決解決！」

あたしは笑顔で静さんにピースした。

「そんなに浮かれてんなら夕飯手伝いな」

「……はい」

嬉しかった気持ちが一気に元の生活に戻った瞬間だった。

タイミングが良すぎるっていうか、静さんには敵わないっていうか……。

「寿々」

「何？」

「色々、ありがとな」

頭をかきながら、照れ臭そうに健ちゃんは言った。
ちよっとときめいた自分にびっくりした。

「夕飯の手伝い変わってくれる？」

「嫌だ」

即答ですか。考える時間無しって酷くないか？

「健ちゃんのケチ！」

「なっ！」

「何でも良いから早く手伝いな！」

「はいっ！」

「すみません」

静さんには一生勝てない気がした。

結局あたしは健ちゃんも強引に巻き込んで夕飯の手伝いを開始。

「へえー、健ちゃん意外と器用だね」

「……お前が無器用過ぎなだけじゃないか？」

黙って大根のかつら剥きをしていた健ちゃんは包丁を置き、手に
あたしが切ったキュウリが上手い具合に繋がってぶら下げていた。

「キュウリくらい切れるようになればよ」

「……うるさい」

こんな幸せは束の間だけど、その時間だけあたしは雄吉さんの言葉
を忘れてたんだ。

じゅうじ。

「……困った」

布団の中であたしは一人呟く。体が鉛みたいに重くて仕方ない。

「寿々、いつまで寝てる気だい？」

部屋の外で静さんがあたしを呼んでる。

「静さん……」

情けない声で静さんと呼ぶ。少し間があってから障子が開いた。

「どうした？」

「肩痛い……」

ズキズキとうずくように痛むあたしの肩。そのせいで体が動かないようだ。

「昨日走ったんかい？」

眉を寄せて静さんは言った。

「少しばかり」

変な三人組に追い回されたから、仕方なかったんだよ……。

静さんはどこか遠くを見ていたあたしの額を手で叩いた。

「痛い……」

「暴れるなって言ったのに聞かん罰が当たったんよ。今日は寝とり」

「はい」

動く気にもなれず、あたしはおとなしく布団にもぐった。

眠ってたあたしの邪魔をしたのは、首筋に当たる冷たい何か。

「あら、起きました？」

顔を上げて最初に入ってきた光景はあたしの上に跨って、雄吉さんが笑う姿だった。

あたしの首筋には彼のものであるろう刀の刃が当たっていて、少し

でも動けば赤い液体が噴き出す。

「……な、にかご用ですか」

冷や汗があたしの頬に流れる。雄吉さんはただ笑みを浮かべて、

あたしを見ていた。

「美しい」

「は……？」

「人間の戸惑い、恐怖する顔があつしは一番好きでさあ」

冷たい笑みがあたしを射る。あたしはこれ以上出ないくらい汗が噴き出すのがわかった。

「今日は、ずいぶん態度が違いますね」

前はあたしにすら弱々しい感じだったのに、一体何があつたわけ。色々……良いことがありやしてね」

ニタリと笑う顔に背筋が凍った。

「あたしを殺すの？」

「最初はその気でいたんですが……気が変わりやした」

雄吉さんがあたしから退く。それにつられるようにあたしは上半身を起こした。

「利用出来る限り、利用させてもらいやすぜ？」

「……勝手にしてください」

どうせ今までだってこの人に利用されてたんだし、前と変わらないよ。

「では、早く良くなつてくだせえ」

上辺だけのいたわり、ありがとうございます。

ニヤリと笑みを浮かべた後、ひらりと彼は走り去った。首筋にはまだ刀のひんやりした感触が残ってる。

「とうとう死ぬかと思った」

まだ生きた心地しない。

あたしの眩きは空に消える。肩の痛みなんてもうなかった。だるくもない。

「ある意味医者？」

有り得ないか。なんて一人突っ込みをいれつつ、あたしは縁側に
出た。さっきの危機的状況に反して暖かな陽射し。

そろそろ、本格的にヤバイかもしれない。誰かにこのことを伝える
べきだけど……。

「誰に言うの」

ふさわしそうな人が思い浮かばない。

「寿々さん？」

「あ、先生……」

「肩の傷が開いたと聞きましたが……大丈夫ですか？」

「はい。もうすっかり」

心配かけてばかりだな、あたし。

安心してもらいたくて、あたしは笑顔を見せる。それにも関わら
ず、先生は真顔であたしに近付いた。

「……先生？」

「寿々さん」

普段ずつと微笑んでる先生が、いつもと違う。

無意識のうちにあたしはジリジリと後退していた。

「どうか、しました……？」

戸惑うあたしを先生は悲しそうに見て、そつとあたしの首筋に触
れた。

「ここ、誰にやられたんですか？」

「え……」

首筋から離れた先生の手には少量の……赤い血。

「うそ」

動揺して声が震える。手で触れば水のような感触が伝わる。

「や、だ……やだやだ！」

死の一字があたしの頭に焼き付いた。それを振り払うようにあ
たしは取り乱した。

「寿々さん、落ち着いて……」

「いやあっ……」

先生が伸ばした手を振り払うあたし。頭が真っ白になって何も考えられない。

「先生？ どうし……っ寿々！？」

騒ぎを聞き付けて健ちゃんが出てきた。でもそれにも気付けないくらい、あたしは動揺してしまっていた。

「寿々！」

両手を振り乱すあたしを抱き込み、健ちゃんは必死にあたしを呼んでくれた。

「あたし、死ぬの……？」

泣きながら健ちゃんを見上げる。あたしの頭は霞がかってなんだからはっきりしない。

健ちゃんも困惑気味だった。

「死にませんよ」

その言葉があたしにどれだけ救われたんだろう。

「死なせたりしません。だから、落ち着いてください」

自然と体が暴れるのを止める。健ちゃんもあたしを抱く腕を緩めた。

「寿々……大丈夫か？」

不安そうな健ちゃんを最後に、あたしは意識を手放した。

まただ、また同じ。

「毎回あたし意識なくすなあ……」

「今回はいつもと違う」

聞き慣れた声。顔を横に向けると稽古仲間がいた。

「俺がここにいる」

刀を脇に置き、柱に寄りかかる健ちゃんと視線が交わる。それだけで胸がざわざわした。

「大丈夫か？」

「うん……」

あたしの中で気持ちはだいぶ落ち着いてた。

「俺が肩を斬ったときはあんなに動揺してなかっただろ？」

「……前は健ちゃんに怒りが向いてたから、気にならなかった」

でも今回は違う。斬った本人の雄吉さんがいなくて、怒りや驚きを誰にぶつければいいかわからなくなった。

それに首は斬られたらホントに危険な場所だって、先生が言ってたから。恐くて恐くてたまらなかった。

「誰にやられた？」

核心をついた質問にあたしは唇を結んだ。

「何で黙ってたんだよ。斬られたんだぞ？」

言ったらまた雄吉さんが怒って刀を持って来るかもしれない。

負けない気でいたあたしが、なんだか愚かに思えてきた。

「雄吉さん」

肩が跳ね上がる。気が付けば、先生が障子を開けてあたしと健ちゃんを見ていた。

「そうですね？」

「あ……」

否定出来るほどあたしは嘘をつくのが上手くない。二人から顔を背けて黙るのが、精一杯だった。

「本当なのか？」

「ごめんなさい……」

あたしは泣きながら謝っていた。

「馬鹿。何でお前が謝るんだよ……」

健ちゃんはあたしを慰めようと頭を撫でてくれる。溢れる涙は止まらなくて、布団に染みを作った。

「あたし、寝てて全然気付かなくて」

声が震える。

「もし気付いてたら、こんなことにならなかったかもしれない……せつかく、先生に剣術教わったのに」

申し訳なかった。今までの稽古を無駄にした気がした。

「寿々さん、傷が治ったらまた稽古しましょう」

「先生……？」

いつも通り先生は笑っていて、怒られると思ってたあたしには意外としか言えなかった。

「無防備な人を襲う人間は、自分の弱さを認めています。大丈夫、貴方は彼よりも強い」

涙を拭われ、あたしは目を大きくして先生を見つめた。

先生はただ一つ頷く。健ちゃんを見れば、同じように首を縦に振った。

「……ありがとうございます」

あたしはずいぶんな幸せ者かもしれない。こんなに優しい人達に囲まれているんだから。嬉しくて嬉しくて、あたしはまた泣いてしまった。

じゅうに。(後書き)

今回は短めの話が続いたので二話更新しました。

読んでくださった皆様、ありがとうございます。

更新出来るときにきちんといたしますのでよろしくお願いします。

じゅっさん。

「幽霊？」

「そう、あのお屋敷に夜な夜な泣き声がするんだって！」

稽古の休憩中に、あたし以外の紅一点の花ちゃんが言い出した幽霊発言。

「空耳じゃないのか？」

「違うもん幸宗の馬鹿っ！」

幸宗より二つ年下の花ちゃんだけど気が強いのはたぶんあたし以上。

「じゃあ見に行こうか、今夜にでも」

「え……本気？ 健ちゃん」

わざわざ得体の知れないものに会いに行くわけ？

「何だ寿々、恐いの？」

「そっ、そんなわけないじゃん！」

嘘。実際そういう系統は大の苦手。

でも健ちゃんや幸宗に馬鹿にされたくないから意地張っちゃった。

「じゃあ決まり。今夜神社に集合」

「ありがとう健ちゃん！」

花ちゃんはぴょんぴょん飛び跳ねて健ちゃんに抱き付いてた。

肝試し決定ですか……。

「ふーん、幽霊ねえ」

「静さん信じますか？」

夕飯で使ったお皿を洗いながら肝試しの話を静さんにしてみた。しっかり者の静さんなら幽霊なんていないって言ってくれるんじゃないかなって思ったんだけど……。

「そりゃあ幽霊はいるさ。うちの死んだ旦那もたまに枕元に出てくるしねえ」

「へ、へえ……」

どうしよう幽霊普通に存在してる！

「それより、夜出掛けるんなら気をつけな」

「え？」

「最近若い女をさらう輩がいるらしい。健太と一緒になら大丈夫だろうがねえ」

「どんな人間でも幽霊よりマシだよ……」

「何か言ったかい？」

「いえ別に」

刻一刻と近づく約束の時間に、自然とため息が出る。

「寿々」

「ひゃあっ！」

「な、何だよ急に叫んで……」

「け、健ちゃん」

びっくりしたー。こういうときに後ろから呼ばないでよ……。

「時間だからそろそろ行くぞ。行ってきます」

「ああ、氣いつけてな」

肝試しに興味ない静さんは自分の家に帰っていった。

あたし達も出掛ける準備をする。

「……木刀なんか持つていくのか？」

「何かあったら困るでしょ」

幽霊に木刀は当たらないかもしれないけど、ないよりは絶対にマシだもん。

「普段薙刀振り回すお前が幽霊を恐がるなんてな」

「うるさいよ健ちゃん！」

ここぞとばかりに面白がっちゃって、今度の稽古でボコボコにしてやるっ！

「あ、寿々！ 健太！」

「幸宗。花ちゃんは？」

噂の提供者が不在。納得してない顔の幸宗はしかめっ面のまま言う。

「恐いから行ってきたと」

「えっ」

何それ、有りなの！？ そんな選択肢があるならあたしだって…

…。

「あたしも帰る！」

「今更それはないだろ？」

「大丈夫だって三人いるんだし！」

悪魔が二人いる！ 悪魔があたしの肩つかんでる！

「ちよっ、引っ張ってる！ あたしの意見無視で引っ張ってるよ！」

暴れるあたしを抑えて中に入ろうと門のそばまで来ると苛立った

男の声がした。

「うるせえなあ……」

顔を見合わせて三人で物陰に隠れる。

「気のせいかな？」

格好から侍ではないのがわかる。バレずにまた屋敷へ引っ込んだ男を確認してから口を開いた。

「人が住んでたのか」

「そんなはずねえよ、誰も住まねえから壊して広場にする話が出てるんだぜ？」

ここら辺を一番知ってる幸宗が言うんだから間違いない。

「行ってみよっか」

「急にやる気になったな」

「だって人がいるってわかったから」

幽霊じゃなかったってことでしょ？ それで充分よ。

気付かれないように歩きながらあたしは強気な態度を見せた。

「現金なやつ」

「幸宗に言われたくない」

「何!？」

「静かに」

先頭を歩いてた健ちゃんが手で制した。
耳を澄ますと話し声が聞こえてくる。

「今日で何人目だ？」

「四人になります」

「ふん……もう一人くらいほしいな。まとめて売り飛ばした方が高く売れる」

「なあ、どうということなんだ？」

小声で幸宗が健ちゃんに聞く。

あたしに思い当たる節はたった一つ。

「静さんが言ってた……」

「寿々？」

「最近若い女の子がさらわれる事件があるって」

幽霊話のついでに聞いた世間話がここで役立つとは思わなかったけど。

「じゃあここはそいつらの根城ってわけか」

まとめ売りってことは女の子達はここにいるんだ。

「どうする？」

「そりゃあ、決まってるでしょ」

「ちょっとアンタ達！」

「どうしたんだいお嬢さん、こんな寂れた場所にたった一人で」

丸腰の男が三人。正面から突入したあたしを食い入るように見つめていた。

「友達を返してもらいにきたの、皆はどこ？」

顔はどうあれ、あたしだって売りの対象になれる。

目の前の奴等からすればあたしは格好の餌だ。

「来な、案内してやる」

ぎしぎし鳴る廊下を歩く。

前に一人、後ろに二人であたしを囲んでるつもりらしい。

「この中だ」

「何？ 通してよ」

部屋に入ろうとしたら男が制した。

三人ともにやにや笑ってて気持ち悪い。

「お前で品物最後の一人だ！」

飛び掛かってくる一人にあたしは笑みを隠せなかった。

「……馬鹿ねえ」

「ふべっ！」

「丸腰で来ると思ったわけ？」

あたしは左頬を力一杯木刀で殴り飛ばした。

「木刀！？」

「寿々一人じゃねえぞっ！」

幸宗と健ちゃんも残りを取り押さえる。

「仲間がいたのか……！」

「アンタらの敗因は二つ」

「この子達の泣く声を聞いた人間の存在に気付かなかったことと、
あたし達が肝試しでここに来たこと」

この後警察が来て、無事に事件は解決した。

「じゃあ幽霊じゃなかったの？」

「うん、捕まった子達の泣き声だった」

「そうなんだ、良かった」

恐がってた花ちゃんほっと胸を撫で下ろした。

「でも寿々達凄いいね！ 人さらい捕まえちゃうなんて」

キラキラ目を輝かせて尊敬のまなざしが向けられる。

「うーん……あんまり良くなかったんだよねえ」

「何で？」

「騒ぎを知って先生が来たら無人でも勝手に敷地に入ったこと怒られちゃって。次の日は三人そろって一日中正座」

小さい花ちゃんもこれには苦笑してた。

そんな中慌てた様子で幸宗が走ってくる。

「寿々、近所のおばさんが墓地の近くで首のない人を見たって！」

「もう無理！」

じゅっさん。（後書き）

読んでくださりありがとうございます。

さて、登場人物の紹介ですね。今回はカミサマです。

うーん、彼はですねえ……見た目は中年のおじさんが派手な格好をしてるけど実際もぐだぐだな人です。

傷つきやすいけど立ち直りも早い面倒なヤツですが、やるときはやります。

今回はこんなもんで。次回もお楽しみにー。

じゅっよん。

「んー、快晴！」

あたし葛西寿々は普通の女子高生でした。でもカミサマのせいで変な穴に落ちて、たどり着いたのは江戸時代。楽しく毎日を過ごしてましたが、最近周りで不穏な動きが増えています。

「……説明はこんなもんで」

さて、最近怪我続きだったあたしもようやく完治。

「健ちゃん、稽古しよー！」

「あんま暴れるなよ、病み上がりなんだから」

ポンポンとあたしの頭を叩く健ちゃん。

「はい」

とは言っても、三週間も動いてないのし、流石に腕が落ちるよ。

「今日の目標は、前の感覚を思い出す！」

「へえー、頑張れ」

どうしてもよさそうな健ちゃんにあたしは横目で見やる。

「手伝ってね？」

「はいはい」

何か子供扱いされてる気がする……。

「来ないの？」

「そっちから来ていいよ」

ずいぶん余裕あるじゃん。ちょっと悔しい。

「んじゃ、遠慮なくっ！」

薙刀を振り回して健ちゃんの刀を弾こうとぶつける。

「おっ前、病み上がりなんだから少し抑えろよ！」

踏みとどまった健ちゃんはわかりやすく動揺した。声もいつもよ

り大きい。

「大丈夫、まだ半分しか本気じゃないから！」

足を払おうとあたしは薙刀を下に振った。

「嘔吐け、もう七割近く本気だろうが！」

健ちゃんは見事にそれをかわし、あたしに木刀を振り下ろす。

「……っ！」

避けることも弾き返すことも出来なくて、あたしは目を瞑った。

衝撃が来なくて、目を薄く開ければギリギリのところ健ちゃんはそれを止め、不敵な笑みを浮かべて。

「少し衰えたか？」

なんて尻餅をついたあたしに健ちゃんが手をさしのべる。

「……次は勝つもん」

それを払う負けず嫌いなあたし。結局三時間ぶっ通しで稽古していた。

勿論静さんにこつてり絞られたのはまた別の話。

「健太、ちよつとよろしいですか？」

「はい？」

夕飯時、先生は健ちゃんがご飯を終えたのを見届けてから先生の自室へ連れ出した。

「先生、どうしたんだろ……」

「さあねえ」

うーん、気になる。

「好奇心旺盛な自分が悲しいわ」

あたしは今、先生の部屋の近くに来てる。足音や息は出来るだけ小さくして気配を殺す。段々立ち聞きが本格的に上手くなってるかも……。

意味ありげな先生の呼び出しは、絶対何かある。あたしはまた障子に耳を近付けた。

「本当なんですか？」

「絶対の確証はありませんが、恐らく」

ずいぶん真面目な話らしい。声の雰囲気为重苦しくてわかる。

「見てきました」

「どうして……！」

感情的になる健ちゃんにびくつと身体が跳ねた。

「何で、俺に言ってくれなかったんですか？」

「言ったら仇討ちに行くでしょう？」

仇討ちっていうのは、死んだ当人の代わりに倒すということ。

「……当たり前です、父上を殺された恨みは、まだ消えてはいません」

唸るような声。いつもと違う、最初に会ったときの健ちゃんにあたしは困惑した。

要するに、先生が健ちゃんのお父さんを殺した人を見つけて、勝手に見にいって先生に怒ってるんだ。

「仇討ちは、私に任せていただだけませんか？」

「え……」

何で先生が動こうとするの？

「あれは、なかなか強そうですね。貴方が行っても、命を落とす可能性が高いのです」

「……かまいません。俺にその男の居所を教えてください」

健ちゃんの言葉に、あたしは着物の袖をギュツとつかんだ。

死ぬ覚悟で行こうとしてるんだ。

「無駄死にするつもりですか？」

「無駄にはしません」

「……寿々さんは怒りますよ」

「どうして今寿々の名前が出るんですか」

うるたえたように聞こえるのは、きつとあたしの気のせいだ。

「仲良くなったように見えました。貴方も、楽しそうにしていますね？」

いつも稽古するときと変わらない先生。

「何も言わずに逝かれるのは、酷く寂しいと思いますか？」

健ちゃんはずっと黙っていた。

「一つ、お願いがあります」

「……お願い？」

勿体ぶる先生の言葉に自然とあたしも耳をそばだてた。

「私の目が届く範囲で暴れてくださいませんか？」

そう言った先生は、きつといつものように余裕な笑みを浮かべている気がした。

「何でついてくんの？」

「だって」

健ちゃんが心配だから、先生との話を盗み聞きしてて……なんて言えない。しかも今日、仇討ちに行くつて聞いたんだから余計離れられないよ。

「久々の稽古は行かないの？」

「……健ちゃんがいなきゃ面白くないもん」

嘘じゃないけど、本当はちょっと行きたいんだよね。でもやっぱり心配だから今日は休んだ。

「何かあった？」

「な、何が？」

声裏返っちゃったよ！ 確実に嘔吐いたのバレたよ、どうしよう。

「ずいぶん可愛いこと言うなあ、と」

不覚にもあたしは頬を朱に染めた。

「顔赤い」

「うつさい！」

健ちゃんはたまに天然。平気で可愛いとか言うからあたしの心臓は大忙しだ。

「ねえ、健ちゃん今日どこ行くの？」

そこで黙っちゃうんだ。わかりやすいなあ……もう。

「健ちゃん」

「ん？」

「一緒に、行く」

「なっ……！」

あたしの言葉に健ちゃんは目を見開いた。

「あたしも一緒に行きたい」

「馬鹿だな、別に遊びに行ったりしないよ。ただ先生が道案内してくれるだけだ」

少し考えてからふっと笑顔をを見せてあたしの額を指で弾く。

「……ならあたしがいても問題ないでしょ？」

額を抑えたまま健ちゃんを睨む。

「我儘言っなって」

健ちゃんはたぶん知らない。あたしが話を盗み聞きしてたこと。

「そろそろ行きますか？」

ゆったりした動作で先生は現れた。いつも通り、何を考えてるかわからない笑みを掲げて。

「はい」

少しだけ表情を堅くして、健ちゃんが先生に近寄る。

「寿々さん」

「は、はい」

先生なら一緒に連れていってくれるってちょっと期待してた。

「留守をお願いします」

「……はい」

まあ脆くも崩れ去ったけど。

「行ってきます」

「じゃあな」

口を尖らせ、恨みを込めた目で二人の後ろを見つめる。

結局あたしは待つことしか出来ないのか……。

ため息を吐いたすぐ後のことだった。

「ん？」

先生の去り際にひらりと落とした一枚の紙。そこには細かく書かれた地図があつた。

「これ」

地図から顔を上げて前を見れば、歩きながらも後ろを向いて小さく微笑む先生がいた。

「ふーん？」

なるほどね。落し物は届けなくちゃ。

あたしは一人ほくそえんだ。

じゅっよん。(後書き)

いつも読んでくださりありがとうございます。

今回は新たなキャラクターを登場させました。伊尾健太です。今のところ彼はきつい印象ですが、終わりに向けて丸くしたいと思います。

では次もお楽しみに。

じゅっ。

「何だお前ら」

額から頬にかけて一直線の傷跡。左まぶたはその傷跡を受け、開くことはないようだった。

先生みたいな金髪が眩しくて、目付きは大分悪いみたい。まあ遠目で見てるんで所々わからないけど。

あたしは先生達の尾行と地図を使ってここまで来た。やっぱり悪者のアジトは町はずれなんだと妙なところで納得する。

「初めまして、藤沢と申します。貴方が重兵衛^{ジュウヘエ}さんでしょうか」

「ああ」

自らの名前を認めた男、重兵衛は大きく開けた着物の胸元を手でがりがりと擦った。

「聞きたいことがあつて参りました」

相変わらず先生は穏やかだ。その少し後ろで健ちゃんはうつ向いてじっとしてる。

「……聞きたいことだあ？ 言ってみろ」

「伊尾慶喜^{イオヨシノブ}という男、ご存じですか？」

お父さんの名前を聞いて健ちゃんはびくつと小さく肩を跳ねさせた。

「伊尾慶喜？ 覚えてねえなあ」

傷跡をかきむしり、興味なさげに答える。

「……おい、ガキ」

重兵衛が健ちゃんに視線を映す。うつ向いたままの彼に重兵衛が目を細めた。

「顔上げろ」

何も言わずに健ちゃんはゆっくり顔を上げた。こっちからは重兵衛の顔しか見えないけど、健ちゃんが怒りを我慢してるのがあたしでもわかる。

「前にどつかで会ったか？」

「いいえ」

「お前に似た男を覚えてる。昔、殺りあった男……」
「それだけ聞けば、充分だった。」

「ぶった斬ってやる……！」

健ちゃんが刀を抜いた。

「やはり貴方でしたか」

でもそれよりも早く重兵衛に斬りかかったのは先生の方だった。
余裕のある声だけど、先生の刀は重兵衛には届いてない。

「居合いの速さは誰にも負けねえよ」

脇に置いてあった刀はいつの間にか先生の刀を止めていた。

何も言わずに健ちゃんはそれを見つめた。あたしも同じように、
瞬きを忘れてそれに見入る。

「おい、俺に何の恨みがあるんだ？」

「彼は父親を貴方に殺されたそうです」

「……はっ、やっぱり見たツラだと思っただぜ。でもなあガキ」

意地の悪い瞳が健ちゃんを見据える。

「お前の親父はなかなか強かったぜ。あんなに興奮したのは久々だった」

目をギラつかせ、重兵衛は興奮気味に言う。健ちゃんは言葉を詰まらせた。

「あまり人の神経を逆撫でするのは感心しませんね」

再度刀を振り下ろし、先生は言っただ。

「その敬語やめろ。鳥肌たちそうだ」

あぐらからやや強引に膝を立たせ、重兵衛も臨戦体勢に入る。気が付けば、周りにいる重兵衛の手下も刀を構え、先生と健ちゃんを囲む。

助けに行くべきか、ここで邪魔にならないように息をひそめるべきか。

怪我から復帰したのが最近だから、足手まといにはなりたくないか

った……のに。

「女がいるぞ！」

「げっ！」

見つかった、割とすぐに。

「寿々、お前……」

「おやおや」

溢れそうなくらい大きく目を開く健ちゃんと、悪戯がバレて笑うような声を出す先生。

「大人一人にガキ二人……しかも一人は女がいるとはなあ。お前ら、俺達を馬鹿にしてんのか？」

うーわ、いつの間にかあたしも円の中心にいるよ。

「何で来たんだよ」

三人で背中を合わせて集まる。背中越しに健ちゃんの声が聞こえた。

「落し物を届けにきたの。ここまでの道が書かれた地図をね」

「地図って……まさか、先生？」

「助太刀は必要かと思いましたがね」

そう言つて先生は刀をかまえ直した。

「あたしが助太刀ですか……。微々たるものでよければ」

「女に何が出来る」

重兵衛が偉そうな口調で笑う。

「おじさん知ってる？ 未来では女の方が強い世界が広がってるのよ」

あたしは鼻で笑い返した。ほんの一部かもしれないけど、確かにあたしの時代は男女平等だから。

「いい度胸だ」

重兵衛の顔には青筋がたつて見えた。

「あ……やっぱ怒らせちゃった」

「あまり煽るべきではありませんよ」

先生が苦笑いして答える。でも明らかに楽しんだ。

「テメエら、俺が許す。こいつら殺れ」

その言葉で手下達はあたし達に斬りかかった。

「先生、どうします？」

囁くような健ちゃんの声。ふざけてたあたしに比べてだいぶ切羽詰まってるみたい。

「そうですねえ……斬って斬って斬るしかありませんね」

「まあ、それしかないですよね」

三対三十のかなり無謀な喧嘩ですけど。

「では、健闘を祈ります」

「はい！」

あたし達三人はバラバラに散った。

「お二人とも無事ですか？」

「勿論です！ まだ地獄に行く気はないんで！」

「地獄に行く気か、お前……」

あたし達の周りには倒れた侍の海が広がってる。

「冗談。健ちゃんは地獄行きたい？」

「絶対に嫌だ」

真面目な健ちゃんだから真剣な顔で返された。

「さて、あとは貴方だけですネ」

「くそっ……！」

勢いよく刀を抜く重兵衛。刃こぼれした刀が鈍く光る。

「俺がやる」

瞳をギラつかせ、健ちゃんがあたしの前に出る。

「待ってください」

あたしより先に、先生が健ちゃんを止めた。

「止めないでください先生！」

「君にこの男を殺して得がありますか？」

「得とか損とか！……どうでも良いんです」

怒りを鎮めようと血が止まるくらいの力で拳を作る健ちゃん。必死に堪えてるのが嫌でも伝わってきて辛かった。

「ただ、俺は仇を討ちたい。それだけです」

「仇は見るだけでも討てたのがわかります。お願いします、譲ってください」

先生は健ちゃんに頭を下げた。

「貴方の刀で人を殺したくありませんから」

先生はどこまで優しいんだろう。

流石に健ちゃんも刀を鞘に戻して後ろに下がった。

「話し合いは終わったか？」

「ええ、たった今」

笑顔で先生は刀を構えた。あたしと健ちゃんは、後ろで行く末を見守る。

「後悔するなよ？」

「ご心配なく」

二人の睨みあいが続く。あたしの入れるような空気じゃない。

もし先生があたしだったら、確実に無理だと思った。

「私は自分の決めたことに後悔なんかしません」

でも先生なら、先生だから何とかしてくれる気がしてたんだ。

じゅろく。

高音が何度も部屋に響く。刀と刀のぶつかりあい、あたしは氣迫を感じた。

「やっぱり俺が」

ぽつりと呟いた健ちゃんを見上げる。

「まだ言ってるの？」

「これは俺の問題なのに、先生もお前も巻き込んで」

健ちゃんはこういう人だ。いつも周りから一歩退いて色々気にしてる。

「何が俺の問題よ。ここに来た時点で先生もあたしも自分から首突っ込んだの」

一人で抱えようとするのはあんまり良いことじゃないから。

「健ちゃんの荷物、あたしと先生が半分背負ってあげるよ」

ぽん、と背中を軽く叩いて笑ってやった。

「……ありがとう」

うつ向いて顔は見えなかったけど、健ちゃんは確かにそう言ったんだ。

「なかなか強えじゃねえか」

「お褒めいただき嬉しいかぎりです」

先生と重兵衛は互角に戦ってた。荒っぽい重兵衛の太刀筋に比べて先生は無駄がない。

いつだか先生が言ってたことがある。太刀筋は人生を表すようなものだって。

「お前、何者だ？」

鋭い視線が先生に飛ぶ。

「ただのしがな一般入です」

睨まれてんのに先生ってば素敵な笑顔でもう……。

「それより、黒幕がいるのではないですか？」

「何の話だ？」

重兵衛ははぐらかすように笑う。

「貴方が彼の父親を殺した件です。彼の父親は役所に勤めていたそうですが、貴方が彼と接した話は聞きませんでした」

健ちゃんを見れば驚いた顔をしていた。たぶんホントのことなんだと思う。

「調べたのか？」

「少しだけ」

やんわりと笑みを見せる先生。重兵衛が舌打ちをして再び斬りかかる。

「貴様……」

「真実を話してくれませんか？」

「話すことなどないわ！」

轟くような大声にあたしは思わず耳を塞いだ。

「そうですか」

先生の目付きが変わった。

「ならここまでにしましょう」

刀さばきが速くなる。押されてるのは……勿論重兵衛だ。一瞬の隙について先生が重兵衛の刀を弾き飛ばす。刀は弧を描いて床に刺さった。

「く……っ」

先生の刀が真っ直ぐ重兵衛に向いた。笑顔のままだから更に恐さ倍増。

「話しますか？」

「……頼まれたんだ」

悔しそうな表情で重兵衛が口を開いた。

「誰にです？」

「手紙が届いた」

「名無しで？」

「……鳥」

「カラス？」

あたしは聞き返した。だってカラスって……あの鳥でしょ？

「そう書いてあった。金と一緒に殺してほしい男の名前が」

金欲しさの犯行ってわけね。

「心当たりはないのか？」

健ちゃんも聞く。怒りの矛先がカラスに向かっているのがわかる。

「知らん。ただ言えるのは、それなりの権力を持つてることだ」

そう答えた彼は加地さん達に連れていかれた。そしてあたしと健ちゃんの前を通るとき、重兵衛は健ちゃんに頭を下げたんだ。

「悪かった」

そう一言添えて。

「健ちゃん」

「何だよ」

警察に一通り事情を説明するために、先生は加地さんに付いていた。つた。

あたしは健ちゃんと一緒に家に帰るところだ。

「怒ってる？」

「別に」

でも健ちゃんの機嫌がかなり悪い。歩くのが少し速いからあたしは健ちゃんの後ろ姿に話しかける。

「怒ってんじゃん」

「怒ってない」

「……嘔吐き」

口を尖らせて呟くあたしの前で健ちゃんは足を止めた。

「何で来た」

「何で、って歩いてだけど」

「そうじゃなくて！……どうして付いてきたんだって聞いたんだ」

「助けになりたかったから」

「お前女だぞ？　少しは自覚持て」

「何よ、死ににいかうとする馬鹿が心配だったんだからしょうがないじゃん！」

怒られる意味がわからないよ。心配しちゃダメなの？　何だか無性に泣きたくなって、あたしは下を向いた。

「健ちゃん知らないでしょ」

駄目だ、地面が涙で歪む……。

「昨日先生と二人で話してたときあたし聞いてたんだから」

あたしの言葉に健ちゃんは少しだけ反応を見せた。

「お願いだから、死ぬ覚悟なんかしないで」

頬に涙が流れる。こっちに來てから泣くことが増えた気がする。

「その約束は、出来ない」

「何で……？」

「俺は武士だから」

急に、胸が苦しくなった。

「戦いで死ぬるのは、武士の本望だから」

悲しそくに笑わないでよ。

急に距離が遠く感じて、心が痛い。

「武士なんか、侍なんか……大っ嫌いだよ！」

「寿々！」

あたしは健ちゃんにぶつかるのも気にせず、その場から逃げ出した。

「寿々？」

「幸宗……」

家に帰れば健ちゃんがいるかもしれない。そう思っていていつも稽古してる神社に來たら、幸宗に会った。

相変わらず自主練は怠らないようで、やっぱり偉いとこんなときでも感心する。

「どうした？ 泣いてんのか？」

背伸びしてあたしの顔を覗き込んだ幸宗。普段は生意気な悪ガキの癖に、こういうときは優しいんだよね。

「ちよつと、色々あつてさ」

あたしが石段に座ると幸宗もあたしの横に並ぶ。

「あたしね、アンタとは生きてた世界が違うのよ」

武器を持つことも許されない戦いのない平和な時代。ほしいものは少しの努力で手に入るから、何かに必死になることもなかった。だからなのかな、あたしには侍の気持ちが理解出来ない。

「世界が違うって……。寿々はどつから来たんだよ」

「……空から」

落ちてきたとは言いにくいけど。

「ふーん」

「え、それだけ？ もっと何かないの？」

「別がない。寿々は寿々だから」

幸宗の言葉に驚いた。

「侍の考えが理解出来ない人間なんて江戸にもいっぱいいる。それを見捨てるか、見守るかは、本人が決めることだろ」

「幸宗って……大人だね」

あたしは感嘆のため息を漏らす。考え方があたしよりも全然大人だ。

「俺もいつかは武士になりたいから」

「そっか」

夢があるから、その辛さもちゃんと理解してるんだね。

口で言うのはなんか恥ずかしかったから、あたしは心の中で小さく応援しようと思った。

「……寿々」

「何？」

幸宗を見れば石の階段の一番下を指差して一言。

「待ってる」

「健、ちゃん……」

視線を移せば、鳥居に寄りかかってあたし達を見てる健ちゃんがいた。あたしと目が合って、鳥居から身体を離す。

「俺また練習するから。早く話して楽になっちゃえよ」

なんだかお兄ちゃんが出来たみたいだ。小さく笑ってあたしは大きく頷いた。

「ありがとう」

「おう」

幸宗はすぐに顔を反らしたけど、たぶん気持ちは伝わったと思う。

「健ちゃん!」

石段を駆け降りて健ちゃんの前に立つ。

「寿々、さつきは……」

「ごめん。あたし健ちゃんの気持ちわかってなかった」

自分の気持ち押し付けて、自分だけが可哀相に思ってた。

でも健ちゃんだって悩んでるんだもんね。

「俺も悪かった」

お互い謝ったら何だか笑えて、顔を見合わせて嘖き出してしまった。

「帰るか」

「うん」

縦に並んで帰る。健ちゃんの広い背中を見て、あたしは小さな決意を胸にしまった。

最後まで、健ちゃんを見守るから。

じゅろく。(後書き)

読んでくださって、嬉しい限りです。

今日は朝から一つ更新、寝る前に更新しました。
ちなみに今、青春ものが書きたくてうずうずしています。

適当すぎる後書きですが、次回もお楽しみに！。

じゅうなな。

「買い物くらいあたし一人でも行けるってば」

「荷物持ってやれって静さんに言われたんだよ」

野菜と調味料とお茶の葉だけならあたしだけでも大丈夫だと思うんだよね。

家を出てすぐに、前を歩いてた健ちゃんを足を止めた。

「痛いなあ、何で急に止まるの！」

静さんのメモ書き見てて全然気付かなかったあたしは鼻を健ちゃんの背中にぶつけた。

もろに当たってかなり痛いんですけど！

「悠里……」

「へ？」

「兄様！」

健ちゃんの視線の先にいたのは淡いピンクの着物姿の女の子。見た感じちよつと年下だけど落ち着きっぷりは向こうの方が確実に上。

「何でお前がここに」

小走りであたし達、というか健ちゃんのところに来た女の子は目をキラキラさせて声を弾ませた。

「会いに来たんです！ 仇討ちに行くとか家を出てもう半年になるのに何の音沙汰もないじゃないですか！」

唇を尖らせてムツとする姿も可愛いし様になってる。

目鼻立ちがはつきりしてて、こういうのが美少女なんだって実感しちゃった。

「それは色々あって」

「駄目ですつ、言い訳は聞きませんよ」

「あのー」

お取り込み中のところ邪魔しちゃってすみません。

「お二人は兄妹？」

「兄様この方は？」

「先生の家に住むもう一人の居候」

どんな紹介の仕方どころ。

「寿々です。初めまして」

とりあえず礼儀正しい挨拶をしてみると向こうもぺこりと頭を下げた。

「わたくし悠里と申します。兄がお世話になっっているようで」

「い、いえ」

お嬢様な態度に若干引け目を感じるあたし。

健ちゃんつてもしかして良いとこの坊ちゃん？

「ときに寿々さん。兄とはどういうご関係ですか？」

「……居候仲間ですけど」

「そうですか。安心しました」

につこり笑って妹さんは話を続けた。

「兄様には許婚がいるんですものね。まさか他の女性と恋に落ちるなんてことがあれば我が家の命運に関わることです」

「許婚？」

それって婚約者ってことだよね……。

「そんな話聞いてないぞ」

「言っていないもの。兄様が出ていった後に母様が連れてきたの」

家族だけがわかることだ。他人のあたしが関わる話じゃないと思っただ。

「ごめんなさい。買い物頼まれてるんで先に失礼します」

「だから俺も一緒に」

「いいから！」

怒鳴ったあたしに健ちゃんは驚いた顔をする。

気まずくてまともに目を合わすことも出来ない。

「……ごめん、妹さんと先に帰ってて」

「おい寿々！」

この場に居たくなくて、買い物に急ぐふりしてあたしは逃げた。

「重たい……」

野菜オマケしてくれるって言われたから調子に乗ってもらいすぎたわ。腕がちぎれそう。

「やっぱり、手伝ってもらえば良かったかな」

こういうとき健ちゃんとは仏頂面で重い方の荷物を持ってくれる。でも駄目だ、今は一緒にいれる気分じゃない。

妹がいることなんて知らなかった。仇討ちのためだけに江戸まで来たことを初めて聞いた。結局、あたしは健ちゃんのこと何も知らないんだ。

「トレーニングついでだし」

もうちょつと頑張りますか。

あたしは台所に向かう途中で先生の声を聞いた。

「健太の妹さんですか」

「はい。兄がお世話になっております」

「ご丁寧にも」

足を止めて部屋の中を盗み見ると、先生の向かい側に健ちゃん達兄妹が座ってて、少し離れたところに静さんがいた。

「早速で申し訳ないのですが、兄を家に連れて帰りたいのです」

「悠里、勝手なことを言うな」

「勝手はどちらです。大方わたくし達家族のことなんて忘れていたのでしょうか？」

妹さんには弱いみたいで、健ちゃんは何も言い返さない。

「兄は跡取りです。いずれ戻る必要があります」

確かにお父さんのいない家族で大黒柱になれるのはお兄ちゃんだ。頭ではわかってても、あたしの心は晴れようとしなない。

「藤沢様、兄への礼金は家から送ります」

「必要ありませんよ。質素な暮らしをさせてこちらが申し訳ないく

「らいですし」

朗らかに先生が話していると、突然健ちゃんが立ち上がった。

「兄様？」

「家に帰るかどうかは、俺が決めることだ」

珍しくドタドタと荒っぽい足音で健ちゃんは部屋から出てった。

呆然とするあたしを見つけた静さんが背中を押す。

「行つてやんな」

「でも」

「お願いします」

先生にもそう言われて、あたしは健ちゃんを追いかけた。

「健ちゃん」

縁側に腰掛けて外を見つめる姿が悲しそうだった。

そろそろと近寄つて名前を呼ぶけど、情けないくらい小さな声で。

「ここは居心地が良すぎた」

「それって……」

「いずれ母上にもきちんと報告しに行く必要があったんだ」

吹っ切れたようなすっきりした表情。

やめてよ、そんな顔しないで。

「妹さんと帰るの？」

健ちゃんは黙ったままだ。

「そうだよな。健ちゃんには家族や許婚がいるもんね」

口が言うことを聞かない。勝手に出てくる言葉が、あたしの本心に壁を作った。

「帰りたいなら帰ればいいよ。……あたしは止めないから」

そう、止めたりなんかしない。邪魔になるようなことしたくない。

「それで良かったんかい？」

「静さんが立ち聞きなんて、珍しいな」

今はあんまり誰かと話すこともしたくない。

「アンタ本当は」

「これで良いんです。健ちゃんは期待されてる人なんだから」

住む世界が違うつて、このことなんだ。
静さんの言葉を聞かずにあたしは続ける。
「あたしちよつと出掛けてきます」

「お前らつて仲良いのか悪いのかわかんねえな」
毎回毎回年下に相談事持ち込むあたしつてどうなんだろう。
家の手伝いをしてた幸宗にあたしは全部話した。
「帰らないでほしいなら引き止めればいいだろ？」
「出来るわけないじゃんそんなの」
井戸水を汲む幸宗は桶に水を入れていく。
あたしは地面にしゃがんで膝に顔を埋めた。
「あたしに健ちゃんの人生活める権利ないもん」
「お節介な割に妙なところでうじうじしてんのな」
うるさいよ、皆して人のことお節介呼ばわりしちやってさ。
「でも俺のここに来たってことは後悔してるんだろ？」
否定出来なかった。もつと素直な性格だったら、泣きながら止めたかもしれない。
あたしは深くため息を吐いて視線をずらした。
「あ、妹さんだ」
キョロキョロしながら吸い込まれるように路地裏へ消える悠里さん。
「いかにもお嬢様だな。絡まれやすいぞ、あーいうのは」
確かにそっち方面はあんまり行かない方が良くかも。
「あたしちよつと行ってくる」
「先に誰か呼んできた方が……つて寿々！」
幸宗の忠告を背中であきながら、あたしは小走りで路地裏を通った。

「待つて悠里さん」

「どうしたんです？ そんなに慌てて」

振り返った妹さんはきょとんとした。

「こっちはあんまり治安良くないから戻った方が良いよ」

「そうなんですか……？」

話を聞けば、江戸の町を一人散策中だったらしい。健ちゃんが相手しないから暇つぶしにふらふらしてたんだ。

「とりあえず戻る。長くいるべきじゃない」

華奢な手首をつかんであたしは元来た道を戻ろうとした。

「そうそう」

「俺達みたいなのがいるからよお」

見るからにガラの悪い奴等数人。

今日は絶対厄日だ。

じゅうはち。

「何するんです！」

「おとなしくしろ！」

声を上げた悠里さんを男が更なる大声で黙らせた。

「お兄さん達、あたしらに何か用？」

こっちはこれっぽっちも用事なんてないんだけどねえ。

顔や腕に刀傷があるところを見ると、彼らは元侍の現在フリータ
ーって感じ。

「お前はともかくこっちのお嬢さんは見たところ金持ちだ」

「娘の命を助ける代わりに金をもらう。お互い利害が一致するだろ」

「わ、わたくしの家は江戸より遙か西にあります。貴方達の望むよ
うなことにはなりませんわ！」

気丈に振る舞う姿も今は痛々しく見えた。

しかも普通に説明みたいなことしちゃってるし。

「ほお、そうかい」

「そんじゃあ身売りでもしてもらうか」

毎回捕まると売られるパターン、何とかなんないのかな。

流石に地味と平凡を好むあたしでも飽きるよ。

「しばらくここでおとなしく待つてるんだな」

「っ、開けなさい！」

薄明かりのさす蔵に押し込まれてご丁寧に鍵をかけられた。

妹さんは頑丈な扉を叩いて叫んでる。

「扉はここ一つか……」

「どうしてこの状況でそんなに落ち着いているんですか？」

無駄だつてわかった悠里さんは感情の矛先をあたしに変えた。

「んー、慣れてるから」

「捕らえられることに慣れるなんて……一体どんな生活なさってる
んです？」

「あたしとしてはもつと地味にいきただけどさ、周りが許してくれないんだよ」

困ったもんだね、ホントさ。

喋りながら蔵の中をウロウロしてみる。でも隠し扉みたいな画期的な代物は出てこなかった。

「そのときはやはり兄様が助けに？」

「健ちゃんだけじゃないよ。先生や近所の悪ガキも一緒に来てくれる」

皆優しいから、凄く強いから。

「でもあたしは、自分で出来そうなことは自分でやる主義なの」

誰かに助けてもらうのを待つなんて乙女チックな発想、あたしにはないから。

「蔵に閉じ込めてくれたのは有り難かったね」

武器とまではいかないけど、使えそうなものはある。

「寿々さん……」

妹さんの瞳が揺らいだ。

強気な態度してても、やっぱり怖いよね。

「貴方はあたしがちゃんと守るよ」

健ちゃんの大切な妹さんだし、大体さ可愛い子にはあたし弱いんだよね。

「だから協力してね」

「協力？」

首を傾げる悠里さんにあたしは口端をつり上げて笑った。

「誰か！ 誰かいないの！？」

「うるせえなあ、何だよ」

「もう一人の子が舌を嚙んで自殺を……！」

「何！？」

慌ただしい外の音。扉を開けてくれた男の頭にクワの持ち手をぶつけた。

「あちゃー、ヒビ入ってる」

まあいつか。この人の刀借りよう。

「悪いけど、ちょっと気絶しててね」

物陰に隠れてた悠里さんが恐る恐る近付いてきた。

あたしも悠里さんも最初から自殺なんて考えてない。

内側から開かない扉は外から開けるしか方法はないから、一番簡単なヤツにした。だって金ヅルが死んだら困るでしょ？

「行こう」

「人質が逃げるぞ！」

運悪く見つかったけど、町にはあと少しで着ける距離だった。

「寿々さん、どうしましょう」

混乱する悠里さんにあたしは言った。

「ここを真直ぐ行けば町に戻れる」

「え……？」

「一人でも大丈夫だよ。誰か強そうな人呼んできてくれない？」

つかんでた手を離して刀を鞘から抜く。

久々に触ったかも。扱えるかな……。

「寿々さんは」

「とりあえず足止めしとく」

「そんな……、危険です！」

ヒロインっぽい台詞だなあ、なんてのんびりしたこと言ってる場合じゃなかった。

「何だ、仲間割れか？」

追いつかれて集まり出す人さらいの奴等。十人くらいなら多少はなんとかなるかな。

「アンタ足手まといなのよ、早くどっか行つて」

「寿々さ……っ」

きつい言葉と睨みをぶつけて、無理矢理悠里さんを走らせた。

「あんな可愛い子泣かすたあ鬼だな」

はいはい、どーせあたしは悪役ですよ。

「じゃあそんな鬼にボコボコにされる？」

「やめろって女に扱える代物じゃねえんだから！」

「貧乏人を甘く見ないでよね！」

ゲラゲラ下品に笑う男に鞘をぶつける。

見事にヒットしていきり立つ元侍を片っ端から倒していく。

「ったく、うざったいなあ！」

「隙ありいっ！」

一瞬気を抜いたところで死角から男が飛び掛かってきて、衝撃を予想して目をつむる。

「毎回毎回お前って騒ぎに巻き込まれるんだな」

さっきだって聞いたはずなのに、ほしくて仕方なかった声。

「心配で目が離せない」

男を吹っ飛ばして健ちゃんは笑った。

「……騒ぎが寄ってくるから仕方ないの」

「確かにな」

いつものペースになった。やっぱりあたし、一人じゃ駄目なのか
もしれない。

「警察に言うか？」

「いいよ、未遂だし。また加地さん経由で先生にバレたらまずいも
ん」

適当に放っておけば地面に伸びてるフリーターさん達も自分の家
に帰るでしょ。

「そつえば健ちゃん何でここだったの？」

「幸宗が教えてくれた」

「悠里が悪かったな」

「いいよ別に」

毎度のごとくあたしから首突っ込んだし。そこから急にお互い黙っちゃって、ちょっと気まずい。

幸宗に言われたことを思い出して、息を吐き出した。

「健ちゃん」

「ん？」

視線がかち合う。

「……帰らないで」

言ってしまった。止めないなんて強がったけど、健ちゃんがいないのは淋しいから。

泣きそうになってうつむくと、健ちゃんの腕が伸びてきた。

「寿々さん！ お怪我ありませんか？」

悠里さんの大きな声に驚いてパツと腕が引っ込むのが見えた。

幸宗と一緒に悠里さんは歩いてきた。逃げてた悠里さんと途中で会って、幸宗に預けて健ちゃんがこっちに來てくれたらしい。

「大丈夫だよ」

「本当に、ありがとうございました」

深々と頭を下げられることに慣れてないあたしは慌てた。

「顔上げてよ。あたしが勝手にやっただしさつき酷いこと言ったから」

「いいえ。あれはわたくしのために言うてくださったんでしょう？」
さっきの弱々しい夢い感じゼロなのは何故？

「わたくし、寿々さんのような強い人になります！」

「あ、そう……」

それはそれで複雑なんですけど。なんて本人の前では言えなかった。

「夕飯の上に泊めていただいて、本当にお世話になりました」

「いえ、何も出来ませんで申し訳ないです」

先生は一礼して悠里さんに向かい合った。

「兄をまた宜しくお願い致します」

「はい。お預かりします」

あたしの願いを聞き入れたのかはわかんないけど、健ちゃんはこのに残ることになった。お母さんへの近況報告は悠里さんが請負ったらしい。

詳しい理由は聞けないけど、あたしには充分嬉しい知らせだった。

「寿々さん。兄のこと、宜しく願いますね」

「や、むしろこっちがお世話になると思うよ」

常にそんな感じだから実際。

「兄様。許婚の方には別の男性を紹介しますね」

唐突な悠里さんの申し出に健ちゃんだけじゃなくあたしもきよとんとする。

悠里さんは満面の笑顔を浮かべたまま、あたしの耳元で囁いた。

「わたくし寿々さんなら認めますわ」

「え……」

「それではまた！」

詳しく聞く前に悠里さんは帰っていった。

「何て言われたんだ？」

「べ、別に！」

そんな関係、ないって絶対！

健ちゃんに怪しまれながら、あたしはそう思った。

じゅっきゅ。

いにしえから存在する蔵には金銀財宝が眠って……。

「そんなわけないか」

「こら寿々！ 真面目にやんな！」

「はい」

今日は先生の家にある蔵の整理をすることになったの。

遠慮する先生に静さんが汚いって一喝して、あたしや健ちゃんも一緒に手伝ってる最中。

「結構色々あるんですね」

刀や弓矢はいいとして、刺繍付きの絨毯とか高そうな壺まで無造作に置かれてて歩くスペースが少ない。

あたしが奥から色々持ってきて健ちゃんにパス。最終的に静さんへ行く流れになってる。

「そりゃあ先生は謎も噂も多い人だからね」

「謎？」

「噂？」

「先生がここに来たのは三年前。急にふらりとやってきてここに住みたいと言ったんだ」

思い出しながら静さんは遠くを見ていた。動かさなきゃいけないはずの手はぴたりと止まってる。

「それって謎ですか？ 今の先生でもやりそうだけど……」

「続きがあるのさ。着物も上等な布だったんだがねえ、ほとんど血で赤く染められてたんだ」

「……それって先生の？」

「いや、先生は無傷だったから他人の血だろう」

血塗れってことは、その分人を斬ったってことだ。

「詳しく聞かなかったんですか」

健ちゃんも気になるらしい。

「聞いたさ、前に一度。でも先生は笑うだけで答えなかった」

そこは今も同じ。秘密主義者なのかもしれないけど、先生は必要以上に多くを語ろうとしない。

「この辺りに暮らす人間は皆訳ありの奴等ばかりだ。互いに深く聞くようなことはしない」

蔵の整理に飽きたのか休憩をするのか、静さんは立ち上がって屋敷に戻ろうと歩を進める。

「アンタ達も無駄に詮索しちゃいけないよ」

静さんの警告に、どこことなく重みを感じた。

「すみません」

「はい？」

見たところお城とかにいるような身分高そうなお侍さん。

「ここは藤沢の家で合ってますか？」

「そうですけど」

あれ、前にもこんなことあったような気が……。

「何のご用でしょう」

あたしを庇うようにして立ちふさがる健ちゃん。

そうだ、初めて健ちゃんに会ったときに似てるんだ。あのときはいきなり斬られて大変だったっけ。

「少して構いません、彼と話がしたいのです。どこにいらっしゃいますか？」

「先生なら今散歩に」

あんまりにも切羽詰まってるから、条件反射であたしはサラッと答えてた。

「先生……彼は寺子屋で働いているんですか？」

「違いますよ」

「藤沢殿！」

「久し振りですね、榎並君」

榎並と呼ばれたお侍さんは先生に深く一礼した。二人は知り合いらしい。

「貴方に似た人がここにいと聞いてまさかと思いながら来てみた」

「本当にいましたね」

カラコ口と笑う先生を見るのはちよつと貴重。安物のお茶を出して、二人の話を影から聞く体勢になった。

「のどかなところですね」

「ええ、私も気に入ってます」

「なんだ、ただの世間話か。」

部屋を離れようと身体の向きを変えた瞬間に聞こえた言葉で、あたしはまた足を止める。

「貴方ほどの人が何故このようなところにおられるのですか」

「それはどういう意味です？」

「失礼とは思いますが、ここに住む方と藤沢殿では身分に違いがあります」

「やっぱり何か理由があつてきたんだ。」

「榎並君、私はもう身分なんてものは捨てたんですよ」

「あのときからですか」

迷いのある声に先生は答えが出ない。

息もひそめて二人の出方を待つ。

「どうかもう一度、我らとともに……！」

「申し訳ありません。……お引き取りください」

それは先生の拒絶だった。

「待ってください」

「貴方は先程の……」

帰ろうとする榎並さん呼び止めて、あたしは頭を下げる。

来たときより微かに小さくなった背中に向かって話しかける。

「寿々です。ここでお世話になってます」

「そうでしたか、ご丁寧にどうも」

「少しだけ、あたしに時間もらえませんか」

「え？」

「彼の過去を、ですか……」

人目につかない神社の境内に移動して榎並さんを見つめる。

「ただの居候が気にすることじゃないかもしれないかもしれませんが、でも危ない仕事に関わる先生を見たくはないから」

お金が沢山もらえたって、何をしてるかはつきりわかんないような仕事のばっかじゃあたしの気持ちが悪くなる。落ち着かない。

「榎並さん。先生はここに来るまで何をしてたんですか」

もし出来るのなら、もう一度やり直してほしいと思った。

「我々は武士です。敵を斬ることが仕事でした。中では相手の生死も問いません」

「でも今先生は人を殺したりなんか」

「嫌だったでしょう。今までの生活で、あの方は沢山の人を殺めた」

自嘲気味に笑う姿が悲しげに見えるのは、たぶん間違いなんかじゃない。

「一番堪えたのは、同業者を潰すために屋敷の人間全員殺したことでしょうね」

「全員……」

血なまぐさい話についていくために、あたしは復唱しながら頭にたたき込んでいく。

「女子供も、命なき者にと言われていました。その件が起きた翌日に、藤沢殿は姿を消したのです」

それが、初めて静さんの前に現われたときだったんだ。

高い給料ももらって、上質な着物を血で染めて。そんな生活から

先生は逃げ出した。

「僕の仕事場で皆を統括する立場にあつた藤沢殿は、誰よりも先に刀を抜いていました」

遠回しにそれは、誰よりも多くの人を殺したということ。

「……良かった」

「え？」

「人を傷付けても、守りたいものがあるのは今も変わってないから」
先生は榎並さん達部下を守りたくて、人を傷付けた。
許されることじゃないけど、先生もそれは充分わかつてるはずだから。

「寿々さん……」

「お願いします。あたし達から先生を取り上げないでください」
どんな過去があつたって、先生に変わりはないから。

「先生はあそこに必要な人なんです」

「心配しなくても、私はいなくなったりしませんよ」
振り返るとこっちを見る先生がいた。両腕を組んで、歩いてくる姿にあたしは瞬きをする。

「どうしてここに貴方が……？」

榎並さんもあたしと同じように戸惑つてる。

「夕刻になつても寿々さんが戻らないので、散歩ついでに探していったんです。静さんが怒っていましたよ。手伝いをサボってどこに行つたんだと」

「あ……、忘れてた」

言いつけ破つて先生の昔話聞いてたとか確実に怒られるじゃん。
どうしようかなあ……。

「榎並君」

「はい」

「私にはもう地位は必要ないんです」

さわりと風があたし達の頬を撫ぜた気がした。

「今が幸せなんですよ」

「……わかりました」

先生とあたしから一步退いて勢いよく頭を下げた。

「突然押しかけて申し訳ありませんでした。どうか、貴方は変わらずそのままいてください」

「君も元気で」

夕日に染まってオレンジ色になる榎並さんの背中を見送って、あたしは先生に向き直った。

「先生、あの」

「ありがとうございます」

「……え？」

「昔の話を聞いても、寿々さんは私を先生と呼んでくれるんですね。なんとなくわかった、先生からたまに感じる違和感。無理して笑うと眉根がいびつに歪むんだ。」

「あたし、過去も今も大事なことだとは思ってます。今の自分があるのは過去の自分がいたからだから」

反応の薄い先生に謝罪する。

「話を勝手に聞いたりして、すみませんでした」

「いえ。貴方に聞いていただけて良かった。救われた気がしました」
左肩に手を置かれて顔を上げる。先生の微笑に違和感はなかった。
「今でも昔のことが夢に出てうなされます。すがってくる血塗れの敵を殺す冷酷な自分が、恐いのですよ」

「先生は穴から落ちたあたしを助けてくれた、命の恩人です」

人は生かすことも殺すことも出来る。先生には生かす人になつてほしい。

「そんな先生に一つ、お願いがあるんですけど」

「何でしょう？」

「静さん達と一緒に怒られてくれませんか？」

「たまには良いかもしれませんね」

このとき見た先生の笑顔は、今までで一番生き生きしてる気がした。

にじゅう。

「何なんだろ、この人……」

買い出しの帰り道で見つけたおじいさんにあたしは足を止めた。
うつぶせに転がる姿が倒れてるようしか見えない。呼吸はしてる
から死んでないけど気にはなる。

「もしもーし」

揺すってみても反応なし。

「医者とか呼んだ方が良いかな」

「変わった娘だな」

「は？」

聞き返す前にあたしは後ろから抱き付かれた。さっきまで寝転んでたはずのおじいさんだ。

「ちよつ、何！」

「通る人間は皆ワシを見てすぐに目をそらす」
唸るしわがれた声が耳元で聞こえる。

なんだろう、この人凄く強いような気がする。首に回されたおじいさんの腕力がそう言ってる感じ。

「何で声をかけた」

「……死んでるかと思ったから」

嫌味っぽく言っただけなのに男は高笑いしだした。

「何よ」

「いや、何でもない」

笑い泣きするほどあたしは面白いこと言ってないんだけど！

「お前名は？」

「人に聞くときはまず自分からでしょ！」

一気に気分が冷めて怒った口調で返したら、また笑い出してあたしはおじいさんを睨んだ。

「怖い怖い。そう睨まんでくれ。ワシは喜^{キイチ}一、盗賊の奴等でワシの

名を知らん者はおらん！」

「トーゾク？」

何だろうそれ。威張って話すくらい凄い役職なの？

「盗賊を知らないのか？」

「興味ないもん」

我ながらばつさり切り捨てると思っけど、昔から好きなこと以外集中力持たなかったんだよね。

「元気そうだしあたし帰る。これあげるよ」

「包帯？」

「そこ、血が出てる」

左腕にあるかすり傷だけど、まあ何かの縁だしばい菌入ったら困るから。

「あたしが買い出しの途中だったことに感謝してよね」

「気に入ったぞ娘！ 名は何だ！」

おじいさんはまた大きな声で高らかに笑った。

「名乗る必要ないよ。もう会わないんだしさ、トーゾクさん」

「ワシは喜一だと言っておろうが！」

結構面白い人かも。いじりやすい。

背中が届くツツコミにあたしは少し笑った。

「あんまりはしゃぐと転ぶぞ」

「だって健ちゃんのお金で甘味屋でしょ？ 凄い楽しみ！」

下駄でもスキップ出来そうなくらいあたしは浮かれてた。

「甘味屋はついでだ」

「わかってるって、先生や静さんにお礼を買うのが目的でしょ？」

最近寺子屋でバイトを始めた健ちゃんは、もらったお金で先生達にプレゼントを買っらしい。

選ぶのを手伝っついでにあたしにも奢ってくれるとのこと。

「でも甘味屋も行ってね？ あたし楽しみにしてたから」

苦い顔をして健ちゃんは頷いた。

「仲が良いね」

「加地さん」

先生の元教え子さんで、今は警察に働いてる。

普段はのんびりした雰囲気だからあんまり警官っぽく見えない。

「こんにちは、先生はいるかな」

「いますけど……何かあったんですか？」

「頼まれていた調べ物とちよつと野暮用をね」

「調べ物？」

あたしが聞き返すと少し渋った顔で口を開いた。

「烏って輩を知ってるかい？」

健ちゃんの仇討ち相手だ。先生は加地さんに調べてもらってたんだ。

「その話、俺も聞いて良いですか」

「それは構わないけど……出掛ける予定だったんじゃないの？」

「問題ありません、今度にしますから」

つまりあたしの甘味屋もまた今度つてわけね……。

あたしはため息を吐いて家に入る二人を追った。

「早かったですね加地君」

「急ぎだと言ったのは先生でしょう、まったく……」

「無理を言つてすみませんでした」

悪びれた様子もなくただ微笑む先生に、加地さんは短く息を吐き出して顔つきを変えた。

「烏というのは本当の名前ではありません。正式には三羽烏、つまり三人の烏と呼ばれる人間が存在しているようです」

皆にわかりやすいよう、わざわざ紙に書いてきてくれた。

それを覗き込みながら加地さんの説明を頭に入れていく。

「殺し専門の烏、密売専門の烏に盗み専門の烏、それが誰なのかまではわかりませんが手掛かりをつかみました」

「手掛かり？」

「盗み専門の烏です。狙った獲物は絶対に盗み出す天才が、うちに挑戦状のようなものを送ってきました」

さつきとは別物のよれよれの紙切れを畳に広げる。

「我、烏なり。次の満月に薬売りの屋敷に有る無色透明の石を奪う……」

読みづらい雑すぎる字でそう書いてあった。

「次の満月は明日、薬売りの屋敷も判明して現在警備にあたらせています」

流石加地さん、なんて心で称賛してたあたし。

「透明の石って？」

「ダイヤモンドと呼ばれている石だそうです」

「ダイヤ？」

「知ってるのか？」

「あたしのいた世界でも高い宝石だった」

セレブの持つものって決め付けてたけど江戸にもあったんだ、ダイヤモンドなんて。

「捕まえれば烏の情報を知ることが出来るでしょう。ここは一つ、先生に手伝っていただきたいのです」

野暮用はそれだったわけね。先生に烏捕獲作戦を手伝ってもらってやつ。

「なるほど、話はわかりました。人助けになるのなら私で良ければ使ってください」

「使うだなんてそんな……ありがとうございます」

律義に一礼する加地さんにあたしは挙手して提案する。

「あたし達も手伝っちゃ駄目ですか？」

「俺もか？」

達って言われたから健ちゃんは少し驚いてる。

「やりたいんでしょ？」

気付いてないかもしれないけど、さつきからずっとそわそわして

るんだよ。

別人の烏でも、烏は烏だもんね。

「君達まで巻き込むわけには」

「どうでしょう、私の助手ということでも二人も手伝ってもらうのは」

先生素晴らしいフオローありがとうございます！

「先生が良ければ、まあ」

もごもごと口を動かして加地さんは承諾した。

「駄目と言ってもついてきそうですからね、寿々さんは特に」

「あはは……」

間違っていないです、先生。

「今まで烏はどうやって屋敷に侵入していたんですか？」

「近くで爆発を起こして騒ぎに乗じてだとか、眠り薬をかがせて寝ている隙にだとか……」

「つまり色々なんですわね」

ややこしくなりそうな話だわ。

烏が現われるのは翌日、あたし達は標的にされてる薬売りの屋敷に来てる。

「こちらも様々な対処が出来るよう最善をつくしているんだ」

屋敷内と烏の情報を事前に聞かためと、屋敷の当主に挨拶が必要ってことらしい。

「でも人数が足りなくてね。烏もどきのせいでこっちまで手が回らない」

「また見回りですか？」

屋敷の廊下に出てきた細い目のおじさんはあたしを見て顔をしかめた。

何かあたしの顔に文句でもあるわけ？

「あ、榊原さん。新しい助っ人に場所の説明をしているんです」

「ほー、女も助っ人ですか」

腹の立つ口振りに文句の一つでも言つてやろうかと思つたけど、健ちゃんに腕をつかまれて仕方なく黙る。

「狙われる前日に大人数で押しかけて申し訳ありませんが宜しくお願い致します」

「こちらこそ、うちの宝をしつかり守つて下さいね。まあ、誰が来たつて盗られはしないでしょうけど」

「嫌な感じ」

何よ偉そうな態度しちゃつてさ。第一印象最悪だよ。

「……実は烏に狙われる屋敷は曰く付きが多いんだ。賭博場を営ましてたり人身売買に手を染めていたり」

やつてゐることは江戸も現代も変わらないのね。

「ここもそうだ、貴重な薬を買い漁つて金持ちとしか商売をしようとしてない」

確かに屋敷はピカピカ、使用人もいるみたいだし裕福なのが一目でわかる。

「じゃあその烏は悪い人じゃないつてことですか？」

「いや、どちらにしても盗みは犯罪、捕まえる必要がある。でも今回はやりにくくてね」

「やりにくい？」

「あれだよ」

加地さんが指差した先には前に戦つたことのあるようなガラの悪いお侍さん達。

適当に歩いてゐる姿は屋敷と釣り合いだった。

「榊原さんが雇つた用心棒らしい。ふらふら歩き回つてはうちの部下に絡む」

警察に絡むつて凄い勇氣あるなあ。

「皆さんが手伝つてくださつて良かった。少しでも味方が多ければ心強いです」

「微力ですが、役立てるよう努めさせていただきますよ」

先生はいつも通りにっこりと笑った。

にじゅう。(後書き)

もう何かごめんなさい。

キャラがまったく安定してない……どうしよう。

出来る限り頑張ってキャラを定着させなきゃと思ってしまいました。

にじゅういち。

夜が更けた。烏が宣言した通り、今日は満月。江戸の町が飲み込まれちゃうつくらい真っ黒な空に唯一明かりが浮かぶ不思議な光景だった。

「何かわくわくするね」

「遊びじゃないんだぞ」

「わかってまーす」

あたしは健ちゃんとペアで薬の入ってる蔵の前を警備中。あんまり重要視されてないけど、念の為らしい。

出発ギリギリまで寝てたお陰で絶好調なあたしは話を続けた。

「ねえ、ダイヤはどこにあるの？ 結局加地さんから教わってないけど」

「俺達新参者には知る必要がないんだと。加地さんがこの当主に言われてた」

「ますます感じ悪いわ、あのおじさん」

あたしは健ちゃんみたいに大人な対応が出来ないから単刀直入に感情を吐き出す。

「どう思う？」

「だから感じ悪いって」

「そうじゃない、盗み専門の烏のことだ」

一度もあたしに目を向けないで健ちゃんが言った。

「……正直、ちょっと良い人なのかもって思った」

あたしも満月を見上げたまま答える。

「あのおじさんに一発言つてすっきりしたいのに、あたしには出来ない。でも烏ならそれをやってくれるでしょ」

「そうだな」

声に元気がない。

「ごめんね」

「何で謝るんだよ」

「だって、烏は健ちゃんの敵でしょ？」

それなのに良い人かもなんて言っちゃったからちよつと後ろめた
くなつた。

「誰か来る」

複数の足音が辛うじてあたしにも聞こえた。暗闇から飛んで来た
何かを健ちゃんが刀で全部叩き落とす。

「手裏剣初めて見た！」

ホントにテレビとかで見るのと同じ！

地面に刺さるそれは鈍く光ってる。

「そんなこと言ってる場合か」

蔵の扉に寄り掛かってたあたし達を忍者服に身を包んだ男数人が
囲んだ。

「昨日の用心棒？」

ちらほら似た顔が見える。

「烏の仲間が紛れてたようだな」

「何だ。もつとひねつた侵入方法期待してたんだけどな」

変装とかがありがちなパターンじゃん。

あたしは文句を言いつつ薙刀を構える。

「待てい！」

でかい声が真上からして、男が飛び降りてきた。砂埃が一面舞う
中で見たのはあたしの知ってる顔。

「この前のトーゾクさん？」

「おお、あのときの包帯女ではないか！」

毛むくじゃらな顔がクシャクシャになった。目を見れば笑ってる
のがわかる。

刀を後ろに背負って立つ姿は倒れてたときとまったく違った。

「ちよつ……やめてよ、そのダサイ呼び方！」

今どき包帯女なんてないよ！

「何を言う！ お前が名乗らなかったのが悪いのだ！」

「だからってそんな呼び方」

「頭領！」

「寿々！」

ヒートアップするあたし達を止めたのは健ちゃんとトーゾクさん側の忍者だった。

「いい加減にしてください。追われてる途中なんですから」

「すまん」

「お前も忘れてただろ」

「ごめん」

何かあたしとトーゾクさんが似たキャラクターなのが気に入らないわ。

「上手く時間稼ぎしてくれましたよ」

「先生！」

その後ろには加地さんや当主の榊原さんが続いている。

「おや、早々と囲まれてしまったな」

あんまり困ったように聞こえない。

「誰のせいだと思ってるんですか……」

「寿々」

「へ？」

トーゾクさんに名前を呼ばれて、気付いたときには身体が反転して先生達と向かい合ってた。

「良い名だ」

前と同じ。首元にあるトーゾクさんのがっちりした腕のせいであたしは必然的に上を向くことになる。

「寿々さん！」

加地さんの声が聞こえたけど、顔は見えない。

「それ以上寄れば、この娘の命はないと思え」

「くそっ……」

あたし殺される？ でも恐くない。

「嘔吐き」

「何？」

「アンタは人殺しなんかしない。違う？」

寝てる中で刀を向けられたときの雄吉さんと全然違うんだ。

殺しを楽しむような雰囲気は一切ない。

「盗みに入る屋敷も曰く付きの場所を選んでるような人は誰も殺めたりしない」

回された腕も、最初に会った日と何も変わってないよ。

あたしがそう言えばトーゾクさんは豪快に笑った。耳が痛い。

「ますます気に入ったぞ寿々！ ダイヤモンドとお前を連れて帰る。ワシとともに来い」

「やだ」

高級でも石と一緒にしないでよ。

「ならば力づくでも連れて帰ろう」

「……先に言つとくけど、あたし弱くないよ？」

下手な侍よりよっぽど強いって先生からの御墨付きなんだからね！

「気の強い女は嫌いではない」

それを引き金にあたし達と烏の大捕物が始まった。

先生達は烏の間を、あたしはトーゾクさんを相手に武器を交える。

「他の烏と連絡取ったりする？」

あたしの振り回す薙刀を上手く避けて彼は鼻を鳴らした。

「昔は三羽烏で酒を酌み交わしたが今の烏は会ったこともないわい」
「そう」

「寿々、腕前は上々じゃ。烏にもなれるぞ」

「や、なる気ないし！」

攻撃しないで避ける一方のトーゾクさん。馬鹿にしてんのかしら。
「何で烏になる道を選んだの？」

わざわざ有名な悪役に染まる必要があった？

忍者がアンタを頭領って言った瞬間、あたしはアンタが烏本人なんだってわかってちよっとショックだったんだけど。

「尊敬する盗賊の師がいた。その人が烏でな、死に際に継げと言ったのだ」

そう言われると弱い。あたしも先生に先生の仕事を継いでなんて言われたら、考えると思うから。

「ワシは烏を誇りに思う。しかし」

耳をつんざく破裂音がした。あたしの腕を掠めたそれはトーゾクさんのお腹に当たった。

腕が熱くて痛い。

「ぐ……っ」

呻いたトーゾクさんが体勢を崩して片膝をつく。ぼたぼたと容赦なく落ちる赤黒い液体を血だと気付くのに時間はかからなかった。

「は、早くダイヤモンドを取り返せ！」

榊原さんが叫ぶ声がした。撃つたのはあの人らしい。あんなの江戸時代でも輸出入来るんだっけ。

頭が霞がかってぼんやりしてくる。

「貴様よくも頭領を……！」

怒りで刀を榊原さんへ向ける忍者は健ちゃんに阻まれた。

「何故邪魔をする！」

「今すべきことは仇討ちか」

「……すまない」

健ちゃんの言葉で冷静になったらしい。部下は皆あたし達のところに集まってきた。

「触らぬ方がよい。血で着物が汚れる」

「汚いかどうかはあたしが決めることだよ！」

とりあえず止血しようと静さんの真似事をしたけど、さっきまで流れてた量が明らかに多かった。

「もうよい」

「何がよいのよ……！」

本人があきらめてどうするの？

徐々に色をなくす肌にあたしは焦った。

「頭領」

「……皆は無事か」

「はい」

あたしにも多少の怪我で命に別状はないように見えた。

「そうか」

トーゾクさんは細長く息を吐き出す。

「烏は解散じゃ」

周りで息を飲む人や悔しそうに短く声を上げる人がいた。

「烏はどこでも生きていく根強さがある。好きに生きる。……行け」

「ありがとうございます」

瞬きをした一瞬で、黒い塊が消えた。

残されたのは羽根の折れた烏一羽。

「おい、仲間が逃げたぞ！ 何故追わないんだ！」

「榊原さん。貴方には殺人犯として詰所まで行っていたいただきます」

荒っぽい声で皆を非難する榊原さんが滑稽に思えた。

「文句は聞き入れません。……今までやってきた悪行、すべて話してもらいますよ」

榊原さんは拳銃を落とした。

「トーゾクさん」

「ワシは喜一じゃと、何度も言っただろうが」

か細い声に、あたしは涙を堪えることが出来なかった。

「喜一さん」

初めてちゃんと名前呼んだよ。ねえ、だから元気になってよ。

「泣くな、寿々」

「雨のせいだよ」

ちようどよく降り出した空からの涙。

無理矢理誤魔化したけど、きつとばれてると思う。それでも、喜

一さんは気の強い人が良いつて言ってたから。

「そうか。孫と話せたようで楽し、かったぞ……」

雨に濡れた顔は、何だかせいせいしたようだった。

我慢なんて出来なくて、あたしはまた涙を流す。

「寿々さん」

そこにはあたしと同じようにびしょ濡れの先生と健ちゃんがいた。
「あとは加地君に任せましょう」

その後のことはあんまり覚えてない。

その日から三日、あたしはずっと眠ってたらしい。

色々あつて疲れたんだろうってご飯を持ってきた静さんは言った。

「色々か」

人の死を間近で見たのは初めてだった。腕の痛みもまだあるけど、
胸の奥の方がもっと痛い。

「寿々様」

「烏の……」

庭に目を向ければ喜一さんを叱ってた人が片膝をついてしゃがんでた。

「先日は、頭領を看取っていただきありがとうございました」

「……あたしは何もしてない」

着物がシワになることなんて考えられないくらい、きつく握り締める。

「何も出来なかった」

同じように撃たれてたから仕方ない、そんな慰めはいらないの。
無力な自分を強いと思い込んでたのが恥ずかしくて情けなくてたまらない。

「私が盗賊になると決めたとき、頭領は言っていました。烏に入るなら常に死ぬ覚悟を持って」

顔を上げれば名前も知らない侍がただ真直ぐあたしを見てた。

「あの方は烏を継ぐ際に家族と縁を切ったそうです」

「そんなの酷いよ」

残された家族はどうするのよ。

「どうかもう悲しまないでください。頭領が言ったはずです。泣くな、と」

「わかってる」

もう泣いたりしない。そんな時間があつたら稽古して腕磨く。皆が傷付かないように心も身体も強くなる。

「寿々様が泣けば頭領も心残りとなるでしょう」

「わかってるってば！」

にじんだ涙を袖で拭って、あたしは侍を指差す。

「次会ったときは、アンタも犯罪者なんだからね！」

「そうですね」

仕方ないとも言つように肩をすくめて彼は小さく笑う。

「お尋ね者は早々に逃げるとしましょう。見つかってしまう前に」

「寿々、ちよつと来ておくれ！」

「はい！」

静さんに返事して庭を見れば、跡形もなく消えてるあの人。

「……逃げ足の早い鳥」

まあ、それも悪くないか。

あたしは早足で静さんのところへ向かった。

にじゅうに。

「美味しい！」

「良かったな」

ちよつと沈んでたあたしを氣遣つて健ちゃんが行けなかった甘味屋に誘つてくれました。

白玉のモチモチ感が最高に美味しい！

「健ちゃん食べないの？」

「得意じゃない」

つまり苦手、ってことだよ。白玉ぜんざいを頼んだあたしに対して、健ちゃんの手には抹茶入りの湯飲み。

「もったいないなあ。こんなに美味しいのに」

呟いてあたしはまた一口。

粒餡とのバランスもナイスだわ。

「そうだろう？　うちの甘味屋は天下一品だろう？」

店の奥から突っ走ってきたおかみさんに驚きつつも頷いた。

それを見てため息を吐くおかみさんは、唯一いる客のあたし達に愚痴を零す。

「うちの旦那ときたら、真つ昼間から煙管キセルなんぞにハマって」

「煙管って煙草みたいなのやっ？」

臭くてあたしは好きじゃない。人一倍嗅覚が良いせいかな変な匂いには敏感なの。

「そうさ、刻んだ煙草を入れて吸うんだ」

「煙管にハマったって、収集してるんですか？」

健ちゃんは不思議そうに尋ねる。

「そうじゃない。四六時中すばくゆらせてんだよ。部屋が煙たくて仕方ないったら！」

鼻息荒く答えるおかみさんは結構迫力がある。

「そんなに煙管って美味しいの？」

「俺に聞くなよ」

まあお互い未成年者だもんね、あたし達。あんまり興味もないし。そんな話に花を咲かせてると、奥から何か割れる音がした。

「まーた何かやったわ」

額に手をあて呆れる素振りを見せた後、おかみさんはドタドタと走っていった。

「アンタちよつといい加減にしな!」

夫婦喧嘩勃発の様子。さてどうしようと健ちゃんと目で語れば見知ったお客さんが現われた。

「ずいぶん賑やかだな」

「加地さん」

警察仲間つばい人達を引き連れてる。

「やあ、君達は現場によく遭遇するね。一種の才能かな」

すいません、それは褒めてるんでしょうか。物凄く複雑な気分。

「あら加地さん! いつもごひいきしていただいて……今日は何にします?」

一騒動終えたのか、加地さん達に気付いたのか、おかみさんがまた見事な走りっぷりでこっちにやってきた。

「店主いる?」

「煙と遊んでます。加地さんからも言っちゃってくださいよ」

加地さんの顔が陰しくなった。

「上がらせてもらうよ」

「え、ちよつ、加地さん?」

一応靴は脱いでそろそろと上がり込む警察の方々。おかみさんも戸惑いながらその後を追った。あたし達もついでに。

「顔、変だぞ」

「だって変わった匂いするんだもん」

第一顔が変わって女に言う台詞? 健ちゃんってたまに失礼。

奥に進めば進むほど強くなる何かの匂いにあたしは目を細めた。
「昼間からぐうたらしてるなんて珍しいじゃないか」

「ああ、加地の旦那かい」

とろんとした目の店主さん。畳の上に大の字で横たわり、力なく口を開けてる。

「刻み煙草はどこから買ったんだい？」

「清水さんが、新種だって」

「確かに本人もそう言っていた」

しんとした空間に店主さんの呼吸音が浮上って聞こえた。

「もうじき煙草がなくなるんだ。同じやつじゃねえと吸った気がしねえ……。清水さんは今どこにいるんだい」

床を這いずり加地さんの足に絡み付く。

こんな光景をあたしは見たことがある。高校の授業中にスクリーンで映ってた。

「うちの詰所で色々話を聞かせてもらってる。その様子じゃアンタも詰所に来た方が良く」

「加地さん、うちの亭主が何したって言うんです！ 仕事しないで煙管にうつつ抜かすくらい」

金切声が部屋中に響いた。

「違うんだおかみさん。これは刻み煙草とは似ても異なる特殊な薬でね。アヘンのような効力がある」

おかみさんは両手で口を抑えて息を飲んだ。

あれは麻薬中毒者の映像。軽い気持ちで始めた薬にのめり込む末路を見せて麻薬の撲滅を図った作り物だった。

「そんなもんに出すなんてアンタって人は！」

「知らねえ、俺は何も知らねえんだ……！」

耳をふさいで左右に頭を振り乱す。

目の前にあるのは本物の世界だ。

「しばらく店主は預かる。似たような輩が詰所にごろごろしてるから心配しないで。元に戻ったら、自力で帰らせるよ」

「……宜しく願います」

丸くなった背中を更に丸めて、おかみさんは頭を下げた。

「二人もおいで」

すすり泣く声を背にあたしと健ちゃんは今地さんについていった。

「この件は第二の烏が関わってる可能性が高い」

「烏が？」

「密売専門。麻薬を外国から仕入れて浮浪人にさばかせる。薬から抜け出せない人は無限に続く流れに飲まれるしかない」

本人が潰れるまで終わらないループ。最悪の流れじゃん。

「こつちも引き続き捜査するけど、先生も烏の動向を気にしてるよ
うだから」

「伝えておきます」

千鳥足の店主さんを囲うように彼らは去っていった。

「調べる必要があるね」

黙ったまま健ちゃんは頷いた。

「でもどうやって情報収集すれば良いのかな」

「地道に聞き込みしかないだろうな」

まあ、結局はそうなるよね。

「俺これから仕事なんだ」

寺子屋で先生をやり始めた健ちゃん。元々勉強が好きだったから今の仕事を楽しみたい。

「わかった、先に帰ってるね」

その日から、健ちゃんは家に帰ってこなかった。

にじゅうさん。

「今日で一週間ですか」

渋い顔をする先生にあたしは聞いてきた話を告げた。

「寺子屋は、あたしが健ちゃんを最後に見た日から一回も来てない
そうです」

勿論この家にも帰ってきてない。

「可能性として考えられるとしたら」

「はつきり言ったらどうだい先生。何か事件に巻き込まれたんだっ
て」

静さんがはつきりした口調で言った。心配してるからだってあた
しでもわかる。

「あたしもう一度探してきます」

「私も加地君に連絡してから探します。何かあったら、すぐに逃げ
てください」

「わかりました」

門をくぐり抜けると幸宗が壁にもたれかかってた。

「アイツ探すんだろ。手伝ってやるよ」

「幸宗まで巻き込むわけにはいかない」

健ちゃん捕まえたような奴等だもん。たぶん相当強い。

「必要以上に傷付いてほしくないの。大切な人誰にも」

「それは俺も同じだ」

「……そうだね」

やばい、自分のことばっか考えてた。幸宗の方が冷静だ。
何だかんだであたしも相当焦ってる。

「行こう、日没までに見つけなきゃ」

あたし達は人込みの中に飛び込んだ。

「収獲なしか」

「ホントにどこ行っちゃったんだろ……」

一週間探して見つからないなんておかしすぎる。

もしもあのとき、寺子屋に行くのを止めてたら、こんなことにはならなかったかな。

「休憩するか？」

「まだ平気」

あたしの空気が重くなったから、幸宗が気遣ってくれた。でも今はそんな場合じゃない。

歩きながら何人かとすれ違う。ほんの一瞬、違和感があった。

「寿々々？」

急に立ち止まったあたしに幸宗が眉をひそめる。

「今の匂いどつかで」

嗅いだことのある変な香り。記憶を辿って割り出したのは、甘味屋さんの煙管だった。

「行くよ幸宗」

「は？」

「あの人たぶん麻薬やってる。住んでるとこ見つけて加地さんに教えないと」

被害減らすために頑張ってるんだから。

「健太はいいのかよ」

「ついて行けば何かわかる気がするの」

「根拠は？」

「勘に決まってるじゃん」

女の勘ってやつよ。幸宗ってばそんなに慎重派だったっけ？

「頼りになんねえな」

「うるさい」

文句を言いつつ後ろ姿を追いかける。おぼろげな歩き方で見てるこっちがヒヤヒヤした。

「こんな空き地が家なのか？」

町外れの何もない原っぱに、ぽつんとさっきの男の一人。

「須山さん！ 約束の金は用意したから、早く煙草を……！」

「そう慌てなさんな。煙草はここにある」

物陰から現われた灰色の着流しの男はにやにやと薄笑いしてる。

つり目で口には葉っぱくわえた三十路くらい。先生とは真逆だと思つた。

「はっ、早くくれ！」

「金は全額あるか？」

「これだ、有り金全部まとめた」

つぎはぎだらけの巾着を須山つて人に放り投げる。弧を描いたそれは上手くソイツの手に留まる。

「毎度あり」

銭の音を鳴らせて去っていく須山の後ろ姿。

「幸宗。あの人警察に連れてつてあげて」

「寿々は？」

「追っかけてみる。駄目そうだったら帰るから心配しないで」

何かわかるかもしれない。

幸宗と中毒者さんを置いてあたしは小走り。鼻歌まじりで上機嫌の須山はあたしにまったく気付いてない。

暗い小道を抜けた先には潮の香りが漂う。

「港……？」

船が一艘もない廃れた港。その一番奥にある木造の建物に入る須山にあたしはまたついて行つた。

「ただいま戻りました」

「ちゃんと稼いできたかい？」

女の声だ。甘ったるいような高飛車な感じ。

扉から見つからないように中を覗くと手に煙管を持った女が箱の上に座つてた。

真っ赤な着物がはだけてるのも気にせず足を組み姿は妖艶その

もの。

「ああ。この通り」

「上々じゃないか。この調子で荒稼ぎするんだよ」

膨らんだ巾着に満足げな女。

ここが麻薬のアジトなのかもしれない。

「勿論さ姐さん」

巾着を渡す瞬間、女の左腕から見えた黒い文字に、あたしは目を見開いた。

「烏……」

刺青なんだと思う。腕に大きく烏の一字があつた。

動揺を抑えてまた盗み見を再開。

「そついえばこの前入り込んだねずみはどうなった？」

「二三日でおとなしくなったよ」

二人の視線の元に、健ちゃんはいた。

「折角の色男だから手荒に扱いたくなかったんだけど、あたいの手下半数潰すからちよつと仕置をね」

「酷えな、血が出る」

ここじゃ遠くで見えないけど、健ちゃんが怪我してるのはわかった。服も泥だらけで、縄で縛られてる。

「しょうのないことさ。それより……」

女と目があう。

「もう一人、ねずみが入り込んでるようだ」

やばい、ばれた。

全速力で逃げ出すと、背中から仙田が仲間を呼ぶ声がした。

「止まれ！」

「邪魔！」

手近にあつた木の棒で片っ端から向かってくる人達をなぎ倒す。

「寿々！」

なんとか逃げ切れて原っぱに戻ったら、足の力が抜けてへたりこんでた。

幸宗や先生があたしを見つけて近寄ってくる。

「どうしたんです」

「いた、健ちゃんも……鳥も」

息切れして上手くしゃべれない。

「一旦家に帰りましょう体制を立て直します」

先生に支えられて家に帰ると、すぐにあたしは見聞きしたことを全部話した。

「やはり鳥に囚われていたんですね」

「どうしますか」

加地さんも知らせを受けて来てくれた。

「寿々さんの言う須山は恐らく女鳥の手下であり薬の売人。他にも売人がいるのは確かです」

「すぐに仲間を向かわせます」

「ええ、きつと警察が来ると予想して逃げる準備をしているでしょうね」

逃げられたら健ちゃんはどのなるの？

傷だらけだった健ちゃんが浮かんで、あたしはただ先生を見つめた。

「加地君」

「はい」

「今夜、警察の皆さんはお暇ですか？」

にじゅうよん。

「男ばっかだな」

高台から烏の港を見下ろして幸宗が呟いた。

確かに数十人のいかつい男がうろうろしてるけど昼間見た人はいない。

「女王蜂はやはり巢の中ですね」

あたしの横で先生は言った。暗くて顔はよく見えないけど、いつもより雰囲気固いような気がした。

「昼間話した通りです。人質の命を優先、烏捕獲はその後。良いですね？」

「はい」

空に浮かぶ三日月が雲に飲み込まれた。辺りを静けさが覆う。

「襲撃、始め！」

加地さん以外の警察と幸宗は外で暴れてもらう。騒ぎに乗じてあたしと先生と加地さんは建物の中に侵入。それが計画内容だった。

響くような加地さんの号令にわめき立てる警察の皆さん。血の気の多い集団らしい。

「敵襲！」

上手く騒ぎ出してくれたお陰で難なく侵入成功。

建物内に先生、加地さん、あたしの順で進む。健ちゃんを見た場所付近付くと暗闇から何かが振り下ろされた。

「いきなり刀を向けるなんて不作法にも程がある」

月明りと一緒に須山の顔が出てきた。利き手には鞘のない刀、あたしを狙ったもの。

もし加地さんが庇ってくれてなかったら、あたしは大怪我してたと思う。

「作法なんざオレには無縁な話さ」

交えては間を取り、また交えては距離を開ける。加地さんと須山

はだんだんあたし達から遠のいていった。

「寿々さん、来ますよ」

先生の言葉で意識を戻すと足元に手裏剣が散らばってた。

「今回の烏は元くのいちのようですね。しかも中々の腕前です」

「投げただけでわかるアンタも強いね。度胸も顔も充分合格点だ。どうだい？ あたいの烏に入らないかい？」

太股には小型の手裏剣が装備されてる、戦闘準備万端の女烏。

昼間と違う赤い牡丹の咲いた漆黒の着物姿も艶やかだった。

「そんな小娘より、あたいの方がアンタを満足させてやれるよ」

小娘呼ばわりしないでほしいんだけど、大声で否定出来るほど自分に自信がないあたし。

「残念ですが私、五十歳以上の女性でないと魅力を感じないのです」

「……それホントですか先生」

そうすると静さんとかストライクゾーンじゃん！……もしかしてもう付き合ってたたりしちゃうのかな。

「あ、あたしは応援しますよ」

「嘘です。断るにはこれが一番効果的なので」

さり気なく悪入ってますよ、先生。明らかに告白され慣れてる感じです。

「私は彼女を。寿々さんは予定通りお願いします」

「はい」

先生の援護をしながら健ちゃんを救出する手筈だったのに、邪魔が入った。

「ちよーっと待ったあ！」

身体が後ろに吹き飛ばされて思いつきり壁に激突。

「寿々さん！」

「痛いなあ……いきなり何すんのよ！」

背骨が折れるかと思ったじゃん！怒鳴るあたしを無視して女烏はため息を吐いた。

「来るのが遅いじゃないか、銀」

「悪い悪い。遊郭の女が中々帰してくれなかつたんだよ」

へらへら笑いながら話す銀って男は丸坊主で唇にピアスみたいな硝子をはまっていた。いかにもチャラそうな見た目。

「生きてるかあ？」

「人を勝手に殺さないでくれる？」

口の中を切ったみたいで鉄の嫌な味が広がった。銀を睨み付ければ鼻で笑われる。

「頑丈さは合格だ。もっと楽しませろよ！」

「……アンタむかつく」

何回薙刀をぶつけても、むかつくくらい簡単に刀で止められる。悔しいけどあたしは腕力がないからあと一押しなんて絶対無理。

「一応稽古はやってきたみたいだな。でも所詮稽古は稽古」

向こうから飛んでくる刀の勢いに自然と身体が下がっていく。

「殺し合いつてのはな、こういうことなんだよ！」

お腹を蹴られてあたしは仰向けに倒れた。胃液が出そうになって咳き込む。

「おいおい……もう限界か？」

「馬鹿言わないでよ」

薙刀を杖代わりに立ち上がる。

「ここで負けたら今までやってきたもの全部失う」

稽古してきたあたしのプライド。何より健ちゃんを助けるためにあたしはここにいるの。失う気はまったくない。

「最終手段に入るか」

「は？」

これで駄目ならもうあたしに勝ち目ないんだけどさ。きよとんとする銀にあたしは唇の両端をつり上げた。

「遊郭の女しか相手してくれないなんて可哀相だなあと想着て」

「何……？」

「案外寂しい人なんだね、アンタ」

「うるせえ！」

煽られた銀があたしにまた襲いかかってきた。刀を受け止めて跳ね返す。

「あれ、さっきまでの勢いはどうしたの？」

「黙れって言っただろ！」

「単純だな……」

口先で馬鹿にしたり動揺させて弱くさせるのがあたしの最後の砦でも効果はあったみたい。今なら太刀筋が簡単に読める。

「言っただよね、所詮稽古は稽古」

銀の刀を弾いて薙刀を首元へ向ける。

「実戦の方が経験になるのはわかる。だけど稽古で得られるものも大きいんじゃないの」

少なくともあたしはそう思ってやってきたんだ。

「現に今、アンタあたしに負けてるし」

「ちっ……おい鳥！」

短く舌打ちした銀が声を張り上げた。あたしは距離が近いから鼓膜破れそうになって耳をふさぐ。

「何だよ今手が離せないんだ！」

余裕が戻ったあたしは銀に意識を向けながら辺りを確認する。

女鳥は先生に押され気味だった。短刀を構える姿に疲れが見える。

「俺はこの事件から降りるぜ」

「は？」

「銀、急に何言っただい！」

あたしの耳は正常だった。とんでもない台詞を吐いたヤツはあたしが隙を作った一瞬で高さのある窓に跳んだ。

「負け戦にいつまでもいるわけにいかねんだよ」

「逃げる気？」

「馬鹿言っな、本番に持ち越した」

世間一般ではそれを逃げるって言っただけど。

「お前ら絶対俺が殺すかな！」

「最低の捨て台詞だわ」

雇われてたなら中途半端なまま逃げちゃ駄目でしょ。

まあ、これで人数減ったから問題ないけどね。

「助っ人に来ました」

加地さんの方も片付いたらしい。目の周りに青痣が出来てるのが気になるけどあえて無視しよう。

「どいつもこいつも……っ！」

「詰所まで来てもらおうか」

「それ以上寄るんじゃないよ！」

烏は意識のない健ちゃんに刃を向けた。先生達の顔がこわ張る。

「この子の命を助けたいなら武器を捨てな」

「卑怯だぞ！」

「ふん、何とでも言いな。早くしないと怪我じゃ済まないよ」

健ちゃんの首筋に当たる短刀に加地さんは額から汗を垂らした。

「先生……」

「仕方ありません。健太にはもう少し痛い思いをしていただきましょうか」

刀を握り直したところを見ると、先生に武器を手放す気はさらさらないらしい。

烏も加地さんもギョツとする。

「ほ、本気ですか？」

「嘘です」

につこりと笑う先生と目が合った。

突撃の合図。

「後ろ隙だらけですよ、お姉さん」

薙刀の棒の部分で烏の後頭部に叩き付けた。頭を手で押さえて体勢を崩した烏を加地さんが取り押さえる。

「くそ……っ」

地面に顔をつけて悪態をつく烏。

あたしは大役を無事果たしてほっと息を吐き出した。

「お見事でした寿々さん」

「先生、あたしが鳥の後ろに回らなかつたらどうしたんですか？」
「考えてません」

……何とも先生らしい答えだ。呆れながらも妙に納得してしまつた。

「一人残らず連れて行け」

外もほとんど片付いてた。逃げられたのはほんの数人で、顔はわかつてるからすぐに捕まるって加地さんは言つてた。

幸宗も警察の人も、怪我だけで済んだ。

先生と幸宗は加地さんから色々話を聞かれるらしい。あたしは健ちゃんの付き添い役でそれを免れた。

「出血はあるけど、傷はそこまで深くない。大丈夫だ」

「ありがとうございます」

警察が連れてきたお医者さんが診てくれた。診療台の上に寝てる健ちゃんが弱々しく見える。

「……悪い」

かすれた声に息を吐いた。

「侍なんでしょ。簡単に捕まらないでよ」

普通逆じゃん。か弱い女の子を助けるために男の子が頑張るみたいな。あたしか弱くはないけどね。

「あたしを女扱いしてくれるなら、こんなことさせないで」

「……ごめんな」

健ちゃんの手があたしの手に触れた。びっくりして逃げようとしたけどぎゅっと握られる。

「健ちゃん……」

「ほら、お嬢さんの方が酷い怪我なんだから早く座って！」

がっしり肩をつかまれて引きずられてお医者さんは怒鳴る。

「え、いや大丈夫」

「早くしなさい！」
消毒は怪我したときよりも、かなり痛かった。

にじゅう。

「毎回寿々は怪我するねえ」

「すいません」

ほつぺたに消毒してもらいながら、静さんに鳥のことを話した。

「綺麗に治るから運が良い。跡に残ったらどうするんだい」

「特にどうもしないですよ」

「馬鹿、嫁に行けなくなるよ」

呆れた顔であたしを見る静さん。

「嫁って……あたしにはまだ早いですよ」

結婚出来る歳にはなってるけど、今のあたしにそれを考える余裕はなかった。

「何悠長なこと言ってたんだ。アンタの年齢じゃ遅いくらいさ。健太もねえ、そろそろ良い人がいる年頃なんだが上手くいかないもんだ」
「健ちゃんの名前が出てぴくっと眉が動いた。」

「そりゃあ健ちゃんだっていつか結婚するだろうけど、ちょっと嫌だ。」

「あれ？」

窓を叩く音にあたしは外を見上げた。

「雨だ……晴れてるのに」

太陽も出てるのに、空から落ちて来る雫。

「こりゃあ狐の嫁入りだね」

「狐の嫁入り？」

「知らんのかい？　こういう晴れた日に雨が降ると狐が結婚式をするって言い伝えさ」

聞いたことあるかも。空を見ながらあたしは思った。

「通り雨だから直にやむだろう。寿々、買い物行ってきとくれ」

「わかりました」

「毎回こんなパターンってどうなの、あたし……」

買い物の帰りに倒れた幸宗と同じ年くらいの女の子を見つけて駆け寄る。最近そんなことあっても驚いたりしなくなったのは、悲しいけど慣れなんだと思う。

でも今日はいつもとちょっと倒れてる人が違った。

「耳と尻尾……」

ふわふわのふさふさ。動物の毛が生えたそれに触ってみると、ぴくぴく動いた。

狐が化けてるって気付いたのはさっきの雨のお陰かな。っていうか、いつの間にそんなファンタジーなことになってんだここは。

「……でも放っておくわけにもいかないしなあ」

流石のあたしでも買い物の荷物持って担げないよ。

「寿々さん？」

「先生、ちょうど良いところに！」

「え？」

「よく拾い物をしますが、人を拾ったのは寿々さんと健太と合わせで三人目になりますね」

狐の女の子をおぶって先生は微笑む。狐はむにやむにや寝言を言いながら先生の背中にくつついた。

「すいません、居候が居候増やして」

「大丈夫ですよ。部屋は有りますから」

いや、そういうことじゃなくて……。

「寿々、いい加減その拾い癖直しな」

そう、まさにそういうことなんだけど。

「あたしそんなに拾い物してませんよ！」

静さんに言い返すとその声に驚いたのか、狐の子が目覚ました。

「ここ、どこ？」

「可愛い……じゃなかった、具合はどう？」

くりくりしてて円らな瞳が印象的。まだ眠たそうに目をこする幼さも加わってあたしの心をくすぐる。

「……だれ？」

「あたし寿々。貴方が道に倒れてたから連れてきたの」

「ここ寿々の家？」

狐耳がせわしなくあちこちに動く。情報収集でもしてるのかな。

「まあそうだけど、あたしは居候。先生の了解を得て住まわせてもらってる」

「先生？」

「起きましたね」

そういえばずっとおぶったままだった。先生が背中を見て微笑む。

「この人が先生」

「……っ！」

息を飲んで、狐の子は先生の背中を離れて急に猛スピードで走り出した。

「……何で脱走？」

「早速嫌われてしまいましたか」

「いやいやそんなはずはないでしょう」

「あたしちよつと探してきます」

理由を聞かなくや解決も出来ない。骨が折れると思った搜索は予想以上に早く終わった。

偶然にもあたしの部屋に隠れてて、押し入れから尻尾が見える。

「こら。人の顔見て逃げるなんて駄目でしょ」

「ごめんなさい……」

尻尾をつかむと小さく声を上げて丸まった。あたしはひとまず注意をすると謝罪が返ってきた。

「先生が恐かったの？」

「違う！」

「じゃあ何？」

唸ってはいるのに答えようとはしない。

「黙ってちゃわかんないよ」

「恩人、だったからびつくりした」

「恩人？」

聞き返すと狐の子はぶんぶんと首を縦に振った。肩につくくらいの黒髪が揺れる。

「昔、罨に掛かったところを助けてくれたの。だから恩返ししたくて、でも途中でお腹減って」

空腹の音が鳴った。恥ずかしそうにお腹を押さえる姿も可愛らしい。

あたしにはないものの全部持つてる感じ。

「ひとまずご飯食べようか。話はその後」

押し入れから出して頭を撫でると尻尾をぱたぱた振ってた。嬉しいみたい。

「名前は？」

「サク」

「じゃあサク、先生にちゃんと謝るんだよ」

「うん」

居間に行くと先生も静さんも健ちゃんも座ってあたし達を待っていてくれた。

「機嫌は直していただけましたか？」

「あ、あの……ごめんなさい」

「逃げ出してすいませんってことみたいですよ」

そのまま前転出来ちゃう勢いで頭を下げるサク。

「大丈夫ですよ。怒っていませんから」

「……本当？」

「ええ」

「良かった！」

初めて見た満面の笑みに先生や静さんの表情も和らいだ。唯一不思議そうな健ちゃんにあたしは尋ねる。

「健ちゃんどうしたの」

「いや。アイツ狐だよな」

尻尾も狐耳もフル可動で反応してる。ほつぺたを淡い桜色に染めて拙く話す姿は人間そのものだった。

「昔助けてくれた先生に恩返ししたいんだって」

「へえ、律義な狐だな」

「サクだよ」

さっき聞いた名前を得意げに言ったら今度はあたしに視線が向いた。

「寿々」

「何？」

「色々知り合いが多いとは思ってたが、狐の知り合いまで作ったんだな」

「……それ褒めてる？」

「一応は」

その日から先生の家にもた一人居候が増えました。

「寿々、昼ご飯にしようか」

「はい」

今日は静さんが全部やってくれるらしくてあたしはサクとお手玉をして遊んでた。

呼ばれて立ち上がるとサクがあたしの着物を引っ張る。

「サクは？」

真ん丸の瞳にあたしが映った。

「おいで、一緒に食べよ」

「早く座りな。サクはこっちの方が良いだろ」

静さんが持ってきたのはお皿に一枚乗った油揚げ。

「揚げ！」

尻尾をばたばたして油揚げに飛び付いた。

「おやおや、先生の言う通りだね」

「ええ、美味しそうに食べてますねえ」

良い食べっぷりに先生と静さんの頬が緩む。

「美味しい？」

「うん！」

「ただいま帰りました」

「おかえりなさい」

「おかえり健ちゃん」

ちようど健ちゃんも帰ってきて、皆でお昼を食べることが出来た。

「ちよつと良いか？」

食べ終えて一息ついてる間にサクは昼寝しちゃって暇になった。

そんなあたしに健ちゃんは神妙な顔をして話し掛けてきた。

ひとまず健ちゃんの部屋に移動して話を聞く。

「どうかしたの？」

「サクのことだ。寺子屋でも化けた狐が江戸にいるって噂になってる」

「……家に帰せって言いたいなの？」

「その方がサクにも良いんじゃないか？ 親だって心配するだろ、もう二週間ここにいるんだぞ」

「そうだけど」

確かに親が心配するのはわかる。でもあたしはサクに愛着がわき始めてた。

「一番まずいと思うのは、サクを欲しがる輩がいることだ」

「サクを？」

「完璧に化ける狐は珍しいが見分けがつかない。でもサクは不完全にしか変化出来ないから外に出れば簡単に狐だと知られる」

「捕まっつて酷い目にあうかもしれないってこと？」

それは絶対に嫌。

「先生には後で俺から伝える。お前も覚悟はしておけよ」

サクのこれからのために、お別れをしなきゃいけない。

冷静な健ちゃんの言葉にあたしは着物をくしゃくしゃに握り締め
た。

にじゅうろく。

「寿々、あれ何？」

「薙刀って言って……あたしの大切なもの」

今日はあたしとサクでお留守番してる。先生と静さんは町内会みたいなヤツに出席するからで、健ちゃんはいつも通り寺子屋のバイト。

「大切なもの？」

「そう。皆を守るためにある、大事なもの」

色んなものに興味津津のサクは部屋にあるもの全部に質問してきた。あたしはそれに一つずつ答えてく。

「皆……にサクは入ってる？」

モジモジして聞く姿にあたしは癒されながら頷いた。

「勿論」

「サク嬉しい！」

飛び付いてきたサクを抱き締める。

近いうちに、元いた場所に帰すことを先生から言われた。だからこんな風に笑うこともいずれなくなる。

「寿々元気ない？」

「え？ そんなことないよ」

無理矢理口を横に引つ張ったらサクがあたしのほっぺたに触れた。悲しそうに笑う

「心配してくれてありがとう。でも大丈夫だから」

その瞬間、窓が割れて何かが飛び込んできた。硝子の破片からサクを庇って、入ってきたものを見つける。

「ようやく見つけたぞ化け狐！」

「アンタこの前の！ ……何だっけ、名前」

「銀だ、銀！」

女鳥に捕まった健ちゃんを取り戻すためにあたしが戦った単純す

ぎる男。

サクを背中に押して立ち上がると、銀は鼻で笑った。

「役者がそろつてらあ。この前のケリつけようぜ、女」

「寿々よ。人の家壊してただで済むと思つてんの？ きつちり請求してやるから覚悟しなさいよ！」

「うちはそこまでお金に余裕があるわけじゃないんだからね！」

「サクは逃げて」

「でも寿々は？」

「あたしはこの馬鹿にきつちり世の中の常識たたき込むから」

「人を非常識みたいに言うんじゃないよ！」

「ちようど説明してた薙刀が役に立つわ。部屋で振り回せるか軽く試して突きくらい出来ることがわかった。」

「サクつて名前があるのに化け狐呼ばわりするあたりが非常識そのものでしょ！」

「足元を払おうとしたら銀が飛び上がった。その瞬間、持ってた大ぶりの刀が天井に刺さつて抜けなくなる。」

「げっ……！」

「第一、天井のある場所でデカイ刀振り回してんのがいけないのよ」
「あたしの薙刀が銀を捕らえかけたのに、次の光景で動けなくなつてしまった。」

「寿々！」

「それ以上銀に寄つたら狐の命はないぞ」

「仲間、いたんだ」

「サクを軽々と抱き上げて肩に担ぐ顔も知らない男。ガタイもよくて見た目から強そうなソイツはムツとしたまま外に出ていく。」

「あたしは自分の額に汗を感じた。」

「気付かなかつたか？」

「へらへらと銀は笑う。悔しいけど目の前のことに夢中になってた。」

「お前のそばには珍重なもんがあるな」

「あの子は別に珍しくも何もないよ。返して」

「それは出来ねえ相談だ。返したりしたらこっちが依頼主に殺されちまう」

首を鳴らし、ほんの一瞬であたしの身体を蹴り飛ばした。

タンスにぶつかつたあたしは動かない身体に苛つきながら、辛うじて使える目を銀に向ける。

「助けたいなら明日の昼までに見つけてみる。期限を過ぎたら、依頼主に渡す」

そこであたしは力尽きた。

「目が覚めたかい？」

「静さん……。サク、サクは」

荒れた部屋にはあたしと静さんしかいなかった。

腕や足に出来た擦り傷を静さんが一つ一つ消毒してくれる。

「帰ったときにや、終わってたよ。家は無茶苦茶、サクはいない、アンタは傷だらけで倒れてた」

「銀が、連れてったの」

着物をつかんであたしがそう言つと、静さんは小さく頷いた。

「先生も健太も、そのことを知らずに探してる」

「あたし二人に伝えてくる」

おぼつかない足で立ち上がるとふらふらした。

「まだ怪我の手当ては終わってないよ！」

怒鳴る声が聞こえたけど、今は怪我よりサク優先だよ。

下駄を履くのもまどろっこしくて、急いで玄関を開けたら淡い水色の着物姿の女の人が立ってた。

「遅かったようね」

呟いた言葉にあたしは動きを止める。

家に入ってきてまだ手当てされてないあたしの傷口に細くて真っ白な指がやわやわと触れた。

「サクを守ろうとしてくれてありがとう」

「もしかして、サクのお母さん？」

女の人はにこりと笑った。

「粗茶ですが」

「ありがとうございます」

一礼して向かいに座る。

「何で貴方の名前を知ってるか不思議？」

思ったことを言い当てられてあたしは素直に頷いた。

「力のある狐はね、夢の中で会話が出来るのよ。私もサクと毎晩話したわ」

会話を思い出してるのか、幸せそうに微笑む。

「貴方達のことを楽しそうに話すものだから、もうしばらく置いてもらおうなんて思っていたら……狙われてる狐の噂を聞いたの。それで山を降りてきたんだけど、遅かったわね」

「ごめんなさい、あたしがちゃんと守れてたら」

連れていかれるときの映像がまだ頭にこびりついてる。

「貴方は悪くない。狐は本来自己防衛の出来る獣、私の育て方に問題があったの」

水掛け論になりかかったところで、静さんのストップが入った。

「今議論するのは誰が悪いかわなくて、これからどうやってあの子を連れ戻すかわからないかい？」

確かに静さんの言う通りだ。

「明日の昼までに見つけないとサクは売られる、さらったヤツはそう言っていました」

サクのお母さんを見据えてあたしは尋ねる。

「あたしはどうすれば良いですか」

「あの子がどこにいるか、私にはわかる。でも怪我人を連れては行

けない」

淡々と答えたお母さんにあたしは膝立ちになって口を開いた。
でもあたしより先に、降ってきた言葉はあたしをフオーローするもので。

「これは今までの傷が治ってないんです」

「じゃじゃ馬で困ってるんです」

「先生、健ちゃん」

不敵に笑う二人が頼もしく見えた。

「今回の怪我じゃないんだ。連れてってくれないかい、うちのじゃ馬娘を」

静さんも、チャンスくれようとしてる。あたしはもう一度頭を下げて頼み込んだ。

「……わかりました。ともに行きましょう」

「無論、我々も手伝わさせていただきます」

「……貴方達は私の想像以上ですね」

初めて見た本当の笑顔は、サクにそっくりだった。

にじゅうなな。

夕焼けに染まった山奥の古いお寺、賽銭箱を椅子にして銀は平然と座ってた。

「遅かったな、寿々」

「主役は遅れて登場するものだって誰か言ってたから
どっかで聞いた台詞だけど誰が言ってたか記憶にない。
薙刀の入った袋を握り直してあたしはただ前を見る。

「お前面白いこと言うな」

「どうやら私達は眼中にないようですね」

「そんなこと言ってる場合ですか先生……」

穏やかな先生に健ちゃんがちよつと戸惑い気味。

「サクはどこ？」

「一番奥の部屋にいる」

「間違いないわ。サクの匂いがする」

斜め後ろにいたサクのお母さんがぼつりと呟いた。

「匂い？ そんなもんがわかるってこたあ、お前も化け狐か？」

次の瞬間、銀の頬を掠めて手裏剣がお寺の壁に刺さる。流れ出る
一筋の赤を銀は手に撫で付けて、にやりと笑みを浮かべた。

「いきなり物騒なもん投げるじゃねえの。寿々ちゃん」

「気色悪いからその呼び方やめてくれる？ わかってると思うけど
化け狐と寿々ちゃん両方のことだから」

留守を任された静さんから渡された手裏剣。銀にぶつけてやりな、
そう言っであたしに預けてくれた。

「その口二度ときけなくしてやる」

現われた図体のデカイ男数人に先生と健ちゃんが刀を向けた。

「外野は私達でやります。お母さんはサクの元に」

「寿々は銀やれ」

「良いの？」

「負けっ放しは嫌だろ」

あれ、バレバレじゃん。はつきり言っただけ嫌いなあたしは銀とやりたかったから嬉しかった。

「……ありがとう」

大男を避けて銀と対峙する。三度目の戦いで、たぶん最後になる。「俺様の本当の強さを見せてやるよ」

昼間と同じ大きな刀。夕日に染まる銀の顔は心底楽しんでるように見えた。

「さつき見たけど」

天井に刺した間抜けなところ。

「馬鹿、あれは三分の一だ」

「あつそ」

あれで三分の一はかなりまずいってことに気付いてんのかな。とりあえず長話は必要だからあたしから向かっていった。

思いつ切り振り下ろしてきた刀を避けて薙刀を前に押して突く。

「前より動き早くなったな」

飛び退いた銀の呟きにあたしは頬をゆるめた。

「ここに来る前、先生に言われたの。あたしは戦うたびに強くなるって」

貴方に必要なものは自信と気持ちです、そう言われてあたしは吹っ切れた。

「今ならアンタにも負ける気しない」

皆にもらった奪還のチャンス、ふいになんて絶対したくない。

「ふーん……そうかい」

「ねえ、この仕事楽しい？」

「ああ。刺激的で毎日幸せだね」

「刺激求めるなら他でも良いはずだよ、何で人を傷付けたりするの」「昔からだからな。わかんねえんだ、こればかりは俺様にも」

悲しそうに笑わないでよ。調子狂う。

銀の刀をすくい上げるように弾き飛ばして、首筋に薙刀を当てた。

「俺の首に刃向ける女がいるなんてな。お前の強さはその心意気か」
動じない銀にあたしは何も言えなかった。

「殺せ、腐っても俺だって侍だ」

「アンタなんか殺したってあたしの罪が増えるだけじゃん」

薙刀を布に包んで背を向けた。

「生恥さらしな。死んで全部水に流すなんて虫のいい話有り得ないから」

それが罪滅ぼししてもんでしょ？ あたしの言葉に彼は何の返事もくれなかった。

静さんが連絡してくれた加地さん率いる警察の方々が到着して銀達をそれぞれ捕まえる。

「寿々！」

お母さんのところから一直線に走ってきたサクを抱っこした。

「怪れない？」

「大丈夫だよ。寿々の方がいっぱい怪我してる……痛い？」

不安げな瞳はボロボロのあたしを映した。

「あはは……結構痛い。でもサクが無事で良かった」

そこに加地さんに両腕をつかまれた銀が通りかかる。

急に立ち止まって振り返ることなく彼は声を張り上げた。

「その狐、買うつて言ったの三人目の烏だ」

殺人専門の烏。これには加地さんも驚いたみたいであたしと顔を見合わせてた。

何も知らないサクは不思議そうに首を傾げる。

「アンタは誰が烏か知ってるの？」

「それは依頼主から口止めされてる。こっちだって本気で仕事してたんだ。流儀は貫く」

誰だってポリシーはあるよね。

あたしはそれ以上追及しなかった。

「教えてくれてありがとう」

「お前みたいな女に早く会えてたら良かったのかもな」

齒の浮く台詞にあたしは間の抜けたア水面をした。それを見て高笑いした銀は再び歩き出す。

「せいぜい長生きしろよ」

「余計なお世話よ!」

警察とのやり取りも済んで、お別れの時間がきてしまった。

「皆さんのお陰で助かりました。ありがとうございました、サクも言いなさい」

サクの肩に手を置いて深々一礼するお母さん。

「……ありがとうございました」

促された本人は口を尖らせてちよつと頭を下げただけ。

「もう行くんですか?」

「ええ、これ以上ご迷惑かけられませんし……何よりこの子がそばにいないと私が寂しいみたいです」

後者がホントの理由だ、あたしはそう思った。

そんな風に言われるとあたしだって何も言えないよ。

「でもサク、先生に恩返ししてない」

「良いんですよ。貴方のいた短くも楽しかった生活が充分恩返しですから」

先生は優しく笑った。

「さあ、行きましょう」

「寿々……」

「元気でね」

あたしにはそんなありきたりなことしか口に出せなかった。

歩き出す二人を三人で見送っていると、サクがこつちを振り返った。

「いつか、サクも寿々みたいに強くなる!」

大きな声は確実にあたしの耳に届いた。

「そのときはまた会いに行っても良い?」

「うん、待ってる!」

無事に笑顔でお別れ出来たあたし達は帰路につく。

きつと静さんが晩ご飯作って待ってる。

「妹みたいで可愛かったなあ……」

「気持ち切り替える」

ため息を吐くあたしに冷めた健ちゃんの一言。

「甘味屋連れてってくれたら切り替えるかも」

「……俺はお前の方が手がかかる気がする」

あたしは否定出来なかったからとりあえず黙ってサクのいる山を眺めた。

にじゅうはち。

「よいしょ、っと」

あたしの手には山盛りの野菜達の入ったカゴ。おつかい行った帰り道なの。

「あー、カラス！」

どっかの子が真つ黒な鳥を指差した。その声に自然と皆上を向く。
「鳥、か」

今までやってきた鳥との戦いを思い出した。盗み専門、密売専門。あとは殺し専門の鳥だけ。健ちゃんのお父さんの死は鳥が裏で糸を引いてる最後の一人。

「一体誰なんだろ」

加地さんから知らせはないままで完全に行き詰まっちゃってる。

「お困りですか？」

「……こんにちは」

暗い小道からこそそと現れた雄吉さんにあたしの顔は引きつる。でもひらめいた仮説に雄吉さんを見据えた。

もしかしてこの人なら、鳥について何か知ってるかもしれない。

「鳥という人をご存知ですか？」

「鳥？ 寿々さんは彼を知ってるんですか？」

あたしの口から出た言葉に僅かに目を丸くして雄吉さんは言う。

「あ、いえ……噂で聞いただけです」

っていうか今現在必死に調べてるんだけどね。

「寿々さん。鳥の情報、持っていないこともないですぜ？」

にやりと意地悪く笑う雄吉さん。

「ホントですか？」

自然と声のトーンが上がる。現金な性格だわ、あたし……。

「教えても良いんですが、一つお願いがありやす」

「お願い？」

「ある仕事を引き受けていたただきたいんです」

嫌な予感がびしびし来てたのは言うまでもない。

「大きい……」

雄吉さんに数時間かけて連れて来られたのは三階建ての立派なお城。周りは堀が囲ってあって、いかにも江戸って感じ。

たくさんの人が慌ただしく働いていて、あたしはあちこち目移りした。

「寿々さん、こちらへ」

「あ、はい」

何が待つてゐるかはわからないけど、烏を知るためだから我慢だつていくらでも出来る。

拳を作り、あたしはゆつくりと歩を進めた。

「これでどうやって仕事するんですか？」

ひらひらの赤い着物の上に薄い生地の絹を肩にかける。手触りだけで高級品っていうのがわかった。唯一の問題は、仕事と何の関係があるのかってこと。

「今から依頼主に会っていただきやす。詳しい話はそのときに」

「……わかりました」

雄吉さんが主導権を握るのはかなり嫌なんだけど、今回は仕方ない。

裾の長い上着を気にしつつ、あたしは雄吉さんのあとに続いた。

「どこまで行くんです？」

もう五分近く同じような廊下通つてゐる気がするんですけど。っていうか長すぎるよ廊下。

「もう少しです」

今更だけど、こんな簡単についてきて良かったかな。薙刀持ってくれば良かった。

「どうかしました？」

「あ、えっと……武器でも持ってくれば良かったかなあと」

「問題なしですぜ。必要な武器は揃ってやすから」

「はあ……」

そう言われてもあたしの中での雄吉さんへの疑いは晴れず、曖昧な返事しか出来なかった。

「えーっと……どちら様ですか？」

あたしの前にはきらびやかな格好の女の子がいた。腰に届くくらいの真つ黒な髪に、少し丸い顔。綺麗な黒い瞳を持ち、女のあたしから見ても、その子は可愛かった。

「桜と申します^{サクラ}」

「あ、寿々です」

礼儀作法ばっちりって感じだわ。あたしに来る周りの視線が痛くてしょうがない。一般人に高度な作法なんて求めないでほしいんだけど。

「彼女がそうか？」

女の子の横には立派な髭^{ヒゲ}を蓄えたおじさんが雄吉さんに聞く。

「はい、本人も承諾してます」

「雄吉さん、承諾って？」

まったくもって何も身に覚えがないんですが。

「どういうことだ？」

鋭い視線を向けるおじさん。

「あ、ちよーっとすみません。寿々さん、頼むから黙っててくださいな」

おじさんに愛想を振り撒いてから雄吉さんはあたしに小声で注意した。

「承諾した覚えがないんですから仕方ないじゃないですか」

「まったく貴方って人は……、ここまで来れば本当のことを言っても良いかもしれやせんねえ」

「本当のこと？」

「こちらのお方はこの城の主、つまり殿です」

「この人が……」

ふんぞりかえって見下すような瞳であたしを見るおじさん改め殿。確かに他の人より品格があるかもしれない。でもあたしは殿様が好きになれなかった。

「そして桜様は殿の血の繋がった娘」

「お姫様ってこと？」

「そのとおりです」

桜姫は申し訳なさそうに頭を下げる。年や体格には差を感じないのに、落ち着きのある部分はあたしの遥か上をいつてる。

「貴方に頼みたいのは姫の護衛です」

「……それで良いの？」

もっと嫌な仕事だと思ってたから拍子抜けした。

「三日です、三日の間桜姫を守れば仕事終了。いかがでしょう」

「やります！」

ここまですぐ小声のお話。あたしの返事に雄吉さんは満足そうに微笑んで殿様に頷いた。

「桜、寿々さんを案内してやりなさい」

「……はい」

憂いをおびた表情の桜姫はゆっくり立ち上がってあたしに近寄った。

「行きましょう、城を案内します」

「あ、どーも」

あたしは雄吉さん達に軽く頭を下げて桜姫についていった。

「ここが客間で、向こうが使用人達の部屋です」

「へえ……」

指差し説明をもらう。でもあたしには他に気になることがあった。

「ねえ桜姫、動きづらくないの？」

あたしよりずっと裾の長い着物を引きずって歩いてる桜姫。率直な質問に桜姫は微笑みながら答えてくれた。

「平気ですよ。幼い頃からずっとこれでしたから」

「ふーん……」

「ここが私の部屋です」

「広いねえ」

あたしの部屋の何倍あるんだよ……。

「たとえ部屋が広くても、私は外の世界の広さを知りません」

「外の世界？」

「私は生まれて一度も、外に出たことがありません」

悲しげな笑みにあたしまで辛くなる。

室内しか知らないなんてあたしには有り得ないことだったから。

「父は危険を避けるためだといつも言っていますが、私にはそう思えないんです」

「どうして？」

「この城は、たくさんの民の税金で成り立っています」

窓のふちに手をかけて外を見つめる桜姫。

「税金高すぎると家老達が言っても、父は耳を貸しません。じきに反乱が起こって私は死ぬでしょう」

伏し目がちにそう告げる。

「何で桜姫が死ぬの、桜姫が税金を決めたわけじゃないでしょ」

「父は城主ですから。私だって恨まれているはずです」

「そんなの間違ってよ」

悪いのは殿様の方なのに。でもお父さんを悪者呼ばわりされるのも桜姫からしたら嫌なんだろう。

あたしは泣きそうになった。

「寿々さん、私と友達になっていただけませんか？」

「え？」

唐突な質問にあたしは思わず聞き返した。

「城の中に私と親しい人はあまりいないので……あ、勿論寿々さんがよろしければですが」

控え目な提案にあたしは桜姫の手を握った。

「そんなの良いに決まってるじゃん」

むしろ大歓迎。

「では、桜と呼んでください」

「姫はつけないの？」

「いいません。桜と呼んでください」

「じゃあ、桜ちゃん」

流石にお姫様相手に呼び捨ては出来ないから。

「ありがとうございます、寿々さん」

桜ちゃんの顔は、今まで見た中で一番輝いてみえた。

にじゅうはち。 （後書き）

読んでくださりありがとうございます。詩音です。

更新しても後書き無しですみません……。色々次の話とか考えてまして。

さて、今回紹介するのは桜ちゃんです。彼女は同年代の友達がいな
い箱入り娘ですね。おっとりしてても、意志は強いと思います。
次回もお楽しみにー！

にじゅうきゅう。

姫の護衛生活二日目。あたしと桜ちゃんはわりとすぐに仲良くなつた。

「それで？どうなったんですか？」

「えっとねえ……」

今はあたしが見てきた外の世界を話してるところ。

「そうなんですか」

「うん、あたしは何も出来なかったけどね」

今までやってきたこと全部話しても、結局皆がいなきゃあたしは成立たないことに気付く。

「もしかして寿々さんは健太さんが好きなんですか？」

「……へ？」

何言ってるの桜ちゃんってば。

「違うんですか？」

「違うよ」

あたしと健ちゃんはそんな関係じゃない。

「桜ちゃんはそういう人いないの？」

「私ですか？ 私は……」

「失礼します」

桜ちゃんが口を開いた瞬間。長身の男が入ってきた。あたしはすぐに借り物の刀へ手を伸ばして桜ちゃんの前に立つ。

「寿々さん、大丈夫です」

「大丈夫って何が！」

「父の従者です」

あたしの着物をつかんで桜ちゃんは言った。

「……従者って何？」

「付き従う者、用心棒みたいなものですわ。龍^{タツ}、挨拶してください」

「……龍と申します」

彼は一言で言うと、損な人だと思った。無表情でつり目だから怒って見えるけど、桜ちゃんの言葉に頭を下げる礼儀正しさはある。「姫の護衛を任されたのが年の近い少女と聞いたので様子を見に来たんです」

「心配なんていりませんよ、寿々さんは友達ですから」

あたしの腕を絡めて浮かれ気味な桜ちゃんは言った。

「友達、ですか……」

「ええ」

その言葉に龍君の顔が変わる。ほんの僅かな変化に気付いたのはあただけだった。

「……では邪魔をしないようにしましょう。失礼します」

直角に近いお辞儀をして龍君は去っていった。

「相変わらず、貴方は冷たいんですね……」

もういない従者の出ていった先を桜ちゃんは切なげに見つめてた。頭の上で思い付いたことを尋ねる。

「もしかして桜ちゃんってあの人が好きなの？」

「な、何でわかるんですか？」

顔を真っ赤にして桜ちゃんが騒ぐ。

「見てればわかるよー。凄いわかりやすい」

「あ、あの、内緒にしてくださいね？」

慌てたせいか、桜ちゃんは早口でそうまくし立てた。

「好きって言っちゃえば？」

可愛いから即OKもらええると思うけど。

「滅相ありません！……私と龍では、身分の違いがありますから」

そうだ、あたしはすっかり忘れてた。この時代の恋愛は制限があって自由がないことを。

「いつか、私は見知らぬ方と結婚するでしょう。龍とは何もありません」

悲しそうな、諦めの微笑み。あたしの胸が痛みだす。

「……それで良いの？」

「仕方ありません。この時代の人間は皆そうやってきましたから」
そんな話に、あたしは納得なんか出来なかった。

「身分違いの恋、か」

まるで漫画みたいなんて思っちゃうけど、あたしの目の前で、実際にそれは起こってる。

「辛いだろうな……」

好きな人と一緒にいけないなんて。

小さい頃はお姫様なんて笑ってれば良い飾りみたいなもんだって
思い込んでた。でも今は、同情しそうなくらいあたし達と何も変わ
らないんだって思う。

「寿々さん？」

不意に声をかけられ、体を固くして後ろを向く。

「龍君」

「驚かせてしまったようですね」

「すみません、と呟いて頭を下げる龍君。」

「大丈夫。それより、こんな時間に何してるの？」

もう日付が変わってるくらいの真夜中なのに。あたしは寝れな
かったから散歩してただけど、皆寝静まった。

「えっ、と……ちよつと練習を」

右手をかざして木刀を見せてくれた。

「へえー、偉い」

「別に偉くなんかいいですよ」

謙虚な人だなあ、あたしも見習わなきゃ。

「強くないと、姫の側にはいられないから」

独り言のような小さな声にあたしは目を見開いた。

「……龍君、桜ちゃんのこと」

「言わないでください」

唇に指を触れ、悲しげな笑みを浮かべる龍君。

「ずっと心に止めてきたことですから」

どいつもこいつもあたしを苦しめないでよ。想いあってるのに伝わってないなんて辛すぎる。

「……わかった、黙ってる」

あたしは珍しく、人の幸せを願ってしまった。

さんじゅう。

「桜姫、殿がお話があるそうです」

「わかりました」

桜ちゃんのおしゃべりをさえぎったのは、殿様に命令された龍君だった。

「寿々さん……」

不安げな桜ちゃん。いつもより目がうるんでて不謹慎にも可愛らしく見えた。

「どうしたの？」

「いえ、ちよつと行つてきますね」

「うん、待ってる」

あたしは小さく微笑んで、桜ちゃんを見送った。

「おい」

「……何でいるの」

背後には久々に登場のカミサマ。相変わらず普通のおっさんみたいな格好であたしはため息を吐く。

「暇だからに決まってるんだろ」

「あ、そう」

まともな答えを求めたあたしが馬鹿だったわ。

「なあ、桜と龍をどうしたい？」

「どうにか出来るの？」

「ああ。お前には借りがいくつかあるんでな」

「借り？」

この人に何か貸してたっけ？ 冷たくあしらった覚えはあるけど。
「お前はもう何人かの命を救ってんだよ」

「……あたしが？」

「そう」

火のない煙草をくわえてカミサマは言った。

「だからお前の願い叶えてやるよ」

「あたしの願いねえ」

考えに耽ろうとした瞬間、慌ただしい足音が近付いてきて刀を持つ。

「寿々さん！」

「さ、桜ちゃん……！」

勢いよく入ってきた桜ちゃん。カミサマがまだいることに気付いてあたしはカミサマの前に立った。

でも身長差で顔とかもろに見えちゃってるだろうな……。

「寿々さん？ どうしたんですか？」

「や、別に？」

早くどっかに行きなさいよとカミサマに視線を送る。

「おい寿々、この姫さんに俺は見えねえぜ？」

それに気付いても、いたってマイペースなカミサマ。

「何だよ」

口を動かさず苛立ちながら尋ねるあたし。

「だってカミサマだもん」

「死ね」

冷酷な言葉を吐けば、カミサマは隅っこで凹んでいた。いい年してだもんとか使っつなつての。

まあとりあえずここは放置で。

「あの……寿々さん？」

戸惑いながら桜ちゃんはあたしに話しかけた。

「あ、ごめん何？」

「今すぐ城から出てください」

「え？」

「それはさせぬ！」

桜ちゃんのあとに続いて殿様達が息を切らしてやってきた。

一体何が起こってるんだろう。

「私は絶対に反対です！」

「こうするしか道がないのだ！」

あつという間に両腕を捕まれて、あたしは身動きの出来ない状態になった。

「寿々さんを離してください！」

「桜、わかってくれ」

「わかりたくありません。犠牲は私だけで充分です……！」

とうとう桜ちゃんは泣き出してしまった。意味がわかんないけど、あたしの友達を泣かさないでほしい。

「龍」

「はい」

「桜を連れていけ。彼女と二人で話をする」

「……わかりました」

苦しそうにあたしを一度見てから、嫌がる桜ちゃんの腕を無理矢理引いて出ていってしまった。

「手荒な真似をして申し訳ない」

「何があつたんですか」

両腕はまだ不自由だけど、気にしてる暇はなかった。

「明日、近隣の城の者達が攻めてくる」

物騒な話に自然と眉間に皺が出来る。

「町民が一揆を起こそうと申し出たらしい。ここは落城する」

殿様は城主なのに冷淡に物事を見てた。妙に引つ掛かるけどあたしはただ話を聞く。

「桜を傷つけるわけにはいかない。そこで、君の順番だ」

「あたし？」

「君に桜の代わりをしてもらう。戦うか逃げるかは自由だ、ただ桜が城から脱出する時間を稼げばいい」

「……敵の数は？」

「百以上だ」

それ死ぬ確率高いじゃん。

「もしあたしが断ればどうなりますか」

「桜は死ぬだろうな」

それでも父親なの？ 簡単に娘が死ぬとか言わないでよ。

握り拳を作って、正面を見据えた。

「やる」

それで桜ちゃんが助かるなら。

「良い返事ありがとう。これから明日の服を貸すからついて来なさい」

「わかりました」

桜ちゃんの部屋を出る前にあたしは足を止めた。

「ねえ、願い事決めた」

「……何だ」

カミサマの声が耳元で聞こえる。

「桜ちゃんと龍君に身分なんかには負けないくらいの勇氣を持たせて」

「わかった」

「何か言ったか？」

「いえ、別に？」

カミサマはあたしにしか見えないし、声も聞こえないわけね。

殿様の問いにあたしは笑みを浮かべて首を横に振った。

その後あたしはどの着物を着るかとか、武器はどれを使うかとかで一日を終えようとしてた。

あれから桜ちゃんとは一度も会ってない。反対してたから怒ったのかもしれないな……。

「寿々さん」

「龍君？」

「話があるんですが……」

「入っていいよ」

その言葉の少し後、龍君は静かに障子を開けた。

「話って何？」

「申し訳ありません」

畳に額がくつつくくらい頭を下げていきなり土下座された。

「ちょっと待つてよ、何の話？」

突然すぎてこっちも慌てる。

「姫の命を優先していることです。貴方は姫の友人なのに……」

「ああ、いいよ別に」

「何故です？」

ガバツと頭を上げてあたしを見つめる。食い入るような目付きに
あたしは顔をそらした。

「友達だから、生きてほしい」

「……貴方が死ぬかもしれないんですよ？」

「死なないよ。あたしそう簡単に死ねる人間じゃないから」

この時代に来て何回死にかけたことか。まあ、自分の身体の頑丈さにはびつくりしたけど。

「龍君はしっかり桜ちゃんを守ってね？」

「……御意」

複雑そうな顔してるけど、納得してもらえたみたいで良かった。

一人伸びをする。夕日がゆつくりと沈むのが見えた。

「明日も綺麗に咲いてやろうじゃないの」

さんじゅいち。

そして決戦当日。淡い桃色の着物を身にまとい、頭には薄い布を被ってあたしは桜ちゃんの部屋の隅にいた。

外はまだ静けさを保っている。正座をして五感全てを集中させてたら誰かが部屋に近付いてきた。

「予想より早いな」

あたしは短刀を右手に持ち、戦いの準備をする。

「寿々さん！」

「……桜ちゃん？」

事前にあつた話だと、もう城を出てる時間なのに目の前にいる。

「早く着替えてください、私が代わります。」

「何言つてんの、早く城から出て！」

「嫌です！ 寿々さんに私の身代わりなんて……！」

「わかってないなあ、お姫様は幸せになるのがおとき話なんだよ？」
小さく笑みを零し、あたしは言う。

「桜ちゃんの優しさは痛いくらいわかったから、行つて？」

「で、でも……」

まだ洩る桜ちゃん。一息ついてからあたしは思いきり息を吸い込んだ。

「出てつて！」

あたしの怒声に桜ちゃんは肩を跳ねさせる。涙は我慢出来ずに溢れてしまった。

「龍君いるんですよ！」

わかりやすく障子の影に映ってたよ。

あたしが叫べば龍君が素早く桜ちゃんを抱えてその場を走り去った。

「龍、離して！」

「……申し訳ありません」

あたしとの約束、龍君は守ってくれるみたい。

「寿々さん！」

笑顔で手を振ったあたしは、我慢出来ずに泣いてしまった。

「貴様はこの城の姫か？」

「だったらどうだと言っんです。物騒なものを持って何のご用ですか」

城から逃げるのは殿様と桜ちゃんと付き人の龍君。使用人達はこの命を懸けて戦う。

目以外の顔を布で覆った男が五人。あたしは出来る限り姫様っぽく演じた。

「勿論斬るのみ……！」

一人の武士があたしに斬りかかる。頭に被っていた布を相手に投げつけて短刀の鞘サヤを抜いた。

「自害でもするのか？」

えーっと、自害って切腹のことだっけ。

「するわけないじゃん」

あたしは時間を稼ぐだけなんだから。終わらせてとっとと他の人助けなきゃね。

「この女、本当に姫なのか……？」

「短刀一本で馬鹿みたいに強いぞ」

汗だらだら侍達。五人中三人は気絶させたからあと二人。

「馬鹿って言わないでよ」

強気に言ってもあたしだって流石にきつい。

襲ってくる刀を短刀でかわしたものの、刃が折れて絶体絶命。

「貴様の悪いところは最後まで斬れないことだ」

息切れしてるあたしの前で、偉そうに笑う侍。

確かに、殺さないのはあたしに不利な状況を作ってる。目を覚ました一人が仲間を呼びにいったせいだ。

「袋叩きなんて悪趣味じゃない？」

「悪趣味かもしれないがこれは戦だ」

一対一なら短刀でもなんとかなったかもしれない。でも今、あたしは十人近くに斬られそうになってる。

「あたし、桜姫じゃないんだけど」

「そのようだな。安心しろ、仲間が搜索に向かった」

結局あたし、誰も守れてないじゃん。

「おとなしく死ね」

あたしはもう終わるかもしれない。先生、静さん、幸宗、健ちゃん。

「ごめんね」

あたしとうとう死ぬみたいだわ。

「何に謝ってんだよ」

「……え？」

目の前にあるのはあたしより広い背中。聞こえたのは懐かしくさせる大好きな声。

「無事か、寿々」

「健ちゃん……！」

武士数人を吹っ飛ばし、あたしをかばうようにして健ちゃんは現れた。

「何で健ちゃんがここに」

「俺だけじゃない」

あたしを立てさせて健ちゃんが外を指差す。

「寿々ー！」

小さな体で刀を握る幸宗の姿。あたしの視線に気付くとぶんぶんと手を振ってきた。

「幸宗……」

「若い者にはまだまだ負けんさ」

「静さん」

元気に薙刀を振り回す静さん。

「私の弟子を返してもらいにきました」

「先、生……」

そして金色の髪をなびかせて、敵を倒す先生。

「皆で迎えに来た」

溢れそうな涙を袖で拭いて両頬を叩く。

「健ちゃん、他に刀無い？」

「お前は刀よりこつちだろ？」

ずっと健ちゃんの背中に担がれてた包み、渡されたのはあたしの薙刀。

「これ……」

「持ってきた」

「ありがとう」

戦ってる最中なのに、あたしは幸せだと感じた。

「一通り片付いたな」

「他の皆は？」

伸びてる侍達を無視してあたしは健ちゃんに聞いた。

今ちゃんと立ってるのはあたしと健ちゃんの二人だけ。

「他のところに移動したんだろ。幸宗は警察呼びにいった」

敵の刀を取り上げてまとめる健ちゃん。納得してあたしも手伝いを始めた。

「寿々」

不意に健ちゃんが口を開く。

「何？」

「俺怒ってるんだけどわかってたか？」

「え、健ちゃん怒ってんの？」

全っ然気付かなかったけど。

知らなかったことがわかるとあからさまに大きなため息を吐かれた。

「お前こんなとこで何やってるんだよ」

「え、ああ……」

雄吉さんから情報をもらうため、なんて言っているのかな。

「まあ雄吉さんから全部聞いたからわかってるけどな」

何その確信犯！

「何で話さなかった」

真っ直ぐあたしを見る健ちゃん。

「俺はそんなに頼りないか？」

「違……っ、話す暇がなかっただけで」

そんな悲しそうな顔しないでよ。上手く言葉がまとまらないあたしに健ちゃんは笑ってあたしの頭を撫でた。

「今回は許す。一人で何でも抱えるな」

「……ごめん」

確かに考えなしだったかもしれない。あたしは素直に頭を下げた。

「その格好、意外と似合ってるぞ」

不敵な笑みを浮かべ、健ちゃんは言う。

「……健ちゃん、後でしばらくから覚悟しといて」

あたしも満開の笑顔で応戦させてもらった。

さんじゅうに。

結局、落城はせずにすんだ。あたし達部外者の戦いに触発された
使用人達が全力でやりあつたらしい。

「ねえ、雄吉さんが教えにきたの？」

先生達を待つ間に健ちゃんに思つてたことを聞いてみる。

殺そうとしてた人のやる行動じゃない気がするんだけど……。

「こんなに大規模になるとは予想外だつたらしい。だから不安にか
られて先生に言いに來たそうだ」

「ふーん……」

相変わらず小心者なんだ。まあ、あたしも人のこと言えないけど。
「皆さんお疲れ様です」

先生と静さんはのんびりこちらに近付いてくる。今回も警察のお
世話になったあたし達は事情聴取を受けた。勿論大人ののみ。

「まったく……早く歸つて休みたいってのに」

愚痴つてた静さんだけど、顔は凄く生き生きしてた。やっぱりた
まにやる運動は良いもんだね。

「雄吉さんつて他に何か言つてなかった？」

「いや、何も？」

平然と約束破つたなあの人……！

「あつしを呼びましたかい？」

出たよ張本人。身軽ななりをして雄吉さんがひょっこり現れた。

「情報くれる約束じゃないですか！」

またあたしを騙したわけ？ それならもう情け容赦なしでいくよ。
「情報ならもうあるはずですぜ」

「は……？」

「烏はこの城の殿様」

一緒にいた皆の空気が変わる。

「あの人が、烏なの？」

驚きのあまり声がかすれる。

「ええ」

「今どこにいるんだ」

健ちゃんが雄吉さんに詰め寄る。

「この城の本当の姫と逃げていやす」

小さく舌打ちして、健ちゃんが外へ向かおうと廊下から庭に降りた。

「健ちゃんどこに行くの！」

「追う、まだ近くにいますはずだ」

あたしが止めるのも聞かないで健ちゃんの後ろ姿は遠のいていった。

「先生……」

追い掛けることも出来なくて、あたしは眉を下げる。

「私が行くべきかもしれませんが大役すぎます。寿々さん」

「はい……？」

「行ってください。貴方なら彼も止まるはずですよ」

全てを見透かしたような微笑みで先生が言う。

「わかりました」

答えると同時にあたしは走り出した。

「どこに行つたんだろ」

逃げたと思われる森の中に入ったあたし。せっかく着飾った桜ちゃんの着物はぐしゃぐしゃなってる。

「健ちゃん……」

あたしの力なんてほんの少しだ。ちっぽけで頼りない。

でも、全力で健ちゃんを止める。大切な人を守りたいから。

生い茂る草木をかきわけて、あたしは少し広くなった森の中心にたどり着いた。

「健ちゃん！」

そこには腰を抜かした殿様とそれを支える桜ちゃん。二人の前で健ちゃんは龍君と刀を抜いて睨みあっていた。

「健ちゃんやめて！」

「邪魔するな！」

あたしの声が消えるくらい大きな声で健ちゃんが怒鳴る。あたしは自然と肩を震わせ、口を開けなくなった。

「お前が、烏か？」

鬼のような鋭い視線が殿様を射る。殿様は質問に答えるかわりに、小さく悲鳴を上げた。

「殿に向かって無礼な発言をするな！」

龍君も負けないくらい大声で怒鳴る。桜ちゃん達は今にも泣きそうな顔で様子を見続けている。

「人の父親を殺したくせに何が殿だ」

ドスのきいた声に殿様は後退る。

「絶対に許さない」

健ちゃんの目が、いつもと違って見えた。獣のような野生のものを感じて身震いする。

「やめて……健ちゃん」

か細い声を出しても本人に届くはずはなく、健ちゃんと龍君は刀を交えてしまった。

「くそ……っ！」

「どうした？ 動きが随分鈍いな」

戦いはどう見ても健ちゃんの優勢。怒りに身を任せた健ちゃんは尋常じゃない速さを見せつける。

瞬間、龍君の刀が弾き飛ばされた。

「終わりだな」

喉の奥を震わせて健ちゃんが笑う。駄目だ、このままだと確実に皆死ぬ。

そう思ったあたしは勝手に体が動いてた。

「お前はあの世で先に待ってる」

勢いよく刀を振り下ろしかけた。

「寿々……」

「もうやめて」

座り込む龍君の前に立って両腕を広げた。

目を見開いて驚きを隠せない健ちゃんは歯を食いしばった。

「退け」

「嫌」

「退けって！」

「嫌だつてば！」

退いたら健ちゃんが人殺しになっちゃう。そんなの絶対に嫌だよ。

「お願いだから、こんなことしないで」

「寿々、退いてくれ。そうじゃないとお前も殺す」

「良いよ」

「自分が何言ってるかわかってるのか！」

「わかってる。あたしが代わりになるから他の人斬らないで」

「……本気か？」

あたしは首を縦に振った。

ホントは恐くて恐くて足ががくがくする。でも健ちゃんの手だつ

て、あたしと同じように震えてた。

「命を奪うのは許さない。あたしを烏だと思っていいから」

黙り込んだのは了解の意味だと思う。ゆっくりと間合いをとって

健ちゃんが刀を振り上げた。

「寿々さん……！」

桜ちゃんの声が遠くから聞こえた。頭がぼーっとして何も考えられない。

ただわかったのは、目の前に刀が来ることだけだった。

「俺が、寿々を殺れると思うか？」

喉がヒューヒュー鳴ってる。汗が身体中から噴き出して、ゆっくりあたしは呼吸を繰り返した。

「答えは否だ」

あと一センチ前に進んでたら確実にあたしは死んでた。

刀を鞘に収めてあたしをじっと見る健ちゃん。

「俺を生かした相手を殺すことは出来ない。烏は警察に突き出すかな」

「……うん」

このときのあたしは健ちゃんが元に戻ったことに安心しきって、何も気付いてなかったんだ。

健ちゃんの背後に寄る黒い影に。

「ぐあ……っ！」

隣のうめき声に初めて感じとった。

「健ちゃん？」

真っ赤な飛沫がちらつく。何が起こったかを考える前に健ちゃんは崩れ落ちた。

勢いよく後ろを振り返る。そこには龍君の刀を持った殿様……烏がいた。

「ははは！ 当然の報いだ！ 俺の邪魔するヤツは皆死ぬがいい！」
狂ったように叫ぶ姿は醜かった。あたしは直視することも出来ない。

「殿！」

「お父様やめてください！」

桜ちゃんと龍君の叫びはまったく届かず、高らかに笑う烏をあたしは鞘で殴って気絶させた。

「健ちゃん……」

後ろで桜ちゃんが龍君に警察と医者と呼ぶように指示していた。

あたしは無我夢中で、何度も名前を呼んだら健ちゃんが軽く咳こんで薄く目を開ける。

「健ちゃん！」

「何、泣いてんだよ」

健ちゃんの口端から血が流れるのが見えた。あたしの頬に触れた

健ちゃんは弱々しくて、涙が止まらない。

「泣くな」

「うるさい……泣かさないでよ」

馬鹿にしてるのに、あんまり優しく笑うから。あたしは健ちゃんの掌を強く握り締めた。

「寿々」

「何……？」

「好きだ」

健ちゃんはそれだけ言って気を失った。

さんじゅうさん。

「やるだけのことはやりました」

冷静すぎる医者の声が、あたしの脳味噌をやんわり刺激する。

青白い顔で布団に横たわるあたしの大好きな人は死んだように眠っていた。

「助かる……？」

無意識のうちにあたしは医者にすがって言った。困惑した表情の医者にあたしは言葉を続ける。

「ねえ、助けてよ。医者でしょ？」

「寿々、やめな」

静さんがあたしの肩に触れようと手を伸ばす。それにも気付こうとせずにあたしは再度口を開いた。

「健ちゃんを助けて……！」

「寿々！」

強く肩をつかまれて小さく息を飲んだあたし。

「静さ……」

「少し寝たらどうだい。昨日は寝てなかっただろう」

確かに、昨日は一睡もしてない。でも今だって眠れる状況じゃないのだ。あたしは断ろうとしたが静さんの命令で自室に戻った。

「……健ちゃん」

ぽつり、と名前を呼べば涙腺がゆるむ。

お互いの気持ちがあったのに、こんなことになるなんて思わなかった。

「寿々」

あたし一人しかいないはずの自室から声がした。

「カミ、サマ？」

「ああ」

姿を現さないカミサマは重苦しい声であたしに言い出した。

「アイツが怪我したのは俺のミスだ」

「……え？」

意味がわからなかった。聞き返すあたしをカミサマは何も言わず同じ言葉を告げた。

「伊尾健太が怪我したのは俺のミスだ」

「どういう、こと？」

だんだん言葉の意味がはつきりしてきて。

「ねえ、カミサマのミスって何？ それがなかったら、健ちゃんは何も怪我せずに済んだの？」

姿が見えないのがもどかしくて苛立たしくて、あたしは自分の部屋を歩き回った。

「それは半分当たりで半分違う」

「じゃあ何？」

遠回しな口ぶりにあたしは更に苛ついた。

「お前が止めてなかったら……お前がいなかったら、ヤツは鳥を殺して自殺してた」

「は……？」

健ちゃんの運命を変えたのは、あたしってこと？

「まさか鳥がああなるとは、俺にもわからなかった。すまない」

素直すぎる謝罪に、怒りの矛先を見失ったあたしは自分の太股を叩いた。

「健ちゃんは、死ぬの？」

「本人次第。俺にはそれしか言えない。」

「助けてよ、あたしに貸しがあるんでしょ？」

声が震える。もう頼れる人がいないんだよ……。

「無理だ。もう貸しは返した。桜姫と龍の発展を願ったはずだ」

確かに、あたしは貸しをそれにした。

「実際、あの二人が城の建て直しをするようになったら？」

健ちゃんのことと頭がいっぱい過ぎて、桜ちゃん達のその後のこ

とを何も知らなかったんだ。

「鳥は捕まった。運命は変わっていく」

「ねえ、何であたしを呼んだの？」

「頼まれた。ある人間に」

その後、何を言って叫んでもカミサマは返事をくれなかった。

「健ちゃん」

皆が眠る真夜中に、あたしは健ちゃんの様子を見にきた。

昼間と変化がなくてまた泣きそうになったけど、眠ったままでもいいから健ちゃんにあたしの決意を聞いてほしかった。

「あたしは穴から落ちてきたんだ」

夜の静けさに小さくヒビを入れた。

「違う世界の人間だけど、ここは居心地よくて……前の世界よりあたしの大切な場所になってた」

ああ、また涙出てきた。鼻の奥がつんとして、唇がわなわな震える。

「先生と静さんとか幸宗とか……健ちゃんがいてくれたから、あたしは幸せだった」

嘘偽りなく言える。

「あたしだって、健ちゃんが好きだよ……」

もつとちゃんとした形で言いたかったのに。両想いだねって、笑いたかったのに。

うつ向いて涙を堪える瞬間、布の擦れる音がした。

「言わなかったか？ 泣くとブサイクに見えるって」

「健、ちゃん……？」

「何だよ」

まだ顔色はよくなかったけど、不敵に笑う姿にあたしはまた泣いてしまった。

「これで良かったのか？」

少し離れた縁側で、中年男は尋ねた。

「ええ」

侍は目を閉じて、二人の幸せを喜び噛み締めているようだ。

「先生も随分粹なこと考えてくれるよ、まったく……」

「貴方……カミサマがいなければ、私の考えも実行には移せませんでした」

信頼しきった表情で侍は言う。

「ま、貸しは結局使う暇なく現実になったからさ。俺はただ貸しを返しただけってことになる」

ポリポリと頬をかきながら照れ隠して答えた。

「貸しを理由にして、純粹に彼女の幸せを願ったんじゃないですか？」

「……敵わねえなあ、先生には」

諦めたような乾いた笑い。

「カマかけただけですよ」

「なあ、先生もしかして俺よりも未来が見えてる？」

「さあ？ どうでしょうね」

侍はただ笑っていた。

さんじゅうよん。

「何か用ですか？」

後ろを見てなくても、もう感覚でわかる。

「カミサマ」

「お前の未来を決めに来た」

「……お待ちしました」

正座をしてカミサマに向き合う。自然と微笑んでしまうのは、心に余裕でも出来たのかもしれない。

「決めた顔だな」

「勿論」

何か今、カミサマも良い人に見えてる。

先生も静さんも幸宗も、健ちゃんも相変わらずだけど、雄吉さんは少しだけ心を入れ換えて商人になるらしい。少しの変化でもあたしは嬉しかった。

「答えは？」

「ここにいたい」

もう何も迷いはなかった。

「あたしが皆の運命を変えたんだから、このままでいたい。大切な人と一緒に生きたい」

「……素直すぎて恐えよ寿々」

「またボコされたいの？」

「ごめんなさい」

土下座された。カミサマに謝らせるなんて、あたしは凄いのかなんて今更思う。

「寿々さん」

「あ、先生」

「カミサマは、もう帰りましたか？」

「あー、もう来ないらしいです……え？」

隣を見れば相変わらず微笑んでいて。

「私が貴方を連れてくるように頼んだんですよ」

「は……」

平和になった今、どんでん返しされた気分だ。あたしは乾いた笑いを浮かべて先生をとんでもない人と判断した。

侍は真っ直ぐだ。自分を信じて運命に逆らわない。あたしにそんな真似は出来ないけど、共に生きるなら出来る。

あたしは今日も江戸の町を歩く。空に開く穴を見上げながら。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2798c/>

侍HOLE!!

2010年10月8日13時39分発行